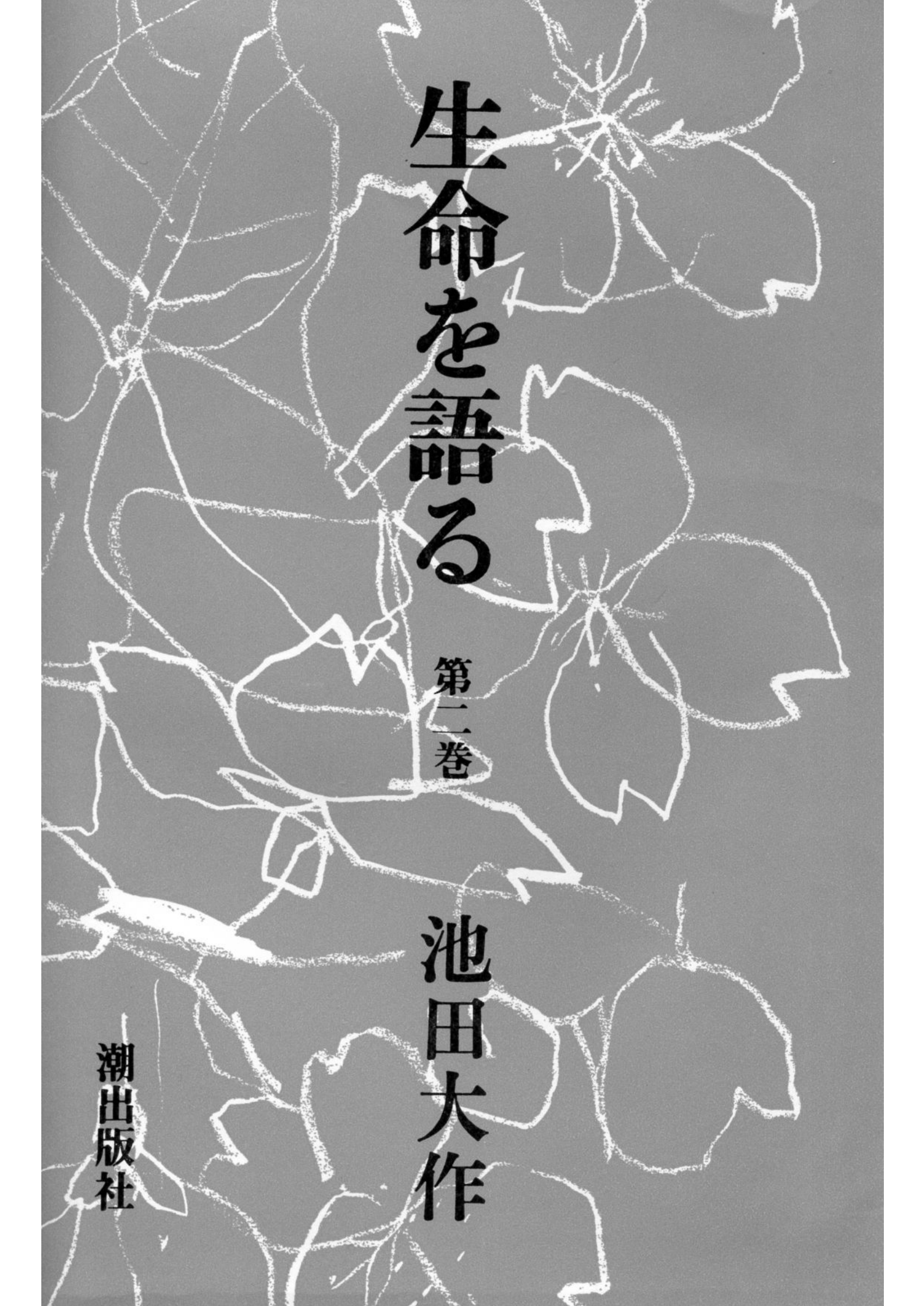




生命を語る

第二卷

池田大作

潮出版社



著者近影

生命を語る

第二卷

目次

人間らしい生き方へ1〉……………7

——十界論をめぐって

戦争と平和 9

三悪道と修羅界 24

人と天の世界 53

人間らしい生き方へ2〉……………71

——十界論をめぐって

欲望にひそむ魔性 73

二乗の境涯について 88

菩薩界と仏界 110

自己変革の道……………139

体験三題 141

十界互具の方程式 157

人間革命とは何か 181

生命はいかに運動するか…………… 207

生命のもつ可能性 209

生命の本体——相・性・体 216

生命の機能——力・作・因・縁・果・報・本末究竟等 225

個性化の原理…………… 247

「五陰世間」について 249

衆生と国土 267

「一念三千」の実践 287

人間らしい生き方へ1✓

——十界論をめぐって

戦争と平和

——二十数年にもおよぶ殺戮さつりくと残虐ざんぎやくのかぎりをつくしたベトナムの戦火も、ようやくおさまろうとしています。たしか昨四十七年の暮れのことだったと記憶しています。ユエを訪れた一人の記者が、「ベトナム人は平和を恐れている」と指摘したレポートを、私はいまでも忘れることができません。恐れているといっても、平和の到来を待ち望んでいないということではもちろんなくて、彼らほど本当の平和を希求している人びとはいないというのは事実です。にもかかわらず、どうして彼らが平和を恐れるかという、人びとはただでさえ「戦争」のためにひどい目にあってきた、このうえに「平和」などという、いままですれ違ったこともない代物しろものがやってきたのでは、何が起きるかしたものの

ではない、というのです。——平和ムードになれきっている私たちにはちよつと実感できそうもない悲しい逆説ですけれども、なにしろ、ほとんどの人びとが平和を一度も体験したことがないというんです。

池田　すさまじいまでの悲劇だね。戦乱の地獄絵図をくぐりぬけて、やっとの思いで和平へとこぎつけたのに、「平和とはいったいどういふものなのか」と首をかしげざるをえない人びとの苦悶が、私の胸に突き刺さって離れない。

二十数年といえ、生まれたばかりの赤ん坊も、立派な青年になる年月だ。その間、戦火におびえ、焼土を住み家としてきた青年の心に、たとえ少しでも人間らしい生き方への衝動がこみあげてきたとしても、つぎの瞬間には、絶望と不信の暗闇くらやみにすっぽりと包まれてしまったにちがいない。死以外には信じられなかった人生——それはまさに、現代の地獄というべきだろうね。

——会長の『人間革命』の冒頭の一節は、強烈な戦争否定の言葉で始まっています、その意味の深さがわかるような気がしてきました。

「戦争ほど、残酷なものはない。戦争ほど、悲惨なものはない。だが、その戦

争は、まだつづいていた」とありますが、平和を希求する人間本来の心情さえも、断ち切ってしまうところに、戦争のもたらす最大の悪がひそんでいそうです。すね。

池田 誰人^{だれびと}たりとも、戦争を憎み、安らかな人生を求める心に変わりはあるまい。だが、そのような願いさえも、疑惑と不安でおおってしまう所作^{しよさ}のなかに、私は地獄の残酷さをみるような思いがする。

——地獄といいますと、幼いころ「三途^{さんず}の河」や「獄卒^{ごくそつ}」「閻魔^{えんま}」などにまつわる話をよく聞かされたもので、子供心にも、恐^{こお}いところだなと脅^{おび}えたりもしました。現代っ子なら一笑に付してしまうでしょうし、怪獣のほうが閻魔や鬼よりずっと切実感があるでしょうが、まあそれはともかく、これらの話に出てくる地獄の責めというのは、けっして架空のものではなく現実の人生に実在している。もっと正確にいえば、私たちの生命そのものの苦しみが地獄なのです。そしてこの世の中で人間のつくりだす最大の地獄こそ、戦乱^{ちまた}の巷であるといえないでしょうか。

池田 地獄は苦悩の極限です。日蓮大聖人の『^{むしもち}十字御書』に「抑^{そもそも}地獄と仏とはいずれの所に候ぞとたづね候へば・或は地の下と申す経文もあり・或は西方等と申す経も候、しかれども委細にたづね候へば我等が五尺の身の内に候とみへて候」とあるとおりです。地獄といい、仏といっても「我等が五尺の身の内」にある。

仏法は、生命自体が内より感じている境地を、あくまでも追究していく。生命感という言葉を使ってもいいでしょう。生命そのものの感じです。それは、けっして、ごまかすことのできない感覚だと思う。たとえ他人の目をごまかすことはできても、自分自身を偽れない生命の実感です。苦しみとか悲しみとか、満足感とか怒りとかいったさまざまな感情に揺り動かされるのが私たちの生命です。あるときは苦しみ、またあるときは喜びの潮に^{ひた}浸る。もし私たちが苦しむときにつくり笑いしようとしても、顔の筋肉がこわばってうまくいかないものだね。たとえば、うまくつくり笑いをしたとしても、生命の「我」が苦しんでいることに変わりはない。また、そのような生命感を、もし客観的に表現しよ

うとすれば、状態とか、境涯とか、変化相などということもできるでしょう。

考えてみれば、私たちの周囲には、じつに多彩な変化相を示す生命的存在が、それぞれの生を営んでいる。人間の生命でも、顔形が異なるように、性格も個性も人間性も、ぜんぶ違っている。一卵性双生児でも、厳密にいえばずいぶん相違点をみいだせるだろうね。だが、いかなる人間生命であろうと、戦乱に巻き込まれれば苦悩を逃れることはできない。子供の死、親の重病に直面して苦しまない生命の「我」もありえない。また、自分の願いがかなったときには、だれでもうれしいものだ。読書に浸る精神的な喜びも万人共通の心情といえますね。このようにみてくると、人間生命の「我」は、一見すれば千差万別でありながら、そこになにか共通の基盤があるように思えてくる。

——たしかに、男性でも女性でも、財産があろうとなかろうと、またいかなる職業であれ、愛している人、心の通い合った友人と別れるのはつらい。そうした人との別離は、悲哀をもたらす。ところが、心の通じ合った人との再会 はじつに楽しい。何物にもかえがたい親愛の情に浸ることができます。

また、平凡な人生であっても、健全な家族と社会に守られての誠実な日々は、豊かな人間性をはぐくむものだと思います。生命の「我」は充実した楽しみを味わっている……。

池田 三十七億の人類、これらすべての人間生命に共通の基盤は何かというと、それは生命の「我」の実感であり、その生命のあらわす境涯ではないかと思う。苦や楽の実感は、皮膚の色をこえ、民族をこえ、いわんや国家のワク組みなどをこえた、人間としての普遍の実在でしょう。仏法の眼は、あらゆる生命内奥の「我」を見通し、その境涯に応じていくつかのグループに分類している。哲学用語を使えばカテゴリーといってもよい。

——それが仏法で説く「十界論」ですね。具体的には、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界、声聞界、縁覺界、菩薩界、仏界の十種類になります。でも、この十界論はずいぶん誤解されているところもありますね。

地獄は先ほど出ましたが、餓鬼界というと、子供を罵る言葉として使われています。少年まんがにも「みてろガキ！」などと書かれていましたが、それで

ちやんと意味が通じているのですね。

畜生は他の生物、とくに牛や馬を指しますし、悪態をつくときに使われたりしている。天国は東洋式にいうと天人の住む国で西洋式にいうと神の国となり、この現実世界とは別の世界になっています。ひどいのは仏界についてで、死人は仏であるなどと思い込んで平然としています。

池田 まさに仏法が死んでしまった悲しい姿です。だが、日蓮大聖人の御書には、十界論がまことに端的に、しかも明瞭に説かれている。十界のうちの六道（大界）だけを、ひとまず日蓮大聖人の『かんじんのほんぜんしやう観心本尊抄』から引用すると「しばし教ば他面を見るに或時は喜び或時は瞋いかり或時は平に或時は貪ひさばり現じ或時は癡おろか現じ或時は謠曲てんきくなり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・謠曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり」とあります。

大聖人の眼には、あらゆる人びとの生命の「我」のありさまが生き生きと映し出されたのではないかと思われます。いかに外見を飾っていても、地獄の責めをうけている「我」もある。いかに悠然としているようにみえても、その実

飢餓感にさいなまれている「我」もあるだろう。本能的欲望に支配されている「我」、エゴのとりことなりはてた「我」、理性と良心にコントロールされた「我」、さまざまな種類の喜びに包まれた「我」などの、ありのままの姿が、仏眼にはくつきりと映っていたのだろうね。生命の本質の実相です。

このように生命の「我」の実相をうつしとって、そこに内包された境涯とか実感を基準にして分けてみると十種類を出ていなかった、またそれ以下でもなかったということだろうね。

——必要にして、最小限度のカテゴリーの数が「十」というわけですね。ちよつと考えると、なにも十界でなくても、十二界でも、また八界あたりでもよさそうなものだと考えがちですけれども……。

池田 階段を数えているようだね（笑い）。だが「十」という数字は、十進法に合うからだとか、八界ではもの足りないから少し付け足そうというような考えからでてきたものではないと思う。十界論が何を説き、何を示しているかを見抜くことが必要です。参考のために、具体例を少しあげてみよう。

たとえば、苦しみという「我」の実感も、それを分けていけば、ほとんど無限の種類になってしまふでしょう。不治の病にさいなまれる苦しみもあれば、御主人が酒飲みで生活苦にあえぐというのもある。不良の息子をもつ母の心情、娘に背^{そむ}かれた父親の心のかなど、すべての苦悩の性質はまったく同じというわけではないはずだ。似ているところもあるし、ニュアンスの違いもある。だが、生命が苦悶するという事実自体においては、一つのグループにまとまってしまう。だから、たとえば、不治の病を必死の思いで克服した人などは、他の人の病苦をそのまま実感できるし、それと同時に、たとえ種類は違つても、母を失つた子供の心情とか、息子を戦場に送らねばならない親の悩みなども、自分の生命の痛みとして受けとめられるのです。すべての人びとの苦は、そのあらわれる形からいえば「異^いの苦」ではあるけれども、苦しみという境涯、その奥底の生命の「我」にあつては「同一苦」であるともいえましよう。

また、畜生界という境涯は、本能のままに行動する生命の「我」をあらわしているが、それも、本能の種類からさらに分けると、性欲や食欲や睡眠欲など

に細分されるでしょう。食べることだけが生きがいだというような人もいるだろうし、一日中何もしないで眠ることが人生最大の楽しみであり、目標だという人もいるかもしれない。

また、セックス・アニマルという言葉もある。麻薬などに溺れて人生の歯車を狂わせていく生命もある。それぞれの行為はまったく違っているであろうし、人生の送り方も違っている。しかし、本能に動かされる愚かな生命であるという点からみれば、やはり畜生界というグループに入ってしまうであろう。まあ、他の境涯についても、順次思索していけば納得のいくことだと思う。

こんどは、八界ぐらいにならないかというので、地獄界と餓鬼界をいっしょにして「地獄餓鬼界」とか「地鬼界」とか（笑い）——あまりよい名前ではないけれども、仮りに命名してつくったとしよう。すると、そのような生命の「我」が感じるのは、苦悩なのか、それとも飢餓感なのか、いったいどう説明すればよいのか混乱してしまうにちがいない。地獄界というのは、どんな欲望もあらわせず、まったく自由を奪われたときの自我の「瞋り」であり、「うめき声」

です。つまり、なに一つ自分の思いどおりにならなくて、悲鳴をあげている状態です。いや、本当は叫び声すらあげることもしないほどの苦しみでしょうね。ところが、餓鬼界では食欲というあくなき欲望の発現がある。その欲望が「貪る」^{むさぼ}あまり、飢えの感じを引き起こすと考えられる。

——ちよつとわかりやすい例をあげますと、熱が四十度ぐらいも出てまったく食欲不振に陥るとか、歯がズキズキ痛んで食欲どころじゃないとか、最愛の子が急死して食事も満足にのどを通らないとかいう場合はどうでしょうか。地獄界であることは間違いないけれども、餓鬼界であるとはとうていいいがたい。ところが、熱が少し下がって食欲が出てきた。なのに流動食をちよつぴりしか食べさせてくれないとか、歯の痛みは少しやわらいだが好物が堅いもので、それをかむこともできない——という状態は、地獄界を脱して餓鬼界にいる状態ですね。

池田　だから、苦悩と飢餓感、瞋りと貪りは、生命の実感からいっても、生命の内容からしても、まったく質的に違った境涯です。質的にまったく異なる

二つの生命状態を統合することはできないし、また現実にも存在しない。

——よくわかりました。そこで、こういう説明の仕方はどうかと思うのですが……。十界を、色にたとえるわけです。ちようどプリズムに太陽光線をあてると、七色に分かれていきますね。雨あがりに虹のかかった状態のようなものです。

十界の場合は十色なんですが、生命の「我」が、それぞれの特質をもった十種類の色に染められると考えます。苦しみの色、喜びの色、怒りの色、歓喜の色などです。具体的には、人によって思い浮かべる色は違うでしょうが、それでも、苦しみとか悲しみの色などというのがあるのではないのでしょうか。人間共通の美的心情として、ある程度、想起する色も一致すると思います。たとえば、苦しみや悲しみは灰色がかっているというようにです。まあそれはともかく、地獄は苦悩の色に染められ、天界は喜びの色たとえばバラ色である、というふうに考えられないでしょうか。

池田 思索の糸口としては、そういうことも考えられますね。たしかに生命

の「我」は十種類の色に染められているでしょう。そう考えてもよい。だが、その色は、着物を染めるように、外から着色したものではない。生命の内奥からにじみでる色彩です。

——その場合、その色を外から観察すると、生命の「我」の境涯が、ある程度わかりますね。バラ色を見て地獄の色だなんていう人もいないでしょうから……。

池田　そこで、これから十界論を具体的に掘り下げていくにあたって、そのまえに提案しておきたいことがある。

十界論は、生命感という、生命の「我」の主体的な実感を柱として成立している。この点のみをみれば、主観的カテゴリーと考えられます。しかし、その生命感という主観的なものととらえた基準は客観的なものです。このように、主観と客観のうえに展開されたものであるがゆえに、十界論は、いかなる人といえども、その見事さに心の底から納得せざるをえない生命哲理となっているのではないだろうか。

そうした客観的な基準として、第一に生命の「我」に含まれる内容を分析してみたい。十界それぞれの生命を特徴づけるのは、欲望か、理性か、慈悲か、それともエゴイズムか、などといったことです。第二に、これもいままでに考察したことだけれども、「生命的時間」とか「生命空間」とかいった考え方も使っていきたいと思う。第三に、この生命がどれくらい充実しているのかとか、どれくらいの発動性と能動性があるのかとか、主体的に生きているのか、自由にふるまえるのかどうか、などといったことにも少しおよんでみたい。細部にわたっては、これから論議していきたいと思うが、私の提案した主観と客観にわたる基準についてはどうだろうか。

——生命の「我」の状態とか、境涯とか、そういったことを明瞭に示せますね。

池田　と同時に、さらに重要なことは、十界論を通じて人間らしい生き方を学び、戦争や公害や社会悪や、さらには一人の人間の生命自体がもつ宿命をも転換し、人間らしい文化と世界を築く、もつとも基礎的な哲理を示しうること

だと思ふ。

戦争を起こし、公害に狂う生命の「我」は、いかなる生命状態にあり、また逆に、平和と友好をかもしたす境涯とはどのようなものか、という事実を明らかにすることによって、私は、人間の生の尊厳を傷つけ、生存の権利を奪い去る、あらゆる悪の根源を断つ戦いへの、第一步を踏み出したいと思うのです。

「平和とはいったいどのようなものか」と苦悶する生を、その根底から変革し、たくましい人間道を歩みゆくための、生命本源の力を湧き起こす方途を示唆しきできればとも願っている。十界論はあくまで実践の哲理です。苦悩し絶望の底にあえぐ生命の「我」に、人間らしい生きがいをもたらす理念です。この理念が十界互具論、一念三千論へと昇華しょうか、統合され、新しい人間文化を築きあげる生命の哲理へと発展するための、努力を惜しんではならない。「戦争とはどういうものか」と首をかしげざるをえないような社会を現出させたいものですね。

三悪道と修羅界

——地獄ということで私がいつも頭に思い浮かべるのは、一九四五年八月六日の、あの人類史上はじめての原爆投下の様相です。広島原爆の被災者であった女性の体験をつづった書物が出版されています。その書き出しはつぎのように始まっています。

渾沌と悪夢にとじこめられているような日々が、明けては暮れる。

よく晴れて澄みとおった秋の真昼にさえ、深い黄昏たそがれの底にでも沈んでいくような、混迷のもの憂さから、のがれることはできない。同じ身の上の人びとが、毎日まわりで死ぬのだ。(中略)

死は私にもいつくるか知れない。私は一日に幾度でも髪をひっぱって見、

抜毛の数をかぞえる。いつふいにあらわれるかも知れない斑点に脅えて、何十度となく、眼をすがめて手足の皮膚をしらべたりする。(中略)

意識ばかりはつきりしていて、どんなに残酷な症状があらわれても、痛みもしびれもないという、原子爆弾症の白痴のような傷害の異常さは、罹災者にとつて、新しい地獄の発見である。了解することの出来ぬ死の誘いの怖ろしさと、戦争自体への(敗戦の意味ではなく)忿りは、蛇のようにからみ合い、どんなもの憂い日にも、高鳴っている。

とあります。著者は、原爆文学作家の大田洋子さんという女性で『屍の街』という題名がついています。

池田 原爆症にさいなまれる女性の心根が、手にとるように浮かび上がっている。いかなる言辞を弄しての説明よりも、生と死をかけた一つの体験のほうに、事実をなまなましく伝えるものだね。

——ところで、この文章のなかで「渾沌と悪夢にとじこめられて」いるとありますが、これは、生命の自由をまったく奪われた境涯をあらわしているの

でしようか。「手も足も出ない」というような……。

池田 環境に働きかける力もなく、未来を開く希望ももてず、傷ついた身と心を抱えて懊惱おうれうする生命の「我」に、人間としての自由はまったくありえないといえるでしょう。

私たちの生命には、もともと力強い生命的エネルギーがそなわっている。その力が生を支える衝動となり、本能的な欲望となり、また、人間らしい各種の心的内容となって噴出していく。親愛の情が芽ばえ、知識欲がわき、同情心をつちかっていく。また逆に、攻撃とか破壊とか嫉妬などの衝動となることもある。いずれにしても、そこにはさまざまな生命の動きが起き、人生模様を織りなしていくと考えられる。だが、地獄の境涯においては、そうした生命的エネルギーの発動はほとんどおさえられ、そこに筆舌ひつぜつに尽くしがたい苦悩を感じていく。

——原爆症では、いつ死が訪れるかわかりません。しかも、現代医学をもつてしても、その死を食い止めるにはあまりにも無力です。また公害病の一つ

であるイタイイタイ病では、激痛のあまり寝食も満足にできず、絶叫ぜつきようを残して死に至るほかはありません。

池田 食欲とか睡眠欲といった本能的な欲望を、個体保持の欲求というのだけれども、それさえ満たすことができず、やがては生きる力も失ってしまうのです。このような、あらゆる生への力と、その涙ぐましい努力のすべてがむしり取られていく境涯は、最低の生命状態というほかないでしょう。

——少なくとも志願してなるような境涯ではないですね（笑い）。地獄という言葉の意味ですけれども、地獄の「地」は最低を意味し「獄」とは拘束こうそくされた不自由をさすといわれます。繫縛けいばく不自在が本質であるということです。

池田 苦しみに押しつぶされて身動きもできないということだね。そのような人生はいかに長く続いても、少しも充実したものにはならないでしょう。

——しかし、人間生命にそなわっている生命エネルギーは、どんなに圧迫されても、少しは残っているような気もするんですが……。

池田 私たちの生命の力は、どのように抑圧され、また剝奪はくだつされても、けっ

して枯れてしまうことはない。私たちは、死が目前に迫っても、一筋の希望をどこかに見いだそうと必死の努力を重ねるものです。たとえば、もし不治の病であることがわかって、新しい薬や治療法が発見されないかとか、レントゲン写真の間違いではないかとか、自然に治ることもありうるか、ひどいのになると医師が間違っていて私は健康なのだとか、どこかに希望を見つける努力をするものでしょう。

——ソルジェニーツインの『ガン病棟』のなかで、自然治癒の可能性ということが、人びとの心理に投げかける影響について、見事に描かれているところがあります。一人の患者が病理解剖の本のなかから、癌がんでもまれにはあるが自然治癒の例症もみられると記された部分を見つけたして、「治療じゃないんだ、自然治癒だ」と叫ぶんです。すると、他の人びともその言葉にとびつくんです。「それはあたかも大判の教科書の開かれた頁から自然治癒という名の虹色の蝶がとびたち……」とあるのですね。虹色の蝶というのは、癌がんに冒おかされた人びとの描きだした希望の結晶だと思います。たとえば、はかないものである

とわかっていても、なお抱きつづける期待です。

池田 それをむなしい生存欲のあがきであると冷笑する人がいるかもしれないけれども、では、そういう人に生への執着がないかといえ、けっしてそうではない。他人のことだから冷たい氷のような眼差しを向けられるのだろう。しかも、生の内奥からほとばしりでる生きることへの執念は、それを許さぬものへの激しい怒りと化し、耐えがたい情念の嵐を巻き起こすにちがいない。

——大田洋子さんも「戦争自体への^い怒りは、蛇のようにからみ合い、どんなもの憂い日にも、高鳴っている」と記しています。この原爆作家の心情が少しはわかるような気がします。

池田 生存への必死の戦いです。その戦いの嵐が感情の奥を揺さぶり、生命の「我」を巻き込んで荒れに荒れ狂う。生命の「我」は情念の嵐にもまれて苦悩の「うめき声」を発しつづけるにちがいあるまい。だが、その嵐は、狂えば狂うほどかえって自己の生命力を浪費し、死への道へとひきずりこむ役目を果たす。そこに、地獄特有の悲惨さがある。日蓮大聖人が「^い瞋るは地獄」と、一

言のもとに定義された深い意味も、このような実相を見抜かれてのことだと拝せられる。

——「瞋る」感情の嵐が、自我の苦悶と死自体をも呼び寄せるのですね。

池田 その「瞋り」は、戦争や公害や不治の病や貧困、家庭不和などの苦惱をもたらしものへの怒りであり怨念であるとともに、この不幸をはねかえすことのできない、ひ弱で無力な自分自身への、いいしれぬ悲しみの心でもあるだろう。

日蓮大聖人の『けんぼうほうしやう顕謗法抄』には、八大地獄のすさまじい様相が説かれているが、そのなかでも「あび大阿鼻地獄」が苦悩の極限だとされている。阿鼻叫喚きやうかんとは、生命の「我」の筆舌に尽くしがたい「うめきの声」であり、その地に漂う酸鼻さんびな臭みくさとは、まさに死の悪臭ではないかと思う。

——阿鼻叫喚といえば、わめき、泣き叫ぶ声などを想像しがちですけども……。

池田 耐えがたい激痛に、声をあげて叫ぶ場合もある。だが本質的には生

命の「我」の「苦しみのうめき」と考えたい。叫び声も出ないほどの心のなかのうめきです。

—— 苦しみの「我」は、ちようど大地の底にでも沈んでいくような重さを感じるでしょうね。

池田 先ほどの原爆作家も「深い黄昏^{たそがれ}の底にでも沈んでいるような」という表現をしていたね。経文では地獄の住所を、地の下一千由旬^{ゆじゆん}（一由旬は大王一日の行程。種々の説があるが、だいたい三十キロ程度か）などと説いています。それから地獄の空間と時間について一言しておく、苦しみの状態にある生命の占める空間は、限りなく小さくなっているのではないだろうか。

たとえば歯痛に悩まされるときなど、その人の占める生命空間はぜんぶ、歯のなかに入ってしまったっている。外界で起こっていることに関与するいとまもない。また、明日食べる米にも不自由する人は、米櫃^{こめびつ}のなかにその人の生命はすっぽり入るのだろう。だから、こういう状態にある人にとって、いかにすきとおった秋空が広がっていても、そこに遊ぶだけの余裕はまったくない。粉雪が

ちらついたりすると、それが米や金にさえ見えるくらいだろうね。とにかく、この広い世界のなかで身を憩^いわせる場所はどこにもない。

つぎに地獄の時間についても、本気で考えると気が遠くなるほどの寿命が種の經文には説かれている。もちろん、これは生命的時間を使つての表現だけれども……。悩み、悲しみ、苦しんでいる生命にとって、時計の針がもどかしくてしかたがないことは、時間論のところでも述べたけれども、生命力が弱りきつて生命の流れがほとんど途絶えているのだから、生命的時間は少しも進まないわけです。そういう生命だから、いつまでたつても地獄から抜け出すこともできず、もがきぬかねばならない。無間地獄^{むげんじごく}（地獄のなかでもっとも極限の地獄である大阿鼻地獄のこと）においては、現実にその苦しみの長さを示すのに天文学的數字を必要とするにちがいない。こうして苦しみの「我」は、無限にうちつづく時間の責めを感じつつづけるのです。

——地獄についてはずいぶん詳しく考えましたので、このあたりで餓鬼界と畜生界に入りたいと思います。まず餓鬼界についてですが、日蓮大聖人の

『観心本尊抄』に「食^{むさほ}るは餓鬼」とありますように、この境涯にある「我」を特徴づけるのは貪欲ですね。

池田 とどまるところをしらぬ激しい欲望の火に、身も心も焼かれていく境涯だと思う。私たちの生の内奥には、じつにさまざまな欲望が渦巻いている。もっとも基本的な欲求は生きたいという欲望だが、個体と種族を保持するための本能的欲望をかぞえあげれば、じつに多い。

——食欲とか集団欲とか性欲とか、また眠りたいとかいった欲望ですね。

池田 さらに、物質欲や所有欲などの、物に向かう欲望もあれば、権力欲や支配欲、名誉欲、攻撃欲、自己顕示欲^{けんじ}、自己主張欲、などといった、人間関係にまつわる欲望もあるだろう。

——私自身の心のなかにも、これらの欲望のすべてがあります。それが現実に出てくるかどうかは別として、やはり物への欲望もあれば、自分をよくみせたいという欲望もあります。他の人びとを思うがままに動かしてみたいという心も認めざるをえません。どんな聖人君子のような顔をしていても、その心

のなかには、その顔とは似ても似つかぬ欲求がうごめいている場合もあるようです。

池田　まあ、このぐらいが、餓鬼界、畜生界、修羅界などに関連する欲望だが、これらのほかにも、各種の精神的欲望が実在することも記憶にとどめておいてほしいね。

ところで、このような欲望は、生命を維持するため、人間として生きるために必要なものであり、それなりに有益なものであるが、欲望の追求が目的になり、欲望に支配されたときは、みずからを不幸におとしいれ、他を傷つける害悪となる。餓鬼界の本質は、ここにあるといつてよい。

——日蓮大聖人の『うらぼん孟蘭盆御書』には、餓鬼道に落ちたもくれん目連尊者（釈尊の弟子の一人。神通第一といわれた）の母の姿が記されています。「天眼をひらいて、三千大千世界を明鏡のかげのごとく御らむありしかば、大地をみとおし三悪道を見る事こおり氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし、其の中に餓鬼道と申すところに我が母あり、のむ事なし食うことなし、皮はきんてうを

むしれるがごとく骨はまろき石をならべたるがごとし、頭はまりのごとく頸くびは
いとのごとし腹は大海のごとし、口をはり手を合せて物をこへる形は・うへた
るひるの人のかをかけるがごとし」とあります。また目連尊者が、ごはんを与
えようとすると、そのごはんが火となつて燃え上がったと説かれています。

池田　まるで典型的な栄養失調の人の描写だね。

——私は職業柄、癌の末期の人をみるがありますが、癌患者特有の顔
貌や姿を描いているようにも思われます。また、水俣病、とくに胎児性水俣病
の子供たちも、重症になれば、ベッドに横たわったままです。欲しいものも食
べられない。いや、食べたいという欲求さえあらわせない場合もある。生命自
体では欲しがっているのでしょうけれども、それを表現したり意識することさ
えできないんですね。ジャーナリストは「生ける屍しかばね」と呼び、学者たちは「植
物人間（注）」と名づけています。

池田　食物がありながら、それを摂取することもできない。本能的欲求さえ
もかなえられない生命の「我」は、その欲求の強さにつきあげられて激しい飢

餓感にあえぐにちがいない。したがって餓鬼界の生命の実感、心身を焼きつくすような飢えの感じですよ。

——先ほど会長があげられた欲求のなかの、権力欲や所有欲にしても、それが得られないときの焦燥感というか、焦りあせというか、あれも一種の飢餓感でしようか。

池田 手に入りそうで、もう少しのところでは自分のものにならないといった焦燥感だね。名誉や権勢を求め徘徊はいかいする生命は、焦りの炎に焦こがされ、その内奥からは強烈な飢餓感がつきあげてくる。だが、考えてみると、所有欲や支配の欲求がかなえられた瞬間は、人界とか天界になるのだらうね。

——腹一杯好きなものを食べて満足した。あと横になればいいことではないという状態などは、どう考えても畜生界です。それから他の人の欲望と衝突すれば修羅界ですし、食物や水に毒が含まれていれば地獄界を現じることもあります。

——『立正阿毘曇論りっしょうあびどんろん』第六には、「この道は余道と往還し、善悪相通ずる

がゆえに閑多と名づく」とあります。「余道と往還」ということです。

池田 もう一つ、餓鬼界は「善惡相通ずる」のです。たしかに飢餓感に責められた欲求不満が、物質文明を築く原動力になっている。機械化による食糧の増産が、飢饉を救っているという事実もある。

——正直なところ、私たちでも、おいしいものを食べたいとか、よい家に住みたいとか、またレジャーを楽しみたいとかいう欲求があるから働くのだということも、一面の真理でしょう。欲しいものを買いたいから残業する人もいるでしょうし、妻子の病気を治したために厳しい労働に耐える人もいます。社会全体のこととも関連しますが、とにかく欲望の激しいつきあがが私たちを行動へと駆り立てていることは事実です。

そしてある場合は、それによって豊かになるとか、病院に支払いができて病気もよくなる場合があります。たしかに社会全体からみると、政治とか経済の問題になるでしょうが、貪欲が、幸福とか、よいことにつながることもあるでしょう。

池田 だが、その半面、貪欲が戦争、公害などを生み出しているという現状も、正しく認識しなければならない。

——そうしますと、餓鬼道は他の界へと通じ、善と悪の両面をつくりだすとはいっても、餓鬼道そのものは、やはり貪欲に支配される不幸な境涯といわざるをえない……。

池田 餓鬼界が三惡道の一つに数えあげられるゆえんです。

——ところで餓鬼界は、貪欲に支配されながら、それがかなえられない生命状態ですけれども、畜生界は、本能のままに動かされる境涯をいうのでしやうか。

池田 簡単にいつてしまえば、餓鬼界にある生命の「我」を現代的な言葉であらわして「植物人間」とすると、畜生界に浸る人間は「動物人間」^(注2)とでもいえるのではないでしやうか。人間の生命であっても動物の一種であることに変わりはない。動物と共通の本能的欲求ももっている。どんなに偉そうにふるまってみても、他の動物と同じように、適度の睡眠はとらなければならないだろ

うし、食事もしなければならぬ。十分な栄養がなければ体の調和も崩れてしまふ。

——これは人間らしい欲望の一つで、食欲とは違ふのですけれども、女の人だと、やせたいという欲求があります。そのスマートになりたいという欲求が断食を続けさせたという例があるのですが、アメリカはロサンゼルスの主婦で、百十七日の断食が今までの世界最高だそうです。その主婦は念願を果たして、体重が百四十三キロから九十キロにまでなったそうですけれども、これ以上続けると、やせたいという精神力は続いたとしても、そのまえに死んでしまふというのです。また睡眠欲というのも本能の一つですけれども、それを断つ実験をした人がいまして、百時間をちよつと越えたのが最高です。普通、眠らないと二日間ぐらゐは正常な精神活動をしています。三日目ぐらゐになると幻覚が出てきたり、幻聴が聞こえだしたりして、とにかく精神が異常になります。こうみると、本能を全面的に抑圧したり断とうとするのは無理ですね。

池田 私たちも、学問的にいうと^{れいちようもく}靈長目の一員だから、生物として生きてい

く以上は、本能的欲求は満たされなければならない。それを断ち切ることは不可能だし、してはならない。しかし、本能的衝動の命ずるままに行動するところには、けっして人間としての生き方はないはずです。

人間生命における心的内容には、これまであげたようなさまざまな欲望もあれば、理性もあり、良心もあり、愛もあり慈悲もある。本能は、これら他の心の要素にうまくコントロールされながら充足していくところに、人間らしい生命状態をあらわしていけるのです。

——日蓮大聖人が「癡おろかは畜生」と定義されているのは、理性もなく良心の働きも認められない境涯ということですね。まあ、動物も種顔によっては、愛情もこまやかですし、ある程度の理性もないことはないでしょうが……。

ところで、畜生の境涯は癡おろかであるということは、ムード的にはわかるのですが、具体的な愚かさの内容というか、行動の原理はどのようなものと考えればよいでしょうか。

池田 日蓮大聖人の『新池御書』にいけには「畜生は残害とて互に殺しあふ」とあ

り『佐渡御書』には「畜生の心は弱きをおどし強きをおそる」とあります。弱肉強食の生存競争をくり広げるのが畜生界の「我」の行動原理です。

——よく動物は嘘をつかないなどといいますが、むしろ人間のようにずる賢い、巧妙な嘘は、つこうと思つてもつけないでしようけれども、動物学者の説によれば、動物の世界でも、嘘やだますことが横行するとされています。同種の間では守り合うことはあつたとしても、異種の動物間だと、できるかぎり弱い相手、病気の相手、老いた相手を狙う。そして、できるだけエネルギーを使わないようにして「だまし討ち」にする。それほど生存競争は厳しいともいえるわけです。わざわざ賢くするのではなく、そうしなければ、みずからの生を保てないということでしょうか。もちろん、人間の場合も、他の動物を殺したり捕獲するのに、相手にわざわざことわってからするというようなフェアプレーの精神はありませんけれども……（笑い）。

池田 本能を充足させる、つまり生き抜くための戦いだね。

——本能が満たされたとき、生命の「我」は何を感じているのでしょうか。

たとえば私たちが食事をたっぷりとったあとの充足感みたいな、それでいてけだるいような感じですね。

池田 むしろ快感といったほうがよいかもしれませんね。天界の喜びや、人間のさわやかな満足感とも少し違うようです。生理的な充足感、快感を、畜生界の「我」は感じていると思う。

——ちよつとひねくれているかもしれませんが、もう一点確認したいのですが……。弱肉強食の原理はどうして愚かといえるか、という問題ですけれども……。

池田 これは、エコノミック・アニマルといわれる日本人にとっては切実な問題です。弱肉強食でもないか、と居直る人もいる世相だからね。だが本能につきうごかされる畜生界では、知恵とか理性とか意志とかはまったく働いていないといえるでしょう。

本能は盲目であるといわれるとおりです。こういった本能によってたしかに、生き物は環境に適応していくことはできる。食物を捜したり眠る場所を確保し

たり、他の動物から身をかわすこともできる。しかし、環境が変わったり、ずる賢い連中にかかったりするとひとたまりもない。生存競争の原理からいくと、敗者になり生命を落としてしまう。だから、本能がいくら優れていても「飛んで火に入る夏の虫」ということにもなってしまう。

日蓮大聖人は、『佐渡御書』にも「魚は命を惜む故に池にすむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすむしかれどもゑにばかされて釣^{つり}をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれどもゑにばかされて網にかかるとの例をあげられている。本能に支配されて生きることが、結局、自己の破滅につながっていく。しかもそのような運命を自分ではどうすることもできないのです。

——本能のたどる運命ですね。それは個々の生物でもいえるし、またその生物集団についてもいえますね。たとえば、生態学でも、他の生物を滅ぼして繁殖しすぎた生物は、かならず絶滅していくといえます。地球上における大絶滅の一つは、いまから七千万年前ごろ、地質時代というと白亜紀の末ですが、

恐竜とその仲間の身に起きています。当時は地上の王者だったわけで、我がもの顔にのし歩いていたんですね。いまの人類みたいなものです。

ところが突如として姿を消してしまふことになった。外からの原因も考えられていますが、内因も考えなくてはならない。環境の変化に適応することができなかった。そう考えざるをえない。この例だけではなく、地球上では、生物が大量に滅亡していく例がときどきみられますが、一つの生物だけが他の生物を犠牲にして栄えることは、生命の糸、生命の輪をズタズタに切り裂いて、みずからの生きる基盤を崩していつていようなものです。人間も、いま弱肉強食の原理で他の生物を絶滅に追い込み、その結果、集団自殺にみずからが進んでいる、と多くの学者が警告しています。

池田 快感に浸りながら、みずからの死を招き寄せる生命の「我」は、どうみても愚かとししか表現のしようがないね。

——仏法では、地獄、餓鬼、畜生は三惡道といわれていますが、それと、つぎの修羅界を入れて四惡趣しあくしゆというふうに表現しますが、やはり、三惡道と修

羅界とは、ずいぶん、境涯というか、生命内容そのものが変わってきていますね。たとえば、三悪道の「我」に係するの、主に各種の欲望と感情の面からすると情念といったようなものです。しかし、修羅界では、自我意識が顔をだしていますし、感情も少しは人間らしくなっていますね。

池田 修羅界も、けっして人間としてのあるべき姿ではないにしても、三悪道とは、やはり質的に異なるといえよう。たしかに、修羅界では、自我意識がめばえている。この点をつかまないと、修羅の境涯を理解することはできないでしょう。

——『観心本尊抄』にも「てんごく諂曲なるは修羅」とあります。へつらい曲がった心ですね。

池田 自己中心的な自我です。他の人びとやまた生き物のことなどまったく眼中になく、ただみずからの利益や主張のみを追求するエゴイステイックな自我が、修羅界の「我」だと考えられる。

——この自我の性質について、日蓮大聖人の『じっほうかいみよういんがしやう十法界明因果抄』には「止

觀の一に云く『若し其の心・念念に彼に勝らんことを欲し耐えざれば人を下し
他を輕しめ己を珍たつとぶこと鵠とびの高く飛びて下視みおろすが如し而も外には仁・義・礼・智
・信を掲げて下品げほんの善心を起し阿修羅あしゅらの道を行ずるなり』文」とあります。

「止觀」とあるのは、天台大師の『摩訶止觀』のことです。この文のなかに、
「下品の善心」とありますが、これは、善心を、その度合いによって、上品と
か中品とか下品といったように、いちおう区分するのですね。そうしますと、
修羅界の「我」は、善心といっても、あまり高等なものではない下品のほうの
心をおこすというのです。それから、「阿修羅」は修羅と同じ意味ですね。

池田 この文を読むと、エゴイストの姿がみごとに浮きあがっています。こ
のなかの「其の心・念念に彼に勝らんことを欲し」というのは、勝他の念をさ
し、「人を下し他を輕しめ己を珍ぶ」と表現されているのは、増上慢の心を意
味していると思う。

—— ひとところさわがれた教育ママなどという存在ですね。いまはあまり表
面にはでないようですが、もうあたりまえになったのかもしれない。幼稚園

に入るころからの母親の執念みたいなものをみせつけられたり、また、医学部入学にまつわる不正事件とか、入学金寄付金の額などをみていますと、親のエゴのために、かえって犠牲になるような子供も多いのではないかという気さえしてきます。

まあ、そういう親たちの自我は、勝他の念にかられ、自分の子供の勉学に関心をもつのはいいのですが、子供の人格とか性格とか、どういう方面に才能がむいているか、などといったことを考えようとしてもしないものです。子供の成績をあげるのは、みずからの利己心を満足させるためであつたり、優越感にひたるためといつても過言ではない場合もあります。だから、他人の子供が、ちょっと成績がいいと憎らしくてしかたがないのですね。子供相手にヤキモチをやいたりしています。

池田　　そういった優越感も、また嫉妬も、自分の心の奥に巣くった劣等感の裏返しの場合が多いね。まがりくねった自我に気がつかないで、虚勢をはっている。いいかえると、虚栄の幻を追っているのです。それが、増上慢の心だ。

自己のぬぐいきれない欠点をカムフラージュするための、勝他の念といってもいいでしょう。

——男性でも、ちよつとしたことで逆上する人がありますね。心理学者たちは「爆発性の人」と名づけて、異常性格の一つに数えています。心のなかにダイナマイトをいだいているようなものです。いつ爆発するか自分でもわからない（笑い）。まして、他人が予知することなどとうてい不可能です。しかし、このような人でも、表面からみると、まことに紳士然としています。教育ママだと淑女然というべきでしょうが——。

池田 「仁義礼智信」をわきまえているように見えるのだね。ここが、欲望につき動かされる生命の「我」とは、ちよつとちがうところだ。他の人びとから尊敬の眼差しまたぎをあつめ、優越感にひたろうとする利己心のなせる業わざでしょう。むろん、無意識の行ないだろうがね。だが、その生命の内面には、各種の欲望が頭をもたげ、感情の嵐が荒れ狂っているはずです。

——その欲望についてですが、修羅界の欲望というのは、本能的欲求より

も、むしろもっと人間的なものです。たとえば、自己顕示欲みたいな――。

池田 生存欲や本能的欲望などは、いちおう満たされ、そのうえに、利己的なながらも自我意識のめばえもある。だから勝他の念にかられ、はかない虚栄を追いつめる欲望には、攻撃欲とか、自己主張欲とか、自己顕示欲とか、破壊欲などの種類があると思う。また、荒れ狂う感情としては、怒りがあり、憎しみがあり、嫌悪があり、嫉妬の情動があるのではないだろうか。

――怒りの感情についてですが、地獄界では「瞋^{いか}り」という言葉がでてきたのですが――。

池田 修羅界での「怒り」は、利己心から発するものであり、攻撃や破壊の欲望をとまって他の人びとや生物などの生を打ちくだいていく。

地獄界でいう「瞋^{いか}り」は、いわば情念みたいなもので、自我意識よりももっと深いところに渦まいている。そして、他の生命にむかうよりも、みずからの生命を破滅の嵐にまきこんでしまう性質をもっている。また、地獄界には、他の生命に攻撃をしかけるだけの生命的エネルギーもなければ、自由も

ないと思われる。

——つまり、三悪道よりは少しだけ生命力そのものが強いということですね。狂気の生命力にほかなりませんが——。ところで、おもしろいのは日寛上人（日蓮正宗総本山第二十六世法主）の『三重秘伝抄』にある「修羅は身の丈八万四千由旬・四大海の水も膝にすぎず」という言葉ですね。四大海というのは、古代インドの世界観にでてくる海のことですが、いまでいうと、太平洋とか大西洋みたいな感じですね。その海のなかに立っても、修羅の身長がものすごく大きくて、膝ぐらいしか水がこない。まあ、ずいぶん誇張した表現ととれないこともありませんが、これは、修羅界の生命空間をあらわしているのでしょうか。

たとえば、私たちは、怒ったときとか、慢心しているときには、自分が偉くなったように感じたり、ずいぶん大きくなったように思うものですね。反対に相手は、相対的なことですが、小さくなってしまふ。だから、修羅界の生命空間は、ものすごく大きいと——。

池田 修羅界の生命は、外見だけはまことに立派そうにみえるものです。むしろん、その容貌は醜いだろうが、身体だけはすこぶる大きそうだ。これを、生命空間ととれないこともないが、もう少し深く考えてみよう。外見ではなく、その中身をしらべてみる必要がありそうだからね。

そこで、『佐渡御書』には「おこれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し」と記されています。

——この文のなかに「帝釈」とでていますが、これは帝釈天のことで『法華経』では、仏法を守護する神として説かれています。今でいえば、あらゆるものの真実をみぬくだけの力ある人間といえると思われれます。また「無熱池」というのは、清涼池ともいわれていますが、すべての熱悩を治することのできる池という意味だそうです。

さて、あれほど巨大にみえた修羅も、帝釈天にせめられると、池に咲いた蓮のなかに「小身と成て隠れ」とあります。すると、修羅の本当の姿は蓮のな

かにかくれてしまうほど小さいと考えられます。

池田 結局、外からみた修羅の巨大な姿は幻想であり、幻覚だったのです。

修羅界の「我」の真実の生命空間はそんなに大きくはない。だが、勝他を念ずる利己心は、自分の小さい生命空間にがまんがならず、幻想をいだいたのです。むろん自分でも気がつかなくてね。自己暗示みたいなものでしょう。ともすれば、私たちも、その幻想にひっかかってしまう。一種の錯覚だね。また、修羅の生命自体も幻想をえがいている事実気がつかず、慢心をおこし、他者を傷つけ、みずからも不幸におちいっていくのでしょう。

——そうしますと、三悪道と同じく、修羅界も不幸な生命状態といえますね。仏法で地獄から修羅界までを四惡趣という意味がよく理解できそうです。

人と天の世界

——「朝は四本足で、昼は二本足で、そして夕方は三本足で歩く動物は何か」という設問は、前にも言葉だけはできませんでした。有名な「スフィンクスの謎」です。でも、この謎は、人間の一生にわたる姿の変化だけはあらわしてはいますが、人間とは何かという質問の答えにはなっていません。そこで、先人による人間の定義をさがしたのですが、どうも、ずばりと本質をついた名言は見あたりません。

思いつくままにあげてみますと、「考える葦」とか、「理性をもった動物」とか、「道具を使う動物」、「社会生活を享受する生き物」、「遊ぶヒト」（ホモ・ルーデンス）というのがあります。それから、学問上の命名によりますと、リンネ

という学者が名づけた「ホモ・サピエンス」(Homo Sapiens)というのがあります。この「ホモ・サピエンス」とは、日本語に訳しますと、「智者のあるヒト」で、これは原人や旧人に対して現在の人顔を区別して命名したものです。ところが、現実の人間は、どう考えても、「ホモ・サピエンス」ではない、といつて真正面から反対したのが、生物学者であり、歴史学者であつたシャルル・リシエです。彼はノーベル賞の受賞者でもあります。人間というのは、救いがたいほど愚かであるといふので、「ホモ・ストウルトゥス」(Homo Stultus)すなわち「愚かなヒト」が適當であると主張しています。たしかに、どれをとつてみても、一面の眞実をついてゐるような気がしないのですが……。

——現実の人間を定義することは、種々の角度からできるでしょうが、仏法では、人間界、つまり、人間としての普通の境涯というか、ひとまず人間らしいといえるような境地を、人界としていますね。そして、その人界をさして、梵語では、「末奴沙まねしや」といふとあります。「思考する者」という意味だそうです。『立正阿毘曇論』第六には、「聡明そうめい、勝しょう、意微細いびさい、正覚しょうかく、智慧増上ちえぞうじょう、能別虚実のうべつきよじつ、

しょうどうしょうき 聖道正器、そうえい しょうしょうき 聰慧業所生の八義がある故に、人道を説いてまぬしや 摩菟沙と名づく」とあります。いちおう釈してみますと、「人の特性というのは聡明であり、微妙な意識があり、正しく物事を判断し、知慧がすぐれ、虚と実をよく判別し、仏道を成ずる正器であり、過去世からの福運に満ちている」となりましようが、このなかに理性とか、思考とか、知慧などもぜんぶ入っているといつてよいでしょう。で、日蓮大聖人の「たいら平かなるは人」という定義は、これらすべてを含んだうえでの名言と考えられますね。

池田 「平か」という以上、やはり平静な生命状態を指すと考えられる。三悪道や四惡趣は鬭争の世界だし、つぎに述べる天界も、歎喜の潮が高まっている生命状態で、ともに激しい生命ということができる。ところが一日を振り返ってみると、感情の起伏の激しい時間だけではなく、穏やかなひとときというものがある。つね日ごろ激しい環境の変化に振り回されている自己が、ひとときの安らぎを得ている状態がそうですね。「人間らしさを取り戻す」というけれども、会社から帰って、くつろいで新聞を広げているとき、家族と談笑して

いるときなどは、人界という表現がピッタリくるのではないだろうか。

ところが、この人界という境涯は、環境の変化によつて、たちまち三惡道や四惡趣へと引きずり込まれてしまう。平静に自己を省み^{かえり}、社会を見通し、的確な判断を下していける自分を維持していくことが必要なのです。逆に、この人界という境涯は、その本質を見抜き、みがくことによつて、昇華^{しょうか}させることもできるのです。人界が十界のほぼ中央に位置しているというのも、十界のどれにでも変化しうるもつとも基本的な状態だと仏法は考えているからではないだろうか。そのように移ろいやすい人界を錬磨^{れんま}し、開發して、強い知恵の輝きをもつ生命へと昇華させるところに、仏法の実践があるといえるのだと私はいつておきたいのです。

——平静な心でもつて、人生や社会をうつしだし、正しく行動するということとは、ある意味では非常にむずかしいことです。本能のおもむくままの生活や、感情の嵐にまかせて怒り狂うことは、ある意味では、安易な道ですね。その結果、苦しみは増大するでしょうが——。

池田 平静な人間道を貫くには、強い理性の光りや深い知恵の洞察力や善と悪を判断するためのまっすぐな良心とか、あらゆる困難をも乗り越えていく強い意志力、また、新しい生をきり開いていく意欲、人間らしい心情としての愛情などが必須条件ひつすでしようね。

——人間に生まれたのだから、努力しなくても人界をあらわせる、というわけにはいかないのですね。まあ、その素質はもっているのですしょうが。

池田 その人の生まれとか、生活している環境にもよるだろうけれども、やはり、人間らしい自我を形成するための努力が必要でしょう。理性とか、良心などをそなえた人間的な自我が、本能的な欲求とその他の欲望や、憎悪、嫉妬などといった情動、情念を、聡明にコントロールし、誠実で、責任感にあふれた、包容力豊かな人間生命を現出させるのです。

——たとえば、あばれ馬の手綱をとって、懸命にリードしているような状態でしょうか。少しでも力を抜くと、ふりおとされてしまう。むろん、その場合、騎手が人間的な自我で、あばれ馬というのが、種々の欲望や感情な

どをはらんだ心の内奥をさしているのですが——人馬一体という境地にはなかなかないかないものですね。

池田 また、こうも考えられる。夏になると、青い海にボートを走らせて、すいすいと水上スキーを楽しんでいる若者が多いね。うまい人になると、じつに、楽しそうに海面を走っているが、慣れない初心者だと、すぐにひっくりかえってしまふ。若者は人間的自我にたとえられよう。そして、広い大海は、欲望や感情や衝動などのうずまく生命の海といえると思う。

——そうしますと、海上スキーがてんぷくして、手足をバタバタさせているのは、苦悩の境涯につきおとされたようなものですね。頭だけとびだしているのが、勝他の念にかられた利己心であつたりして——（笑い）。

池田 三悪道や修羅界に転落する危険性を常にもっているのが、人間的自我だが、一方では、その自我をみがいていけば、ますます理性の光りもさえ、判断力や洞察力なども強まり、愛情も深まるという可能性にもめぐまれている。

仏法で、人間らしい境涯を「聖道正器」といつているのも、人間的自我をみ

がけば、幸福と平和を満喫できる境涯をあらわしうるという可能性を、見とおしていたからだと考えられる。三悪道と修羅界が、戦争や公害などに結びつく境地であるのに対して、人間界は、たしかに平和と繁栄をもたらす自我に立脚しているといえよう。また、その生命の「我」はかなりの自由をもち、主体的な生をも営みうると思われる。

——人界の住所についてですが、『三重秘伝抄』には「人は大地に依って住し」とあります。この大地とは何を意味しているのでしょうか。

池田 この文は人界の「我」に、さまざまな姿や形があるが、同じく大地という共通の場に住んでいるということの意味していると思う。

では、肝心の大地とは何をさすのかというと、いうまでもなく、人間の生存の基盤はこの地球の大地である、ということ。これはごく常識的な解釈ですが、もう少し思想的に、掘りさげていうと、大地とは人間的自我のよって立つ生存の基盤であると解釈しておきたい。このことをわかりやすく説明すると、たとえば、私たちが人間として生きていくには、いままで話し合ってきたように、

生存欲とか、本能とか、その他の欲望を満たすことも必要だが、それだけでは十分ではない。やはり、人間らしい生活というと、親子とか、夫婦の間の愛情とか、また隣人への信頼心も必要だし、自分なりの信じる対象ももっていないと安心しきれないだろう。

さらに、社会の約束事というか、人間としての物の考え方、ルールといったものがある。それにもとづいて人生を送っているから、ある程度、欲望もコントロールしていけるのです。つまり、人間的な自我は、その社会に伝えられた一定の価値観に立って、生きる目標を定め、着実な人生道を歩もうとしているように思われる。そうすると、その人なりの生きがいだってもっているし、生きることへの意味とか、価値判断の基準とか、使命感なども定まっているだろう。

まあ、こういった信念や価値観、さらにいえば、人生観や世界観などもひっくり返して、私は生存の基盤といっておきたい。その生存の基盤が、まがりなりにも固まっているから、人は苦難にたえて生きていけるのだし、安心感を味わ

うこともできるのだね。

——大地に足をつけた人生ですね。

池田 その生存の基盤に住してこそ、人界という境涯を保っていける。こういった意味あいから、人は大地に住すといわれたのだと思う。むろん、個人によつて人生観も世界観も、人生の目的も、また価値の基準だって大きな差をみせるにちがいない。価値の多様化が叫ばれているこのごろだからね。だが、人界の「我」が、このような生存の根拠というか、基盤をもっているという点においては共通です。

したがって人間的な自我は、このような大地に立脚して、ひとまず安心した人生を送っているのだから、生命の流れもスムーズで、平静にして着実な生命的時間をも刻みうると考えられる。

——私たちの身体にしても、障害が、ある一定の水準にまで達しないと、意識を刺激することはありません。胃腸でも、他の臓器でもそうですが、痛みや重苦しい感じは危険信号と考えられます。体温だって、ふだんは意識しませ

んからね。

また、精神面でも、衝動や欲求がある程度うっ積するまでは、気分をめいらせたり、感情の波をたたせることはありません。人界では、これらの生命的エネルギーのコントロールが、ある程度うまくいっているのですね。少しぐらいの不満や欲求のうっ積はあったとしても――。

――ところが、つぎの天界です。この境涯になると、こんどは生命全体がぐんと軽くなったように感じられます。足どりも軽くとか、天にも昇るような気分とか表現されます。それは、意識ではなくて、意識のもっと奥の生の基底が、さわやかで、はれぱれとした気分におおわれてしまうような感じですね。感情からいうと、情動とか、情念とか、また心情などの、もう一つの底にある生命自体の実感、つまり生命感情とでもいわれるところが、ゆり動かされるのではないかと思われます。

池田 日蓮大聖人は、『観心本尊抄』で、「喜ぶは天」といわれていますが、この喜ぶという言葉には、さわやかさ、はれぱれとした感じ、うきうきとした

感じ、満足感などが含まれていると思う。いわば生命の感情であるといってもいいでしょう。

——『三重秘伝抄』には、天界をたてわけて、「天は即ち欲界の六天と色界の十八天と無色界の四天(注3)となり」とあります。これは、人間的自我の感じる喜びという生命感情にも段階があるということでしょうか。

池田　　いうまでもなく、欲界とは欲望の世界です。色界とは物質、肉体の世界であり、無色界は精神の領域をさしていると考えられる。これらの世界のもたらす喜びには、とうぜん、質的にいっても、あきらかな差異が認められるでしょう。

——欲界ということに関してですが、仏法では、地獄界から人界までと、天界の一部を欲界としていますね。これには、どのような意味があるのでしょうか。

池田　欲界とは、欲望とか衝動を中心にくりひろげられる領域のことだね。これらの境涯を特徴づける生命感に密着するのは、すべて欲望のエネルギーだ

と思う。

地獄、餓鬼、畜生、修羅などの境地にはすべて、生存欲とか本能的欲望、心情に関する欲求、社会的、物質的な欲求などが関係し、しかも、そのような境界にある生命内容の中心をなしている。修羅界では、自我意識が顔を出し、人界では人間的自我が登場するが、しかし、生の基底には、なお、さまざまな欲望がうずまいている。天界は、これら各種の欲望が満足された状態だと考えられる。

——そうしますと、天界のなかの欲界の喜びというのは、たとえば、おいしいものが食べられた場合などの感覚ですね。

池田 それと、本能的欲望だけではなく、支配欲、名誉欲、所有欲などが満たされたときも天界の喜びをもたらすといえよう。これらが、欲界での喜びだね。つぎに、色界の喜びだが、これは肉体活動に関する喜びだと思う。つまり、肉体の織りなす生のリズムがじつに快調で、生命の力がみなぎっているときの生命感だね。

この喜びは、欲望が充足した場合の生命感情よりも一段と深いようです。健康で、ピチピチした肉体の営みは、生の奥からわきあがる身体流が旺盛であることを示している。身体の流れは、環境とよく適合しながら、その流れをさえぎられることもなく、たくましい生命をたえず創造していく。その創造の働きが、人間的自我に深い喜びを与えるのでしよう。

——すると、無色界の喜びというのは、精神流の営みにともなう実感でし
ようか。

池田 精神流といってもいいし、心的エネルギーの流れともいえます。無色界の喜びには、その深さとか質とかは別にして、いちおう生命充実の喜びとか自由拡大の喜びとか、自己実現と創造の喜びなどが入るのだらうね。

——欲界や色界での喜びもそうですが、とくに無色界では、生命は非常に充実していますね。

池田 四悪趣や人界などとくらべると、生命はたしかに充実している。その証拠に、経文では、天界の一日は、人界での何百年、また、それ以上にも相当

すると説いている。また、天界の寿命は非常に長いと記されている。^(注4)

——たとえば、四王天は、人の五十歳を一昼夜として、五百歳の寿命をもち、忉利天^{たうりてん}は人の百歳を一昼夜として一千歳にもおよぶとあります。他化自在^{たけじざい}天^{てん}あたりになるともっと長いですね。これを物理的時間だとすると、ちよつと常識では考えられません。

池田 生命的時間を使つての表現だと考えるとよくわかる。天界での生命流の速度は速く、また、積極的に外界へと働きかけていくでしょう。そのとき、生命の「我」は、物理的時間が、飛ぶようにすぎ去っていくように感じるものだ。

つまり、楽しいとき、生命が充実しているときには、同じ物理的時間であっても、そのなかに多くの生命的時間の単位を含んでいるからです。だから、天界の一日における生命の充実度は、人界での数百年にも相当するといえるのだと思う。

——生命が充実するから、寿命ものびるのですね。この寿命もとうぜん、

生命的時間で測定したものだと考えられますが――。

池田 たえば、先ほども述べたように、人界では、生命の時間感覚は、物理的時間の速度にほぼ一致している。人界の平静な生命は、地球の一回転をほぼ、そのまま一日と感ずることが出来る。それより、速くもなければ、遅くもない。ところが、天界の「我」は、物理的時間が瞬時に去っていくように感じるのだね。だがその間の出来事をおもいかえしてみると、ずっと長い時間生きてきたように感じられる。

これが、時間のもつパラドックスとでもいえようが、どうしてこういうことが起きるかといえば、それは、生命の発動力と能動性が高まっているからです。そこで、具体的に考えると、天界での一日の生命体験には、人界における数百年にもあたる内容が含まれている。したがって、天界の「我」の寿命も、物理的時間では百歳ぐらいでも、生命的時間で測ると、千歳にも一万歳にもなりうると思えられる。

――最後に、天界の住所についてですが、『三重秘伝抄』には「天は宮殿

によって住し」とあります。天界が「宮殿」に住するというのは、めぐまれた環境にあるということであらわしているのでしょうか。

池田 生命論からいうと、人間的自我の営みに、もつとも良好な環境を与えられている事実をさしているのではなからうか。「依正不二」の原理からすると、生命流の流出をいささかもさまたげることのない環境、依報を「宮殿」という。そのなかで、人間の生は、あらゆる欲望を満足させ、理性と良心と愛情にみちたりた営みを享受することができよう。しかし、依報としての天界の「宮殿」は、たやすくずれ去ってしまいがちである。同時に天界の「我」は、三悪道や修羅界へと転落していくでしょう。天界は「五衰をうく^{こすい(注5)}」といわれるとおりに思う。

こうして考えてくると、天界という境涯は、人間の生にとって、まことに望ましい境地のように思われるであろうが、天界の「我」をささえる「宮殿」にしても永久の實在ではない。では、なぜ「宮殿」は夢のごとく消え去り、自我の苦しみがはじまるのか、といった点の深い思索から、人と天の世界をこえた、

新しい境涯の確立への道が開けるのだと思う。

仏法では、そのような境涯を、天界までの世界、つまり六道と区別する意味で、四聖と定義しているのだが、今回は、このあたりでいちおう話を打ちきっておこう。

人間らしい生き方へ2

——十界論をめぐって

欲望にひそむ魔性

——昭和三十六年という、もう十年ぐらいも以前になりますが、そのころもてはやされた「浪費を刺激する戦略」ということについて、話を聞いたことがあります。「消費」ではなくて、「浪費」なんです。十か条ほどあるのですが、そのうち、二つか三つあげてみます。

第一の作戦は、ストレートに「捨てさせる」というのです。第二の作戦は、「無駄づかいさせる」ときます。エアゾール式の容器などだと、ちよつと押すと大量に出てしまうようにつくられている。一度出たものはもとにもどせない。そのつぎに「セカンドとして持たせる」。これは客間用のテレビと寝室用のテレビとかいった具合にです。まだあります。「旧式にさせる」という戦略で

す。少しだけ外形をかえて、消費者に旧式だと思わせて、買いかえさせるのです。このぐらいいにしておきますが、この戦略はいまでも、十分に活用されているような気がします。

池田 まあ、いまあげたぜんぶのことが真実かどうかはわからないが、さまざまな欲望が交錯する現代文明の一断面をえぐっていることだけは、疑えないだろうね。社会と私たち人間の間には、生存欲をはじめとして、本能的欲求から、名誉欲、物質欲、所有欲、権力欲、支配欲、便利さを求める欲望、虚栄心などが渦まいている。庶民の生命を軽んじ、軽蔑しきった増上慢の自我もあるし、逆にあくどい戦略にひっかかる愚かな心もないとはいえない。これらの欲望がからみ合って、私たちの住む現代という時代を彩^{いろど}っているように思われる。現代文明をつき動かしているのは、究極的には欲望であるとされる所以^{ゆえん}です。

——だが、各種の欲望が、その充足を求めるところに、文明の原動力もあり、それが巨大な物質文明をきずきあげてきたという側面もありますね。

池田 たしかに、日本の戦後史だけをひもといってみても、ほぼ五年ぐらいの

単位で、一つ一つの欲望を満たそうとする努力がうかがわれる。たとえば、戦後、まず食を求める時代が到来しているね。「飢えの時代」といってもよからう。

——性のイメージが変わったのも同じころですね。

池田 性の解放が昭和二十五年ぐらいまでつづいて、その後に衣を求める時代がくる。ナイロンやビニロンが登場するね。

——「真知子巻き」の流行が、たしか、二十九年の暮れです。

池田 衣料がほぼ出そろうと、耐久消費財だね。「三種の神器」のキャッチフレーズがとびかったのは、昭和三十五年ごろを頂点としている。それから、高度成長の波がおしよせ、レジャーが拡大し、欲望中心主義の思想がさらに深く人びとの生命の奥に根をはっていく。

——その欲望、おもに物質欲とか、所有欲とか、それにともなう虚栄心や慢心ですね。それらをかりたてようとして、「消費」ではなくて、「浪費」をさえ呼びおこすような商売戦略が考えだされます。つまり、人間の自然の欲望を

充足させるといふよりも、それをとつくに通りすぎて、こんどは欲望を人為的に合成する時代への突入です。こうなると、食欲の合成といつてもいい。いまでも、その延長線上にあるわけです。

——生存欲から、食欲、性欲、衣への欲望、それから他の物質欲、所有欲へと、欲望の多様化は、戦後の日本の歴史をみても、じつに著しいものがありますね。

池田 欲望の充足と、その質的な変化にしたがつて、私たちの生命の「我」も、地獄界や餓鬼界を現じていたのが、畜生界とか修羅界をあらわすことが多くなってきたようにも思われる。むろん、ごく大ざっぱに、日本人の全体の状況を示しているにすぎないがね。

——そうしますと、豊かな社会、つまり物質文明が爛熟期らんじゅくきに入ろうとしている世の中では、人界や天界の境涯を現出できる可能性も増大していると考えられますね。

池田 戦後の一時期からすれば、消費どころか浪費をさえすすめられるのだ

から、天界を示す人びとの「我」も、総体的には増えているだろう。各種の欲望の、かぎりない増大をひきおこす物質文明は、仏法の観点からすれば、天界を現出させることに、目標をさだめていたということもできる。それが、たとえ無意識であつても、天界を一種の理想郷としてえがいていたことはたしかでしよう。

——西洋物質文明がめざしているのは、科学技術や地球上のあらゆる資源を使つての「宮殿」づくりですね。

池田 未来論が、人類のゆく末をバラ色にそめていたころには、そういった試みも成功をおさめるかに思われた。だが、戦後、四半世紀をかけてつくりあげようとした「宮殿」も、所詮は砂上の楼閣ろうかくにすぎず、昭和四十五年あたりから、つまり、一九七〇年代への突入を境にして、その根底から崩壊の危機にひんしている。

豊かな社会は、物質的欲望の充足とひきかえに、人の生命から、心の豊かさを奪い去っていった。また、核戦争の恐怖は去らず、公害が一举にふきだし、

地球という大自然も狂いはじめている。自然も、社会も、文化も、そして人の心情までが、死の静寂をたたえて凍りつこうとしているようだ。

たとえば、ある時期だけ、天界の「宮殿」に遊んだ人も、いまでは、その廃墟にぼう然とたたずまざるをえないのではなからうか。天界の夢は幻のごとく消滅し、あとには、かつて脱け出たはずの地獄の苦悩や餓鬼の飢餓感がまちらっている。人びとの心は貧しく、争いの渦をまきおこしていく。これが、現代の、また、少なくとも私たちがむかおうとしている未来の世相ではなからうか。

——そうしますと、欲望の充足を至上命令とした物質文明が、すべての生命の「我」を、三悪道や修羅界にひきずりこもうとしている根源というか理由を、どういったところに求めればいいでしょうか。つまり、文明に内在する悪ということですが……。

池田　ここで、再び、仏法に説く欲望論に目をむけてみよう。前章でもふれたことだが、もう一度、要約すると、仏法では、欲望の性質やその充足の段階に応じて、六つのカテゴリーに属する生命の境地を示している。地獄界から天

界の欲望までです。

ところで、仏法の欲望論の特色の一つは、欲界の頂上に、第六天の魔王が住む、と明記していることだと思う。魔王などというと、先入観念がわざわざいして迷信めいて受けとられやすいが、現代的にいうと「欲望の魔性」とでも呼びうるのではなからうか。

——権力に巣くう魔性を権力の魔性といいますし、資本そのもののもつ悪魔的性格を資本の魔性と呼んでいます。また、科学の魔性を指摘する人もいます。こういったことから考えますと、欲望そのものに内在する悪の性質をさして、「欲望の魔性」と定義できそうです。

——ところで、仏法で説く欲界の頂上とは、他化自在天のことですね。

池田 そう、そこに、第六天の魔王が住んでいるというのです。他化自在の名の示すごとく、欲望の魔性は、他の生命的存在を支配し、所有し、自己の思うがままにあやつり、そのこと自体に喜びを感じるのです。

——私たち自身の生命のなかにも、自然や他者を支配下におさめ、自由に

動かし、悪魔的な喜びにひたろうとする欲望がうごめいていますね。

池田 そういった意味では、すべての欲望が、魔性を帯びがちであるとも考えられる。だが、もつとも顕著に、生命の魔性が姿をあらわすのは、支配欲であり、権力欲であるように思われる。

——物質にむかう所有欲、人間関係では自己顕示欲とか名誉欲などにもひそんでいますね。

——この点について、ニーチェが権力への欲望を、人間のあらゆる欲望の根本においたのは、高く評価されるのではないでしょうか。アドラーは、精神分析の立ち場から、権力への意志を追究していますが——。

池田 仏法の見識に近いと思う。

——フロイトも、一般には性欲中心説のように考えられており、また、たしかにそう受けとれる面もありますが、彼の晩年の学説では、生の本能とともに死の本能をみいだしています。死の本能とは、生命を破壊に導く本能です。

池田 死の本能も、また、マルクーゼの提示する死の衝動しょうどうなども、欲望の魔

性の働きの一面だと思う。他者を奴隷のごとくあつかい、生命本源の力を奪いつづけるのが、他化自在天の本性だからです。

——まるで、西洋の吸血鬼きゆうけつきみたいですね。

池田 仏法では魔性とは何かということについて、ずばり「奪命者」だつみょうしやとある。生を破壊し、生きる力を抜きとっていく、そして、すべての生命的存在を地獄の苦悩におとしいれる、そういった働きを魔性と表現したのです。

さて、仏法の欲望論は、権力、支配、所有などの欲望の、もう一步深いところにもまでおよんでいると推せられる。つまり、これらの欲望にその姿をあらわす第六天の魔王の正体は何か、ということをも人間存在そのものの内奥に追究していったのです。

日蓮大聖人の『治病大小権実違自』あひようだいししょうこんじつのもくには、「元品の無明がんぽんむみょうは第六天の魔王と顕あらわれ」とあります。欲望のもつ悪魔的性格をもたらす本体は、「元品の無明」であるということです。「元品」とは、生命存在の根本にあり、本然的にそなわっているという意味だと思う。「無明」とは「明らかなること無し」という意

味で、生命の本質の昏いことをさしています。では、「元品の無明」とは具体的にはいかなるものかといえ、私は、生命の「我」自体に本来的に内在するエゴイズムの実体であるといえると思う。また、欲望の魔性との対比からすれば、それは、生命そのものの魔性であるともいえるでしょう。

この生命の魔性が、欲望の魔性としての形をとり、それは同時に、人間の自我にくい入って、利己的で、排他的で、独善的な自我としての姿をとるのであらう。したがって、欲望も自我もともに、エゴイステイックな性質をあざやかに示すに至るのです。

——とすると、この生命の魔性が力を得れば、人界や天界における理性的、良心的な自我も、たちまちにして利己心や増上慢の心に「変身」してしまうのですね。

池田 その「変身」のプロセスを、物質文明の進展をかりて、具体的に説明してみよう。いままで考察してきたように、現代科学と技術の駆使は、欲望充足のための環境づくりに邁進してきた。その結果、生存権をうばわれたり、食

べものにも飢餓を感じる状況から、いちおう、人間的自我の営みをたすけるような豊かな社会をつくりあげてきたと思われた。だが、本能的欲望の充足をへて、各種の心情的な欲望から、権力、所有などの文化的、社会的な欲望のかぎりない充足にむかうにつれて、はからずも、人間生命のなかから、欲望の魔性をひきずりだしてしまったのです。

——あらゆる欲望のゆきつくところに、他化自在天の暗躍あんやくが待っていたのですね。

池田 その魔性の暗躍が、あらゆる人びとと大自然の生存の権利をさえ、無残にもうばいさろうとしている。そして、その根源は、権力にあぐらをかき、支配欲によいしれ、名誉を求めて、狂ったように乱舞する現代人の生命の内奥にあると考えられる。こうした人びとの生命の「我」には、もはや人間的な色彩は消えうせてしまっているであろう。たとえ、理性の働きは残っていても、それは、魔性にみいられた理性であり、人の生の創造をたすける英知としての輝きはない。したがって、他の生命体を破滅させるための悪知恵としてしかそ

の機能を示さないのです。

こうして、人間生命の奥に巣くう魔性は、欲望とか自我とか理性さえも変質させつつ、また、それらを通して、権力や資本や企業や科学技術の論理の中核に、安住の座をしめるに至ったのであり、公害や戦争や自然破壊をまきおこすことに、喜びをさえ感じているのかもしれない。

——現代文明の悪にそめられた人の生命は、ひとたまりもなく、地獄界や他の悪道へと転落していきますね。

池田 まさしく、六道輪廻りんね(注6)だよ。他化自在天の君臨くんりんするところ、その魔性による生命の破壊は地獄であり、少しばかりの欲求をみたさんと徘徊はいかいする「我」は餓鬼であり、本能的な生にのみ執着する心は畜生であり、勝他の念にかられる利己心は修羅界とはいえないであろうか。生命の本然のエゴの前には、人間的自我も、あまりにも無力であると断ぜざるをえないようです。

——こうして考えてみますと、私たち自身のなかにひそむとはいえ、生命の魔性にひきずられて生きる六道の生命には、真の意味での自由も主体性もあ

りませんね。私は、人界とか天界になると、自由度も高く、主体的に生きられるのではないかとも思っていたのですが――。

池田 たしかに、人と天の世界は、三悪道や修羅界にくらべると、はるかに充実し、自由であるとはいえる。この事実を否定することはできないだろう。だが、その自由とか、主体性とかは、もっと深く考えると、大自然とか、人類の遺産とか、社会環境によってまもられ、いわば、外から与えられたものだという根源的な事実にも着目しなければなるまい。

――でも、人間的自我には理性の光りとか、良心とか、意志とか、意欲とか、また判断力などもそなわっていますか――。

池田 たしかに、人界の「我」は、自己の意志にもとづいて生きている。しかし、その人間界の「我」という生命自体は、宇宙と地球のみごとな働きによつてはぐくまれ、また、それなくしては、この世に生をうけることすらできなかったであろう。とすれば、私たちが人間として、この地球上に生誕し、人間的自我を形成するに至った過程には、宇宙生命のかぎりない慈しみの心いっくが関与

しているにちがいあるまい。

このような意味からすれば、人と天の境涯における自由や主体性は、自分だけの力によってもたらされたものではないといえよう。私たちの生命が、生誕時に、すでに、人間的自我への可能性をはらんでいるからには、それを可能にした宇宙生命の慈悲の働きにも、多大な感謝の念を忘れてはならないと思う。と同時に、こんどは、人間生命にもともとそなわっている理性的、良心的な自我にさらにみがきをかけ、真の意味での自由と主体性を確立すべきではなかるうか。そこにこそ、宇宙生命の慈悲心を受けとめ、それに応^{こた}える人間としての生き方がみいだされるのだと主張したい。

——生命の「我」の、決意をこめた主体的な錬磨^{れんま}が、欲望の魔性とか、利己心との真正面からの挑戦にもなるわけですね。

池田 生命内奥の魔性、つまり、元品の無明との対決から、人と天の世界をもこえた新天地が開けてくる。それが、六道に対する四聖の境涯の開拓なのです。だからといって、六道の生活を離れてしまうわけではない。魔性の浸透し

た文明と社会のなかにありながら、自己の胸中に開いた新しい境涯を輝やかせつつ、六道の世界をリードし、貪欲と利己心をくみいれた生命内在の破壊力をうちくだくのです。四聖への道は、人間変革と形成の方途であり、また、文明の悪を抜きとる営みにも通じていよう。

二乗の境涯について

——四聖の境地とは、仏法では声聞、縁覚、菩薩、仏をさすとされていますが、このうち声聞と縁覚とをまとめて二乗^{にじよう}といっています。そこで、二乗という境涯について少しディスカッションをしたいと思います。

——『観心本尊抄』には「世間の無常は眼前にあり豈^{あた}人界に二乗界無からんや」と記されています。二乗という生命の「我」の特色は、あらゆる存在物を無常であると実感することでしょうか。

池田 少なくとも、六道からは一步開いた境涯だと思う。それにしても、二乗の「我」は、どうして生命的存在の活動や世の中の動きを、有為^{うゐ}転変^{てんぺん}するものであるとみぬくことができたのだろうか。

——たとえば、私たちが、願望をようやく達成して、天界の喜びにひたりきっているとき、それが、権力でも、地位でも、名誉でも同じですが、やはり、手に入れたものに執着し、つい、永遠に失われないような錯覚におちいつてしまいがちです。そして、名誉や地位が、するりと、自分の手から抜けおちると、悲嘆にくれてしまう。

——環境の動きのままに、また、願望のつきあげてくるままに、根なし草のようにただよう生き方ですね。

池田 世の変化相にまきこまれ、のめりこんでいく自我には、けっして、無常感はわきおこってはこないでしょう。しかし、ひとたび、自らの歩んできた道をふりかえり、生き方そのものへ反省の眼をむけさえすれば、あらゆる生命的存在の絶えまない流転が、あざやかにみとめられるのではなからうか。

私は、このような意味から、二乗の「我」を「反省的自我」といっておきたい。また、その反省の眼を、生命と宇宙の内奥へとさしむけるならば、反省はそのまま内省にも通じてくるであろう。

——人界や天界の自我が、どちらかといえば、外の世界、つまり、依報にむかいあっていたのに対して、声聞と縁覺の「我」は、自己の生命と人生の奥深くへ侵入していくのですね。

池田　そう考えてもよい。しかし、生命の内奥に英知の光りをさしこむことは、その光りの強さに応じて、外界の姿を照らしだすことにもなると思う。また、現在の一瞬の生を深く知れば、過去と未来も、同時にうかびあがってくるものだ。「瞬間即永遠」の原理から考えてもね。このような事実を、わかりやすい例をかりて説明してみよう。

私は、人界についてのべたところで、人間的自我というのは、それを生みだした生命の大海原にささえられていると主張してきた。しかし、人界や天界においては、生命の「我」に、たとえば理性や良心や意志や愛情などの、精神的な欲望がそなわっていたとしても、そのもてる力を、母なる生命の海の探索にはむけていないようだ。大海の荒波をのりきることに必死だからね。

——でも、海の状態をよく知らないで、すぐひっくりかえります。

池田　そこで、たとえば、生命の海の荒波にもまれつづけている自我が、その理性や直観知の光りを、海の奥底をめざしてさしむけようとしているのが、声聞や縁覚の境涯とは考えられないだろうか。反省的自我を、まっ暗な闇におおわれた底しれぬ大海の表面に、一筋の光りをはなつ光源であると考えてみよう。自我のもつ光りとは、理性であり、良心であり、また、人間的な愛情や真理への探求欲である場合もある。各個人によって、その光源の強さも、色合いも千差万別であろう。だが、ともかく、反省的自我の光りは、海の表面を洗うとともに、その深い層のありさまをも、ある程度は照らしだしもするであらう。すると、その光りのとどく範囲内では、海面下の様相をも手にとるように知ることができるといふものです。

——天文学的なことでいいますと、学者たちの理性の光りで、宇宙生命の表面をたどっていけば、現在、宇宙が膨脹しているとか、もっとも遠方の星は光速に近い速度で遠ざかっているであらうとかいったような事実が判明するわけです。また、こんどは、人間のつくりあげた文化や社会の構造に焦点をあて

れば、政治とか経済などに特有な論理をもみいだせるでしょう。

——もし、その光りを、私たち自身の生命の奥にさしこめば、さまざまな欲望の葛藤^{かつどう}や感情の衝突や心身のエネルギーの激流に遭遇^{そうぐう}するはずです。

池田 反省的もしくは内省的自我のはなつ明るみは、宇宙生命の営みを、その変転の姿を追いながらあざやかにみえらせましょう。すると、人は、たえまなく流動する万物の無常の変化に身をまかせて、なんの主体性もなくふりまわされていたみずからの姿をみだし、その愚かさにあきれはてるのではなかろうか。

——二乗にしてはじめて、真実の意味での主体性の確立へとむかうのですね。自己の人間としての生き方を求めて——。

池田 生命の海、その海はとうぜん、宇宙生命の大海と一体であるが、その姿が少しずつわかってくるにつれて、海の動きと協調しながら、しかも主体性を保ちつづけられるような生き方への思索と実践がはじまるのです。だが、問題なのは、自我そのものの性質だね。いかに内省し、内観しようと努力しても、

生命の「我」が少しも輝やかないのでは、まったくお手あげだからです。

理性や英知の光りは、光源をはなれるにしたがつて、加速度的に強さを減じていくであろう。また、光りそのものの色彩も人それぞれだと思う。たとえば、子供でも、数学の好きな頭脳をもっている子もいるし、論理的判断はからきし自信がないが、美的な直観とか、音楽への感応は拔群だという個性を示す子もいる。

—— かんばしくない例をあげますと、するどい分析力をもってはいるが、良心とか愛情のまったく欠如している者もいます。慈悲心ともなれば、薬にしかくとも影も形もない——。

池田 やはり人間として異常でしょうね。だのに、私の頭脳はすぐれているのだ、などと慢心をおこしている。まあ、こうなれば、二乗というより、三悪道の境地におちいつてはいるがね。

—— ところで、生命の「我」を少しでも輝やかすには、やはり、人生経験とか教育なども重要になってきますね。

池田 教育も入るだろうが、人類の遺産なり、先人の教え、思想を謙虚な姿勢で学ぶことです。二乗のなかの声聞きこというのは、もともとの意味は、仏しよの声しやう教きやうを聞き、伝えるということだったのだからね。先哲のきずきあげ、苦闘した哲理なり、学問なり、人生体験なりを真剣に吸収し、体得することによって、私たちの生命の「我」のはなつ光りの強度と質を補強することも可能になろう。

——そこで具体的に、声聞界というと、学生とか知識階級などが、すぐうかびあがってくるのですが——。

池田 たしかに、学生やその道の専門家は、声聞の境涯にひたる機会に恵まれているであろう。また、その素質も豊かだとはいえる。しかし、あらゆる人びとの体験や知識を謙虚に理解し、自己のものにしようとする姿勢をたもっている人は、すべて声聞の境地をあらわせると考えるべきではないだろうか。

たんに知識の豊かさを誇るなどというのは声聞界とはいえない。仏法では食法餓鬼がくといって、餓鬼界に分類しています。そうではなくて、そこから自分自身というものに目を向け、みずからを精神的、人間的に豊かにしていこうとい

うのが声聞なのです。

たとえば、自分の仕事をただノルマだけ果たせばよいなどという気持ちでとりくんでいる場合は六道を出ないが、その仕事を通して、みずからの人間的成長を期していこうという場合、その人の「我」は声聞界にあるといえよう。

——つまり、「遅れず、休まず、働かず」で、給料ばかり気にしているような状態では、たとえ大学の研究室に通っているとか、新聞や雑誌の仕事にたずさわっていても、けっして、二乗ではありませんね。たいていは、畜生界とか修羅界をめぐっていると考えられます。

——声聞の自我は、先人や他の人びとの言語や、また思想、考え方を吸収し、それによって「我」を輝やかすのですが、仏法の二乗には、声聞とともに縁覚という境涯がとかれていきます。縁覚も、自我をみがく方途を示した一つの境涯と考えてよいのでしょうか。

池田 縁覚は、その言葉どおりの意味では、みずから、何らかのものを縁として悟るということです。だから独覚ともいう。

——何らかのものとは——。

池田 あらゆる生命現象です。大宇宙のみごとな変転も、野に咲く一輪の花も、夜空にかかるおぼろ月も、新聞紙上の小さなニュースも、縁覚の「我」にとって、すべてが悟りの縁となりうるでしょう。また、上空をおおうスモッグや、ある日店頭にあらわれた奇形魚や、家の前を流れる川の悪臭なども、一つの縁です。それらの縁を手がかりにして、思索し、迷い、苦闘しつつ、はつと独自の悟りを得る——。

——悟りといいますと、芸術家や科学者や名人ですね。彼らが、自然、宇宙、世界を手がかりにして一種のインスピレーションをうける。まあ、こういったことが思いつくのですが——。

池田 先覚者の道の多くが、縁覚の「我」によってもたらされることはたしかです。

——会長の『人間革命』第四巻にもひかれています。有名なデカルトの「炉部屋の啓示」ですね。少し読みあげてみますと、

——ある秋の夕暮れ、ドナウ川の上流、ウルム市の近郊の、ある寒村に泊まった彼は、静かな宿舎で、誰にもわずらわされることなく、暖かい炉部屋で深い思索におちた。

「一六一九年十一月十日、靈感にみたまされて、驚くべき学問の基礎を見いだした」と、彼はその手記で言っている。この「炉部屋の思索」こそ、デカルトの生涯と哲学を決定づけた瞬間ともいえよう。

とあります。この瞬間の生が「我考う、故に我あり」^(注7)との明証へと発展していき、理性を中心とした西洋科学の哲学的基盤を確立したのです。

——実存主義の哲学者、キルケゴールの経験もすばらしいですね。ことわるまでもありませんが、実存主義というのは、世の中の荒波に身をまかせて、ただ、受け身のままの生を送る人生からの、主体的な脱却をめざして次第に形成されてきた哲学の流れです。個性を失い、情熱も目標もない人びとの群れを、ハイデッガーなどは「ひと」と呼んでいます。これは、いま考察している十界論をあてはめると、さしずめ畜生界とか他の三悪道あたりのような気がします。

また、キルケゴールは、情熱の失われた時代を「水平化」と表現しています。誰の顔をみても、新鮮な息吹きが消えうせている。そしてただ、他の人びとと同じように、欲望のおもむくままに生きている。そこには、個性をなくし、未来を失った家畜にも似た人間の群れがあるにすぎない。そういう時代の到来を「水平化」といったのだと思います。しかし、人間の本来の姿は、「ひと」ではなく、もっと個性的、内面的な、そして力強い生き方を示すはずである、というので、その本来的な自己、人間のあるべき姿を求めて思索していくのです。哲人の思索の高まりが、キルケゴールの「単独者」、ニーチエの「超人」の思想を生むのですが、キルケゴールの場合、一八三五年のある日、突如として、人生と世界についての見方が一変したといえます。そのような体験を、彼は、「ちようどそのとき大きな地震が、恐ろしい変動がおきた。それはわたくしにあらゆる現象の新しい解釈を強要した」と日記につづっています。人は、彼の生命におきたこの変革を「精神の大地震」と呼んでいます。

池田 一種の変革体験です。生き方も、価値観も、使命も目的も、そして、

生きていくことの意味さえが、それらの根底からくつがえってしまふ。そうすると、宇宙万物の営みにも、いままでとはちがった独自の意味をはっきりと汲みとれるのではなからうか。

いままで、不明瞭にただ眺めていた太陽の運行や恒星のまたたきにも、驚くほどの不思議さと、そして深い哲理の存在をみいだすかもしれない。ともかく、西洋では啓示という言葉を使うが、その瞬間、デカルトやキルケゴールの生命に真の縁覚としての、新しい「眼」が開かれたのであろう。そして、暗黒の生命の世界に、かの哲人たちの自我が輝やき、まったく独自の生命空間が広がっていったようだ。それにしても「精神の大地震」とはうまく表現したものだね。まったく実感がでている。

だが、忘れてならないのは、デカルトやキルケゴールが、一つの悟りともいうべき境涯を開くには、筆舌につくしがたい努力と汗の結晶が必要だったという事実です。縁覚は、みずからの力で、宇宙生命の営みにふれ、そこから、真理をみいだし、しかも、その真理を体現していく境地だと思う。いわば、宇宙

と生命の、あらゆる生命的存在をはぐくみ、創造していく営みへの、独自の立ち場からの参画さんかくといえるでしょう。

——こういった生命状態から、縁覚界を考察してきますと、縁覚の悟りというのは、芸術家や哲人だけに限られるわけではないようですね。誰でも、その努力と研鑽によつては、みずからの「我」をみがきあげ、直観知をひらめかすことができそうです。

池田 卑近な例をあげれば、家庭の主婦が、物価高で家計がどうにも苦しくてやりきれない場合、どうすれば少しでも豊かにすることが出来るだろうか、と悩み思索していると、家計のやりくりにも、ふと、主婦らしいまい知恵がわいてくることがある。

また、おしゅうとさんとうまくいかない場合も、先輩の助言を聞いたりしながら、悩みをうけとめて思索しぬいていく。すると、あつ、こうすれば感情のこじれがほぐれるのだ、というヒラメキみたいなものがパツとひらけてくる。また、どんな仕事でも同じだと思う。新しいものを開拓しようとする努力が、

つみ重なって、ある瞬間、一筋の道がみえてくるものだ。これらはすべて縁覚界の「我」のはなつ知恵とはいえないだろうか。

——公害についても、水俣でも新潟でもそうでしたが、河や海で魚をとって生活していた漁師の人たちが、大学の教授などがいろいろ議論をしている間に、ちゃんと、水に含まれる毒がどこから流れてくるか、その元凶^{げんきょう}を正確にいあてていました。

イタイイタイ病の神通川の鉋毒にも、その流域の人びとは何代にもわたって苦しめられていましたから、いやでも考えないと生命にかかわりますからね。何十キロと離れた上流の鉋山のやり方を直観的にみぬいていました。どんなに理屈をこねまわしても、自己の生命をかけた人の洞察眼だけはごまかせないものだと思います。

池田 庶民の「我」の錬磨と研鑽が、家庭を和楽にし、社会の構造をかえ、政治や経済のあり方にも痛烈な一撃を与える力となりうるのです。

——ところで、二乗の生命感ですが、精神的な喜びといえましようか。

池田 天界のなかの無色界でも、生命の充実、自由の拡大、生の創造などによる喜びが味わえる。しかし、天界の場合は、おもに、良好な外界の種々の条件によってひきだされたものです。それに対して二乗界の喜びは、みずからの力で生命を充実させ、創造した場合の実感だね。したがって、とくに縁覚の境地になると喜びというより歓喜に近いのではなからうか。

——さんまいきよう三昧境などとも表現しますね。

池田 先哲の教えを学ぶことによって得られる、精神的な喜びは、声聞界の実感だね。私たちが、つね日頃、疑問に思っていたことを、本を読んだり、また、他の人から聞いて「なるほど、そうか」と納得し、そこから自分なりの生き方を知ったときのような感覚です。

縁覚界は、みずから発見し、あるいは創造したことによって得られるものだから、声聞界の感覚よりも一段と深いといえるでしょう。

——こうした二乗の歓びの深さは、努力の大きさに比例するのでしょうか。

池田 というより、自我の錬磨の程度によるのではないかと思う。結局、二

乗が向いていくところは、自己自身だからね。

——自我をみがいていきますと、その生命体のおよぼす影響範囲もぐんぐん広がっていくと思われませんが——。

池田 生命の「我」の発する光明のとどくところ、すなわち、その人の生命空間といえそうです。二乗は、みずからの力で、暗黒の生命の大海に光りをなげかけ、その明るみのなかで生を享受する。つまり、直観知にてらしだされた独自の世界をもつ。

学者は学問の世界に、サラリーマンは仕事の世界に、そして主婦は家庭と近隣に、二乗としての生命空間をきずきあげることができよう。個人によって、その生命空間の広がっていく分野とか、方向とか、深さなどはちがうであろうが、少なくとも、六道の自我のもつ影響力よりはずっと大きい。

その、速く、そして、強い生命の潮流を、二乗は悟りの瞬間、目もくらむばかりの閃光をはなって燃焼させる。そこに、自分でも思ってもみなかったような英知がひらめき、新たな真理が発見され、新しい前進への道が開かれてくる。

そして、生の燃焼が、二乗の「我」をつきあげて精神的な喜びの感情をもたらすのではなからうか――。

――二乗という生命状態については、いままでのところでよくわかりました。たしかに、二乗は六道よりはすばらしい境涯です。にもかかわらず、仏法では、大乘教に入ると、二乗はきびしく弾呵だんかされています。

日蓮大聖人の『開目抄』かいもくしょうなどを拝すると、二乗は三惡道以下であるとか、六道よりも劣るとかいった文がでてきます。なぜ、二乗はこれほど、糾弾きゅうだんされなければならぬのでしょうか。

池田 端的にいえば、大別して二つの根拠があると思う。一つは、みずからの悟りに固執し、それに陶醉とうずいするあまり、つい、増上慢の心をひきおこしてしまふということです。もう一つは、利己的な性格をどうしてもぬぐいきれないということ。この二つの根拠の正しさを、生命論の立場から少々、のべてみたい。

二乗は、先哲の教えや宇宙生命の営みにふれて、自己の「我」をみがきあげ

ていく。そこには強い意志やまた、燃えあがる意欲が要求されることはいうまでもあるまい。強靱^{きやうじん}な意志の力は、理性とか、精神的な欲望とかの力をまずであらうし、また、一種の悟りをもたらしすのも真実である。しかし、その悟りが無上のもの、つまり、宇宙と生命の本源にまで達したものであると思ひこみ、つい、みずからの力の限界をも忘れてしまう。その瞬間に、生命の奥深くひそんでいた、かの生命の魔性の胎動を呼びおこすのです。それは、ちょうど、天界の「我」が、物質的欲望とか、権力欲などを充^みたしたその頂点で、欲望の魔性をひきずりだしていた事実にも似ている。

—— 私たちも、研究生生活などしておりまして、いままで誰も知らない事実をみいだしたとします。凡人の常かもしれないませんが、やはり、自分が急に同僚より偉くなったような気になったりします。そういうときは、同僚が小さくみえますし、また、愚かに思えることさえないとはいいきれません。自分の方が、ずっと愚かなのに、それに気がつかない。そして、関係する学会に発表するまでは、誰にも教えないぞ、なんて頑張ってみたり、つい、有頂天になるもので

す。

池田 声聞や縁覺の喜びが、その頂点において、増上慢の心や利己心をゆり動かし、生命そのものの魔性をさえゆさぶっているのだ。しかも、二乗の「我」は、するどい理性をもち、清らかな良心をはぐくもうと努めていたとしても、生命の底からわきおこってくる欲望の魔性や利己心の蠢うごめきには、ほとんどなすすべもないのが常です。どうしてかという、生命の魔性の本体である「元品の無明」は、私たちの生命において、理性やあらゆる欲望や良心や愛情などの、さらに深い層にひそんでいるからです。

また、こうも考えられる。二乗の「我」といえども、生命の魔性を打ち破る方途を知らないがゆえに、その自我の発する光りにも明暗がともない、限界をおびざるをえないのであると――。

――つまり、二乗は、みずからの人格なり、生命そのものを錬磨しようと努力している。また、それなりの効果もあがってはいる。しかし、声聞の思索や、縁覺の悟りでは、生命そのものの本源にまでくい入ることはできないとい

うわけでしょうか。

池田 宇宙と生命の奥底にまでは、とてもその力はおよばない。

——もう一つ疑問があるのですが、二乗は、三悪道や六道よりもおとつているといわれる理由はどういうことでしょうか。

池田 一つは、いまもずっとのべてきたように、増上慢になって、謙虚な心を失ってしまふという危険性をはらんでいることだと思う。だから、たとえば、人生の真実の生き方とか、宇宙や生命に関するすばらしい哲理を示す人がいても、それを聞く耳をもたない。また、たとえきいたとしても、批判をすることへのみ心を砕いている。批判のための批判をして、自己満足しているという人もいるようです。それでは、自分も他者も、本当の幸福境涯への道をみずから閉ざしてしまふに等しい。

つぎの理由は、二乗は、六道の「我」よりも、善きにせよ、悪^あしきにせよ、とにかく力をもっているという事実です。知識は豊かだし、理性もするどい。直観力もある。だから、それらの力が、もし、生命の魔性に魅^みいられると、宇

宙と生命への破壊力は六道の比ではなからう。

——たとえば、六道の「我」の力を、ピストルとか竹やりとかの暴力だとしますと、二乗のもつ力は、さしずめ原爆や水爆でしょう。核爆発の原理を発見し、そのエネルギーを解放したのは、とりもなおさず科学者の悟りですから——。日本刀だと、たとえ狂人がもっていても、うまくゆけば刀傷だけですみますが、原爆や水爆を悪用すれば、人類全体を一瞬にして死滅させることはまちがいなしですからね。

池田 もう一つの理由をあげると、二乗の「我」は六道の生命よりも主体性が強いから、悪い方へ傾きかけるとひきもどすことがきわめてむずかしいということです。三悪道だと、もし環境を変えてやると、他の境涯にパツとうつることとも可能でしょう。ところが、二乗は、頑として動かない。主体性があるといえば、そういえないこともないが、悪の方にむかう頑迷さは、まったく手におえないだろう。「千万人といえども我行かん」などという意志力も、その方向が戦争への道だったら、これほどの悲劇はあるまい。

——公害で、自分の主張なり、学説が、どんなに論破されても、平然としてゐる専門家もいます。並の意志力ではとても耐えられないと思うこともありますが、それでもまだ、ねばっている。歴史がかならず証明してくれるとか、なんとかいって——。

池田　また、利己心によつて、みずからおびきよせた地獄の苦悩にのたうつていても、まだ、おれは二乗だなんて錯覚している人もいるね。

——変な誇りですね。

池田　生命の魔性を打ち破つてはじめて、二乗の「我」の輝きもさらに、新鮮な色合いをみせるのだと思う。それが、真実の二乗です。仏法は、さらに新しい主体性の確立を求めて、その方途を模索しつつ、生命の深みへと、その探索の歩を進めていくのです。

菩薩界と仏界

——先日、湯川秀樹博士と同志社大学の市川亀久彌教授、それから梅原猛氏の『人間の再発見』という対談集を読みました。そのなかで、仏法の「慈悲」についての、興味深い体験が話題にのぼっていました。その対談を少しずつ引用しながら、おおまかなところを述べてみます。

対談の順序とはちよつと前後しますが、湯川博士が、仏法の「慈悲」に「悲」が入っているところが「博愛」とか、孔子の「仁」、キリスト教の「隣人愛」などどこか違ふと指摘されているのです。すると市川氏が「いっしよに悲しんであげるといふのじゃないですか」と——。湯川博士が「いっしよに悲しむには、自分が悲しまなければだめだ」とうけています。梅原氏が「悲といふの

はやはり認識だと思えますけれども、それは生命の根本的な状況への同化みたいなものですね」と結論づけていました。

そのあとに、市川氏が「それが現在では完全に欠けている」というのに対して湯川博士の言葉がつづいています。「欠けているはずはないんですがね。あなたは雛^{ひな}で体験された。私は孫娘ができた。それまでは、孫ができたかどうかという気持ちができるか全然知らなかった。ところが、できてみて、はじめて、人間というのは不思議な気持ちを持っているものだということがわかった。(中略)孫というものは無条件でかわいいものですよ。(中略)純粹無垢^{むく}と言ったら嘘になるけれども、とにかく理屈以前の気持ちでしてね。孫ができてみると、それがパツと出るわけや。本来あるべきはすのものだけでも、知らずにいるわけやね。雛を見ておったから、パツとでる。もともとあったわけですね。だから、だれでもチャンスがあれば体験しているんじゃないでしょうかね」と――。

――そこにでくる市川氏の雛の体験というのはどういったものですか。

――娘さんが雛を買ってきて、死にそうになって、一家で看病するのです

ね。そうしているうちに、徐々に雛中心の生活がはじまるのです。大学から「雛は生きてるか」と電話をかけたとか、姪めいにあたる娘さんが雛をだいてねるとかいった話です。

その雛は結局、死んでしまうのですが、市川氏は「ただ、体験者として言えますことは、雛の命に対する私たちの感情と、ちょうど一年前に癌がんの手術の失敗で三日間の間苦しみがきながら死んでいった当時の母に対する心情のやるせなかった状態と、たいした区別はありませんでした」と述懐しています。

池田 お孫さんのことにしても、雛のことにしても、いい話だ。しぜんに心が温まってくるようです。しかも、仏法に説く慈悲の本質をずばりといっているように思われます。

——日蓮大聖人の『御義口伝おんぎくでん』には、「大悲とは母の子を思う慈悲の如し今日蓮等の慈悲なり」と記されています。母親の愛情は、慈悲に通じるものをもっているのですね。

池田 母性愛はまったく無条件だからです。これは、湯川博士が、お孫さん

が無条件にかわいいといわれている感情にも通じるようだ。母の真実の愛は子供の成長と幸福のみを願って、自分の生活や生命すら犠牲にすることもいとわないものです。子供が少しでも熱を出したり、元気がなかったりすると、自分の病氣以上に苦しむ。悲しみも喜びも、苦しみも楽しさも、すべてが愛情につながれて母と子は一体なのです。

——しかし、母性愛もともすれば、盲目の愛におちいることもあります。また、しらずしらずのうちに、母親の利己心が、子供の生活を支配していたりします。

池田　つまり、生命の魔性の影をせおった愛情といえよう。そのような愛の姿は、慈悲心に似てはいるが、まったく別のものにすりかわっている。また、母親の愛は、ともすればかたよることも少なくはない。自分の子供がかわいいだけ、かえって他の子供が憎らしくてしかたがないといったようにね。このように、慈悲とは似ても似つかぬ面もあるにしても、母の愛情というものが慈悲心に非常に近い内容をふくんでいることはたしかだと思う。「母の子を思う慈

悲の如し」とあるとおりです。

まあ、こういったような母の愛をも含めて、孫娘へのかわいさとか、雛を思う心とかが、湯川博士もいつているように、人間には本然的にそなわっていると考えるべきでしょう。ただ知らずにいるだけで、何らかのチャンスがあれば、ずっと顕現^{けんげん}してくるのです。日蓮大聖人は、『観心本尊抄』で「無顧^{むこ}の悪人も猶^{なほ}妻子を慈愛す菩薩界の一分なり」とおおせです。どのような悪人と思える者でも、妻や子供への慈愛を失っていない。つまり、菩薩界の一分をもとそなえている。

——その菩薩の働きというのは、慈悲の行為をさすのでしうか。

池田 菩薩の境涯は、生命全体にみなぎる慈悲の力にささえられている。もちろん、ここにいう慈悲の力とは、生の内奥からわきでる生命エネルギーそのものをさしているのだから、英知も、良心も、理性も、さまざまな精神的な欲望をも含むと考えねばなるまい。自然の総合的な知恵や、愛としての欲望や、強い意志と意欲や、障害に立ちむかう勇氣などが、慈悲のエネルギーととけあっ

て、利他の働きをなすとき、生命の「我」は菩薩の境地にあるといえよう。

——仏法では慈悲を「拔苦与楽^{ばつくよらく}」と訳しています。慈悲の悲が「拔苦」で、慈が「与楽」にあたるわけですが、ともに利他の行為ですね。

池田 利他でもあるし、また同時に自己実現への道程でもある。他者への働きかけが、そのまま自己の人格をみがきあげることに通じるからです。つまり、「拔苦」とは、相手の生の苦悶を抜き去ることだが、そのためには、まず相手と一体になり「同苦」しなければなるまい。梅原氏の言葉をかりれば「生命の根本的な状況への同化」といい得ると思う。そのうえで「拔苦」と「与楽」の実践があると考えられる。また、苦悩を抜き、楽を与える行動そのものが、自己の自我をみがきあげ、「同苦」を可能にしていくともいえよう。ともかく、庶民のまっただなかにとびこんで、人びとの悲しみと苦しみを一身にひきうけて戦う行為にこそ、菩薩界の特徴があるのではなからうか。

——そこところが、二乗の「我」と根本的にちがうところですね。二乗界では、やはり思索とか洞察とかがポイントですから——。

池田 菩薩界の「我」はあくまで実践に重点をおく。思索もするし、洞察眼もきわめてするどい。しかし、それらは実践と一体なのです。

日蓮大聖人の『十法界明因果抄』には「菩薩界とは六道の凡夫ほんなの中において自身を軽んじ他人を重んじ悪を以て己に向け善を以て他に与えんと念おもう者有り」と記されています。「六道の凡夫」つまり庶民のなかで戦う。しかも「自身を軽んじ他人を重んじ」るのです。自身を重んじ他人を軽んじるではありません。世の中にはそういう利己の人が多いものだが――。

――たとえば、民衆の中に入っても、利己的な自我のままにふるまうのは、かえって害を流すだけです。生命の魔性の暗躍を許すだけです。そんなことなら、山林に一人ぼつんとたたずんでいてくれるほうが、他人に迷惑をかけるないだけましというものです。

――ところで、いまの言葉のあとに、「悪を以て己に向け善を以て他に与えんと念おもう」とありますが、このなかで「善を他に与え」というのは、すぐわかるのですが、「悪を以て己に向け」とはいったい何を示そうとしているの

でしようか。

池田　すべての悪の根源を一手にひきうけるだけの勇気が必要だということ
です。たとえば、菩薩について、『仏地経論』には「是れ勇猛の義なり」とあ
る。自己と他者の生命に巣くう魔性に挑戦し、それを打ち破りつつ、人びとに
楽を与える勇猛心こそが、菩薩の心には脈うっていなければならぬ。

私たちが、魔性に挑戦するべく勇気をふるいおこして、庶民を慈しみ、利他
の実践に自己の全存在をかけるとき、その行為が、私たち自身の生命に巣くっ
たエゴイズムをぬぐい去り、抜きとるのであり、その結果、生命の「我」が次
第にみがかれていく。すると、その「我」のはなつ英知の光明にてらされて、
他の人びとの心にうごめく魔性の暗躍をもはっきりとみてとることができるの
です。

——利他の戦いを通して勝ちとった知恵こそが、菩薩のもつ英知なのです
ね。

池田　菩薩という言葉は、菩提薩埵ぼだいさつたの略とされている。菩提とは仏の知恵で

あり、薩埵とは有情と訳す。有情についてはまた何らかの機会にくわしく考察したいと思うので、ここではひとまず生物、とくに人間の生命としておこらう。

利他行を通じてみがきぬかれた菩薩の知恵こそは、仏の知恵のあらわれといえそうです。慈悲の力と英知の光、勇氣あふれる決意をはらんだ意志、そして何よりも、利他の色彩をおびた自我を、菩薩の境涯にある生命は保持している。

——ここで、ちよつと論議が逆転するかもしれませんが、一つの疑問があります。それは、二乗との関係についてですが、二乗のうちで縁覚でさえも、自己中心性はぬぐいきれなかった。そして、生命の魔性の胎動をも許してしまつた。ところが、どうやら菩薩は、先ほどの話によりますと、欲望の魔性とかエゴなどもすでにのりこえていゝらしい。とすると、なぜのりこえられたのでしうか。

池田 何度もうくり返すようだが、利他の実践にある。他者を救ふことは、自分の利己心への真正面からの戦いなのだよ。私たちの身体ぜんぶをぶっつけて、慈悲の行為に邁進する。身も心も、生命のすべてが、慈悲という行動の塊りかたまりみ

たいになっている。

日々の生活自体が、どの一瞬をとっても、慈悲でないものはない。こうなつてくると、利己心が働こうとしても、少しのチャンスもないであろう。たとえば、魔性をはらんでいても、その力は、たえず打ち破られている。と同時に、私たちの生命の奥から、利他という行動に触発されて、あらゆる生をはぐくむ、生命本源の力が、慈悲や英知のエネルギーとなつて、たえまなくわきあがってくるのです。このような過程をへて、私たちの、ともすれば利己的になりやすい「我」も、しだいに利他の性格をおび、それにつれて、ますます理性、良心、愛、精神的な欲望などの発動力が強まってくると思われる。

——経文には、文殊師利、観音、薬王、普賢、弥勒、妙音などの菩薩が活躍しています。これらは、利他の具体的な姿を示しているのですね。

池田 文殊師利は知恵です。薬王は医術、普賢は学理、弥勒は慈悲、そして、妙音は音楽、まあ芸術一般が入るでしょう。観音は世相、つまり、政治や経済や世の中の動きを察知する働きです。人によって個性も独自だし、才能にも向

きとか不向きがあるからね。でも、どんな行ないをしようと、そのすべてが利他の実践であることに変わりはない。このようにして、迹化しやくわの菩薩(注8)たちは、みずからの人格をみがき、生命本源のエネルギーの流出を強化しようとつとめたのだと思う。

——しかし、迹化の菩薩の行ない、仏法的に言えば修行ですが、それによつて、生命の「我」の状態をすっかりかえてしまうのは、じつに大変なことではないでしょうか。ちよつと油断すれば、すぐ、利己心が顔を出す。きわめてエゴイステイックな行動に走りがちになります。また、自分の行ないが無慈悲だとわかっていながら、やめられないこともあります。むしろ、どんなに意志の強い人でも、その方が多いかもしれません。自分ながら、始末におえないと思うこともたびたびです。

そこで、仏法ではどういう修行をせよと説いているかといいますと、たとえば別教(注9)などでは菩薩の修行を、五十二位の段階にわけています。その修行が、根本的には、エゴとの戦い、魔性への挑戦だということは理解できるのですが、

その内容をみますと、私たちにはとてもやり通せるような自信がありません。途中で、投げ出してしまいそうです。そんなに苦勞するぐらいなら、少しぐらいの不幸のほうがましだなんて――。地獄の境涯におちれば、そうもいってられないでしょうが――。

池田 迹化の菩薩の修行はたしかに厳しいし、また、人間形成への本格的な修行であるからには、厳しさも必要だとは思ふ。だが、途中でくじけては修行の意味をなさないからね。本当の幸福も、人間らしい生き方も、実存主義の言葉をかれば「本来的自己」の確立も、見果てぬ夢に終わってしまうでしょう。では、どうすればよいかというと、利他の行動によって自我を錬磨しつつ、同時に、私たちの生命の内奥から、利他におもむかざるをえないような慈悲のエネルギーをわきいだす方途を見つけだすことです。つまり、生命の外側から働きかける行動――いいかえれば利他行だけでも――とともに、それを見事に実らせる生命本源のエネルギーを生うの奥底から噴出ふんしゅつさせる。その両者が相まって働けば、いかなる困難があってもたじろがないし、また着実にして、主体

的で、充実しきった人生を送るための、生命的基盤をも築けるでしよう。

釈迦仏法における迹化の菩薩に対して、いま述べたような二つの側面からの実践、すなわち、生命の内と外からの魔性への挑戦を、現実社会のなかで行なおうとしている人間群像を、日蓮大聖人の仏法では、地涌の菩薩(注10)と呼んでいる。また、経文には、地涌の菩薩の主導者というかりーダーを四人あげて、上行、無辺行、浄行、安立行あんりゆうと名づけている。

『御義口伝』のなかには、この地涌の菩薩の境涯が明確に説かれているところがある。「常楽我浄」という四つの徳に配しての記述だけでも「此の四大菩薩の事を釈する時、疏じよの九を受けて輔正記ふしやうきの九に云く『経に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す(後略)』とあります。

さて、上行菩薩とは、「我を表し」とあるように、確固とした生命の「我」の確立です。環境の激変にも耐え、あらゆる困難をさえ、かえってみずからの試練のチャンスとして活用するような、まったく主体的な自我のことです。無

辺行菩薩とは、「常を表し」とあるから、永遠の生命を信じ、そのうえに立てた目標に向かってどこまでも挑戦していく働きを意味しています。しかもその慈悲の働きは、隣人を変え、地域を変え、日本と世界の歴史をも動かしていることとするふるまいを示すのです。

つぎに浄行菩薩というのは、「浄を表し」とあるように、清らかな生命の輝きを意味するのだけれども、清らかとは、醜い利己心やエゴをまったくぬぐい去っていることを指します。エゴや増上慢の心ではなく、利他にそめられた生命は、本然的な英知と理性の光りをはなつと思われる。そして安立行菩薩は、「樂を表し」とあるように、充実し楽しみきった生命の大地、つまり基盤に立脚している事実を指します。

『観心本尊抄』に「上行・無辺行・浄行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」とあるように、このような菩薩の境涯を、私たち自身の生命に築きあげることができなのです。

——地涌の菩薩の境涯に、私たちが十界論のはじめに設定した客観的な基

準を適用しますと、地涌の菩薩という境涯は、真実の力強い主体性をたもち、まったく自由自在にふるまい、しかも生命はかぎりなく充実している。生命エネルギーの発動力も、また能動性も、最高の高まりをみせています。

こうしてみますと、人間らしい生き方を求めて開始した十界論の探索もようやく、その目的を達せられそうです。ずばりいって、人間が人間らしく生きる境涯——それは、地涌の菩薩の生き方であると結論してもよさそうに思われてきました。

池田 私も賛成です。地涌の菩薩そのものについては、ごく簡単にふれただけだが、しかし、その具体的な行動はことごとく、利他の実践に連なっている。そして、四徳で示されているように、この菩薩の生命には欲望の魔性とか利己心などには、もはや屈服しないだけの力と知恵を無限にはらんでいることは認められそうです。

——社会や文明などに入りこんだ魔性と戦うだけの能力もそなえています。すべての人が、四菩薩の境地を現実に体得するにつれて、血なまぐさい硝煙しょうえんの

臭いも、この世の中から消えていくと思われます。つまり、人類の心の中に、平和のとりでが一つずつきずかれていくのでしよう。

そこで、不思議に思うのですが、地涌の菩薩をささえるかぎりなく豊かな生命のエネルギーは、どこからわき出してきたのでしようか。むろん、人間生命の深部からでしょうが、私たち自身の生命にも慈悲の力を満々とたたえた泉の本源が実在するかと考えてよいのでしようか。

池田 経文では、地涌の菩薩は大地より湧出^{ゆじゆう}したと記されている。大地とは生命の内奥であり、宇宙生命としての妙法をさします。妙法そのものが、私たちの生命のなかに、実在している。仏法では、それを仏の生命といいます。この仏の生命が現実の活動面に偉大な力をあらわすがゆえに、地涌の菩薩の行動も可能になるのだといえましよう。

——つまり、地涌の菩薩は、行動面からとらえると利他に徹する菩薩の働きですが、その本質というか、生命そのものは、すでに仏の生命、いいかえれば仏界なのですね。

池田 地涌の菩薩という生命は、迹化の菩薩とはちがつて、すでに仏界を顕現していると考えてよい。逆にいえば、その仏の生命が地涌の菩薩における四徳をもたらしただのです。

——では、仏の生命自体を具体的に述べると、どういうことになるのでしょうか。

池田 そこにいくと、きわめて難しい設問になる。『観心本尊抄』にも「但^{ただ}仏界計^{はか}り現じ難し九界を具するを以て強^しいて之を信じ疑惑せしむること勿^{なか}れ」と記されている。つまり、仏界のすべてをあらわすことはきわめてむずかしいので、私たちの生命に九界の境涯がそなわっている事実から、仏界の実在をも信じてほしいとの意味です。だが、ひとまず、仏の生命を知るための一つの手がかりとして、仏法に記された「仏の十号」を取り上げてみよう。

むろん、仏界の境地を推測することは、この生命論全体にかかわる重要なポイントとなることだが、説明不足になる個所も若干あるとは思う。それはあらかじめ了承してもらおうとして、仏の十号とは、仏の生命にそなわった偉大な力

とか英知とか、福德とか慈悲力とか資格などをあらわしたものと考えていいでしょう。そこでまず仏つまりブツダとは、知者、覺者と訳す。その知恵は宇宙と生命の根本原理を悟りきわめている。つぎに、如来ともいうのだけれども、これは瞬間瞬間の仏の生命活動が、すべて宇宙生命と一体であり、融合していることを指す。つまり永遠の生命の体得ともとれる。

——仏の別名のなかには、正徧知しょうへんち、調御丈夫じょうごじやうお、善逝ぜんぜい、明行足みやうぎやうそくなどというものもあります。このうち正徧知というのは、等正覺とうしやうかくともいいますから、仏の知恵がすべての衆生を照らすことですね。

池田 平等ともとれるし、また、宇宙のすべてを覺知するだけの英知をそなえているとも考えられる。

——調御丈夫は原義からしますと、丈夫の力をもってすべての衆生、つまり生命的存在すべてを調伏制御するという意味だそうですが——。

池田 他の人びとを幸福へと導くだけの力をもっている。そして利他の行為を實踐するということだが、それと同時に、仏の生命は自己の生命の變革をも

成し遂げるのです。というより大丈夫の力、強烈な生命のエネルギーによって、自己の生命に食い入った魔性の働きを調伏するのだ、と表現したほうがよさそうだね。他の生命への利他の働きかけは、自己の生命変革と同時なのです。

——そうしますと、つぎの善逝ですね。これは、もともとの意味は煩惱を断じて仏の境涯に達することだそうですが、調御丈夫の解釈とも関連して考えますと、煩惱は断ずるのではなく、利他の方向というか、実践へと振り向けていく。つまり昇華させるとか、方向転換させていく——こういった意味あいになりますね。

池田 煩惱の質を変える。いいかえれば昇華しつつ利他に向ける。これがコントロールという現代語の内容だろう。とすると、煩惱はコントロールつまり制御ということがポイントになる。そして、明行足の明らかとは永遠の生命を見通す知恵だが、行足は実践です。

——民衆の中に飛び込んでいって戦う行ないですね。その修行のなかで英知もみがかれる——。

池田 実践のまっただなかで光を増した英知は、生命についてはもちろんのこと、人生、社会、文化から政治や経済、学問、教育に至るまですべてを見通すことができる。物価がなぜこうも高くなるのだろうかとか、小学校での教育の問題点とか、また土地の価額とか、とにかくすべてにわたっての鋭い洞察眼をもっている。だから世間解せけんげというのです。

——昔流にいいますと、下世話げせわのこともぜんぶ知っているというのが、どうやら名君だったらしいですが、これと比較するのもどうかと思いますけれども、しかし、私は宇宙や生命の偉大な哲理を知るとともに、世間のことにのみなみなみならぬ関心をもち、しかもだれよりも明快な答えを用意しているのですね。また、それを実践に移す力もある。

池田 だから、天人師てんにんしという名前もあるのです。

——天人師のもとの意味からしますと、天界とか人界の衆生を指導するということですが、天とは指導者で、人とは庶民といったふうになります。むしろ、指導者と庶民がわかれているという意味ではありません。誰でも、その境

涯とか境地とかによつて、指導者としての役割りを果たすときもあれば、また庶民とか大衆の一人として働くこともあります。だから天人師というのは、すべての人をリードしていくということでしょうか。

池田 この場合、指導するとか、師とあおがれるなどと表現していても、何も特別な状態をさしているのではないと思う。その人の人格や個性や能力が、しぜんのうちに、人びとの心をとらえるという意味に解することはできないだろうか。

——**応供**^{おうぐ}にも通じてきます。応供は応受供養と書きますが、人界と天界の衆生から供養をうける資格があるということですね。

池田 この供養をうけるとの表現も、その人の行為が、人びとの賛同を集め、しぜんのうちに庶民の心にささえられるという意味でしょう。

ゆえに、仏とは世尊なりとある。つまり、世の中で最も尊い人として慕われ、愛され、そして尊敬される。また、世雄^{せゆう}ともいわれる。それは、人びとを根底から慈しみ、救いきるだけの力をもっているからです。

——たしかに、これだけの生命内容をそなえていれば、ただ、その人がごく普通のふるまいをするだけで、人望を集め、社会を変え、時代をさえ動かしていくでしょう。

池田 仏の生命を體現した人も、一見すれば、ごく平凡な常識人にみえるでしょう。誠実で、責任感が旺盛で、また、信念の人であり、友好的な態度を示し、思考が柔軟で、慈悲と英知と創造性に富んでいる。また、『観心本尊抄』に「堯舜等ぎょうしゅん（注11）の聖人の如きは、万民に於て偏頗へんぱなし人界の仏界の一分なり」と記されているように、すべての人びとを平等に包容していくことも、必須条件の一つです。

——ちよつと考えますと、人界の境涯に似ていますね。

池田 もっとも人間らしい人間の姿だからです。だが、平凡な常識人として本当に生きぬこうとすれば、やさしいようで、きわめてむずかしい人生道です。たとえば、平等という一点だけでも、よほどの知恵と慈愛と主体性がなければ、けっしてつらぬけることではないでしょう。

——普通の人なら、すぐに、えこひいきします。顔の形が気にいらないとか、趣味があわないとか、なんとなく好きになれないとかいった、ごく、つまらないことで——。

池田 それは、心が硬直しきっている証拠です。肉体でたとえると、動脈硬化でしょうが、むろん年齢との関係はない。生命の動脈硬化をおこしてしまつて、柔軟性にまったく欠けているようだね。

——仏界の境涯にある人の生命を、表面からみますと、しごく平凡でありながら、しかもその行動が、そのまま地涌の菩薩の働きになっているのですね。

池田 地涌の菩薩としての利他の行ないを、仏の生命がささえているのです。宇宙と生命の源流に達し、世の中の推移、メカニズムをも含めて、あらゆる生命活動の様相と、その根源の法理を悟った境涯だからです。すべてを悟り、宇宙をさえ動かす生命のエネルギーを体得しているのだから、生命流はかぎりなく充実し、また生命のもつ自由も宇宙全体にまでおよぶことも可能だと思う。

——仏界を顕現した生命ですね。むろん行動面からすると菩薩の働きです

が、その人の生命感は、人天の境涯や二乗や迹化の菩薩とはくらべものにならないほど深い生命全体の、いわば歓びみたいなもの……。

池田 歓喜のなかの大歓喜です。生命の底の底から、地ひびきをたててわきあがってくる、どうしようもない歓喜——とでも表現しておこうか。この世の中に生きていること、それ自体が歓びなのです。自然も大地も、草も木も、人の顔もその動きも、すべてが歓びの色にそめられている。そして、一つの呼吸、一挙手一投足が、歓びと感謝と生の尊厳感の源泉をなしている。しょうろうびょうし生老病死が、そのまま歓びに化すといった境地ではないだろうか。

この知恵の光りは、宇宙をあまねく照らし、「二元品の無明」つまり、生命の魔性の当体を打ち破っていく。仏の生命空間は、宇宙そのものと融合し、一体なのです。「宇宙即我」の体得だと思う。また、その生命流は、一瞬のうちに、無限の過去と未来へとおよんでいく。とまったく同時に、現在の瞬間の生に、永遠に流れゆく宇宙生命の潮流が、巨大な噴水と化してわきあがってくる。こうして、仏の生命は、現実、瞬間を永遠に生きるのです。

——たとえば、瞬間の生であっても、そのなかに宇宙大の生命力をひめてい
るということでしょうか。

池田 「宇宙即我」の観点からいくと、大宇宙根源の力が、そのまま、仏の
生命に凝縮しているといえよう。また、時間論からいくと、永遠の宇宙流転を
もはらんでいる。したがって、仏の境涯にある生命は、瞬間に永遠を感じ、ま
た、永遠も瞬間の生のように実感するのでしよう。これを、日常的に表現する
と、歓喜にみちた時間は、考えられないほど速くすぎていく。物理的時間の経
過をほとんど意識することもないのではなからうか。それでいて、一瞬の生が、
もう永遠に近いほど生きる歓びを享受したという充実感と満足感にひたりきれ
るのではないかと思う。

——いままでのところで、仏の生命の様相が、ほぼわかりかけてきたよう
な気がします。そして、時間的にも、空間的にも、宇宙生命と一体化し、融け
合った仏の生命という実体が、私自身の生命にも実在している、という事実も
知りました。

だが、それを現実の私たちの生命活動の源泉にしなければ、ただ実在するといふだけでは、私たちは人間らしい人生を送ることはとうてい望みえません。迹化の菩薩などは、利他の行動を通しての自我の錬磨によって、仏の生命のもつ偉大な力をひきだそうとしましたが、その修行はきわめて困難でもあり、また、現代の世相にも適応しない面もあります。

このことは、先ほど話し合いましたが、仏の生命を外からではなく、ちよくせつ直截的に、生の内奥からわきいだす方途とは、いったいどのようなものでしょうか。つまり、仏界顕現の鍵ですが――。

池田 鍵とっていいかどうかはわからないが、日蓮大聖人の仏法では、仏の生命の湧現を、「信ずる」という一点に定めている。何を信ずるかといえは、宇宙生命そのものとしての妙法だというほかはない。

『御義口伝』には「地獄餓鬼の己己おののの当体其の外三千の諸法其のままたがつしょうこうおつ儘合掌向仏なり」とあります。つまり、私たち人間生命をも含めて、宇宙のすべての生命的存在は、それらが、いかなる境涯を現じていようと、そのまま仏に向かつてい

るとの意義と解せられます。私たちの生命の内奥には、理性も愛も欲望も衝動もあつた。権力欲や欲望の魔性などもうずまいていました。だが、そのような生命の内容には、もう一つ、もつとも根源的なものとして、仏の生命に向かい、それを希求するという衝動を、加えねばならないのではなからうか。いいかえれば、宇宙生命との融合を求め、生の根源に憩いいたいとの衝動です。

仏界を求めるといふ衝動は、生存欲のもう一段深い層に実在すると思われます。ゆえに、たとえ、すべての人の生の深層にうずいてはいても、容易に自覚することもなく、また、ふだんは生命の魔性におおわれて、その姿をあらわにすることも少ないのかもしれない。だが、私は、このような衝動を、あらゆる他の欲望——そのなかには、精神的欲望さえも含めるのだけれども——それらと区別する意味で、ずばり、「宗教的欲望」と呼んでみたいのです。

——その宗教的欲望ですが、人間、万物におけるもつとも根底をなす欲望という意味で、本源的欲望とはいえないでしょうか。つまりこの欲望がなければ、生存欲さえもありえない。この欲望をはらむがゆえに、現在の私がある。

まあ、こういった感じですが――。

池田 宗教的欲望は、即、本源的なのです。だから、本源的欲望という言葉を使うならば、それでもいいが、とにかくこの欲望が、仏界への信をさしていることだけは忘れてはなるまい。そして、人間のみならず万物の生の深層に仏界を希求する衝動をみだし、その力を十二分に発現する道が、日蓮大聖人の仏法における実践法だといえないだろうか。

――日蓮大聖人の仏法は、生命本源の欲求というか、生命のうずきみみたいなもの、それにのっとっているのですね。

池田 宗教のなかには、さまざまな欲求や良心や愛情などを発現させる方法を示しているものもある。いかなる生命内容をあらわすかで、宗教人としての境涯も規制されてくるであろうが、とにかく日蓮大聖人の仏法は、宗教的、そして本源的な欲望の追求と発現、つまり仏界湧現のうえに成立していることだけは、強調しておきたいと思う。

さて、ここらで私たち自身のなかに仏界という生命が実在するということ、

そして、人間らしい生き方とは、仏界を体現した菩薩の道ではあるまいか、とする私たちの結論を示して、十界論を終えることにしよう。

自己変革の道

体験三題

——十界論をひととおり終えましたので、つぎに「十界互具^{ごぐ}」という仏法の原理をとりあげたいと思いますが、ここらで、少しばかり、いままでとは趣向をかえてみます。

といいますのは、十界論については、十界それぞれの境涯とか、実感とか、変化相などを、どちらかというところ、生命を客観視する立場から追求してきました。それに対して「十界互具」という原理を考えるには、むしろ、私たち自身の生命活動を、実践的にとらえたほうがわかりやすいのではないかと思うからです。つまり、いくつかの体験をとりあげて、そこに「十界互具」という原理がどういうふうにみいだせるか、といったようなことからはじめたいのです。

池田　その前に、十界と十界互具の關係について、少しのべておきたいことがある。じつをいうと、いままでのべてきた十界論も「十界互具」の原理というか、また、方程式という言葉を使ったほうが適當なこともあるが、そのうえにくりひろげられたものです。このことを、一つの例をあげて説明してみよう。テレビでも、映画のフィルムでもかまわないのだが、画像をみていると、瞬間的に止まることがある。まあ、種々の効果をねらって止めているのだが、すもうの解説のときなどに、投げの瞬間とか、土俵ぎわのせり合いなどの、いわば決定的瞬間です。そこが固定されて、一枚の静止した写真としてうつされることがある。また、百メートル競走の判定などにも、写真が使われている。このような操作をすると、私たちの目にはとまらないでも、写真の判定で、一着は誰だとか、すもうはどちらが勝ったか、といったようなことが明らかになるものです。

——すもうですと、そこに解説者がのこの顔をだして、きまり手は上手投げだとか、体たいが死んでいるとか、いやまだ生きているとか——むろん、すも

うのうえのことですが——素人でもわかるように説明してくれます。そのあとで、もう一度、実際すもうをおもいかえすか、または、ビデオテープをみますと、納得のいくものですね。

こういった画面の分析は、ボクシングにもありますし、また競馬の着順をきめる「きめ手」にもなります。これには、ばく大な金がかかっていますから、一枚の写真が、人の運命を左右することにもなります（笑い）。それから、コマ—シャルにもとり入れられています。コマ—シャルの一コマずつを少しずつ固定して、三つか四つの場面をうつす手法もあります。そうしますと、流れとしてはうつりませんし、ぎこちない感じもしますが、各コマのありさまがはつきりと認識できることだけはたしかでしょう。ところで、この分解写真——ストップ写真ともいうそうですが——それと、十界論はどうかかわり合うのでしょうか。

池田　つまり、十界論というのは、私たち自身の生命の動きの分解写真みたいなものだと考えてはどうかということです。人間をはじめとするすべての生

命的存在は、一瞬も休むことなく、それぞれの生を営んでいる。私たちがいままでに使ってきた言葉で表現すると、生命の流れは、たとえば、その速度が弱まってしまふことはあつたとしても、それでも何らかの働きをなしつつ変転しているわけです。この生命の流れを、いわば人工的に止めてみると、分解写真みたいになるでしょう。だからといって、現実の生命の流れが、その瞬間に、ちやうど、凍り^{こお}ついたように停止してしまふということではないのだが――。

――魔法の力で、すべての生命活動を一時期、凍結^{とうけつ}させるといった架空^{かくう}の物語りなどがあります。まあ、現実にはありえないことです。でも、人間の思考でえがきだすことはできますね。

池田　もし仮りに――ずいぶん、SFじみてくるが――このいまの瞬間、宇宙の時の流れが止まったとしてみよう。外観からすれば、道を歩いている人もいるし、ちやうど、午後三時のおやつ時で、ぽっかりあいた大きな口の前までヤキイモを運んできた女性もいる（笑い）。原稿用紙に一つの文字を半分書いたところでストップがかかった人もいよう。体操をやっているスポーツマンだと、

空中にとびあがったまま停止してしまっているかもしれない。外からみた客観的な姿は、それこそ千差万別で、一人として同じ様相を示すものはいないだろうが、それらの人びとの生命の実感から分類してみると、十界という種類をでていなかった——まあ、それが十界論だったね。

たとえば、同じく道を歩いている人でも、苦悩にうちひしがれた地獄の境涯の人もいれば、足どりも軽く天界の「我」を満喫まんきつしている人もいるだろう。また歩道のかたすみに咲く雑草にさえも心をよせる、四聖の境地にひたっている人もみいだせると思われる。ヤキイモが眼前にあるというのは餓鬼界だろうか。文章をねり、思索を深めているのは、まず二乗界だし、空高くとびあがった体操選手は、文字どおり、天界にいるかもしれない。いずれにしても、十界のうちのいずれかの境涯をあらわしているはずです。

——生命の分解写真の、十界論による判定ですね。

池田 さて、つぎの瞬間、宇宙の時の歩みにかけられた「魔法」がとけたとしよう。客観的にみると、歩道で半分ほどおりかけていた右足が大地についた

とか、食物がようやく口に入ったとか、一つの文字を書きおえたとか、さまざま現象がくりひろげられよう。だが、これらの現象をかもしだす各人の生命感を調べてみると、地獄界の人もいれば、餓鬼界の人もいる。また、二乗界に住する生命もある。こうして、さらにつぎの瞬間にも、地獄界とか、人界とか、天界とか、そういった境涯を判別できるはずです。

——一人の生命の「我」の実感をとってきて、その変動を追っていきますと、たとえば、地獄界から天界に変わり、また地獄界に帰ってくるとか、また、人界から天界、そして菩薩界とか、それこそ無限のバリエーション（変化）を示しているでしょうね。

池田　だが、それぞれの生命の「我」が瞬間ごとに変転し、かぎらない変化相をつくりだしているにしても、その変化のなかに、何らかの法則性がみいだせないだろうか。

たとえば、地獄界のつぎには餓鬼界がくるのだろうか、畜生界だろうか。また、人界とか天界だろうか、それとも、どんな境涯でもあらわれうるのだろうか

かといった疑問が生ずる。さらに、地獄界ではなく、天界の場合はどうだろうか、ということも問題になりうる。まあ、こういったことのなかに、一つの法則みたいなもの、いい直せば方程式のようなものを発見したとする。そうすれば、その方程式にのっとって、生命の流動がおりなされる。つまり、生命に関する一つの原理ですね。その原理を仏法では「十界互具」と説く。では「十界互具」とはいかなる原理なのかということを考えてみたい。

——そこで、どういう体験をとりあげれば、わかりやすく、しかも普遍的かを考えたのです。あまり、特殊な例でもいけませんし、そうかといって、いつまでたってもぜんぜん変化がみられないのもおもしろくありません。また、人権侵害ではありませんが、個人のあかしたくない秘密をまもることはとうぜんの義務でもあります。

いろいろ模索しているうちに、ふとおもいだしたことがあります。それは、劇的な体験ではありませんが、いまだに、私の心に美しい光りをなげかけている一人の医師の話です。その話を、もう一度たしかめようと、それが掲載され

ていたはずの新聞をひっくり返していたとき、ちょうど、そういった体験が本にまとめられていることを知りました。ここにある二冊の本ですが、『生きる』と『新・生きる』という題がついています。

この話は『新・生きる』のなかに収められていました。私の記憶に残っていたのは、約十年あまりも前にさかのぼりますが、医師会が一斉休診のストに入ったとき、一人の辺地の医師が、その指令——つまり、ストの指令ですね——を一蹴^{いっしゅう}して、黙々と村人の生命をまもりつづけたという事実が、鮮烈に私をとらえていたからだと思われます。

池田 人間の生命を慈^{いづく}しむ医師としての使命感が、すべての事柄に優先したのでしょう。医師たちのストにもたしかにいい分はある。だが、医師が、今日^{けふ}はストだから病人には関係ありませんとか、そういったことがおきた日には、日本の医療自体が崩壊^{ほうかい}してしまいかねない。いや、もつといえ、人間失格の医師というべきではないだろうか。

——私もまったく同感です。いま、便宜^{べんぎじょう}上、その医師をA氏としておきま

すと、A医師の行なったことは、医者としてとうぜんの義務というか、責任を果たしたまでのことのように思えるのですが、それが、その地方の新聞に美談として書きたてられたそうです。するとどういふわけか、A医師は恥かしさで心がうずいたといひます。

池田　ほう。実直な方ですね。ともすれば、人間の心というのは、他人から誉められると、ましてマスコミなどに書きたてられると、慢心をおこして、つい、得意になってしまふものだが――。

――A医師は自己のありのままの姿をごまかすことができなかったのだと思います。というのは、お父さんのあとをついで医者にはなったものの、辺地の開業医には過酷な日々が連続します。**“でも、教師”**という言葉がありますが、**“でも、医師”**、つまり、金をもうけるためとか、いちおう、豊かな社会的な地位も割合に高いとされている医者になつておこるかというので医学部に入つた人びとですね。そんな医者ではとうていつとまりません。

夜中にたたきおこされたり、積雪三メートルの道を泳ぐようにして患者さん

の家にとりついたりで、よほどの信念というか、使命感がなければ務まらない職業でしょう。そういつたとき、どうしても腰が重くなる。不満が頭をもたげてくることもある。遠い患者さんにはつい足が向かなくなってしまう。だから、新聞に紹介されると、人知れず苦しんだというのです。

池田　しかし、自己の生命とまっ正面から対決したことから生じる、こういった性質の苦しみは、かならず、人間の心の深さをまし、同時に、医師としての成長の糧かてにもなるものだと思う。

——医は仁術という古くからの格言がありますが、そして、この格言はいかに時代が変わっても不動の真理でもあります。その仁術を可能にする哲学をA医師はさがし求めました。そして、苦心の末にさぐりあてた哲学を体得するにつれて、先ほどの苦しみ——つまり、心の葛藤かつとう——をのりこえました。体験談の最後のほうには「利害を忘れてそこに没頭できるようになった自分がうれしい」と語ったA医師の言葉が記されています。

池田　実感がでているね。人間的使命を遂行できるといふ、心の奥からの歓

びがあふれた言葉です。みごとに人間革命の実証です。

——『新・生きる』の話がでましたので、私も記憶にとどめている一つの体験をとりあげてみます。ヘルシンキ・オリンピックへの出場をかけた体操の最終予選でのことでした。一人の青年が体操選手としては致命傷ともいうべきアキレス腱を切断します。それも、偶然の出来事で自分の不注意からではありません。いままで体操にすべての目標と生きがいをおいていただけに、絶望の淵に沈みこんでしまいます。酒とケンカに明け暮れ、「インテリヤクザ」と呼ばれ、やがて睡眠薬中毒が昂じて精神病院に入るといった経過をたどります。少しよくなると退院しますが、すぐまた病院入りです。

池田 そのくりかえしがつづくのだろう。青年の心情がわからぬわけではない。しかし、何としても自暴自棄じほうじきになろうとする自己との戦いに勝ってほしいものだ。それでこそ、青年のたくましさがつちかわれる。

——感動的な場面があります。青年——B青年としておきますが——が、ふとした機会に知った日蓮大聖人の仏法を支えとして、睡眠薬中毒の禁断症状

と戦う場面です。薬をやめて、一日目の深夜には、経験したものでなければわからないような強烈な苦しみがおそってきます。どうきが激しくなり、呼吸が苦しくなる。だが、薬を買う金もない。まあ、こういったときには、お金がないほうが、かえって本人のためにはいいでしょう。それが、六日間もつづいて、極度に身体が消耗していきます。心の奥のほうから「薬をのめば楽になるぞ」という悪魔のささやきが聞こえてきます。だが、ようやく、その誘いをもしりぞけて、七日目の朝、ふっと目がさめます。

原文を読みますと「“おや” と思った。まばゆいばかりの朝日が窓からさしこんできて顔を照らしていた。“おれは寝たんだ”——力いっぱい窓をあける。さわやかな風がほおをうつ。深く息を吸いこむ。空気がおいしい。初夏の日ざしを浴びて、木々の若芽が、畑のキャベツが、どろんこ道を駆ける小犬が、生き生きとして目に映る。禁断症状にとうとう打ち勝ったのだ」とあります。生きることの歓びが、青年の全身をつつみこんでいたのですね。そして、いまでは、後輩を育て、一流の選手として社会におくりだすことに、真の自己の使命

を自覚しているとあります。

池田 栄光の舞台におどり出るのも人生ならば、それを支える舞台裏にも男としての真実の生きがいがある。いや、むしろ、華やかな舞台を支え、青少年の夢を育てる、いわば陰の仕事にこそ、一生をかけて悔いない男の道がみいだせよう。

——医者の話、体操の教師の話とつづいたところで、もう一つだけ、どうしてもここで、とりあげておきたい人間革命の記録があります。こんどは『生きる』のなかに登場する、母と娘の愛情物語りともいえるのでしうか。この本では「嫁ぐその日、空は青かった」という題名がつけられています。先ほどの青年のようなドラマチックな話ではありません。また、医師のように比較的恵まれた境涯での自己変革をしたものでもありません。小児マヒという重荷をせおっての、長い長い苦闘の歴史です。しかし、その歴史は悲しみにみちた哀歌ではなく、むしろ、あふれんばかりの母の愛と、それに応える娘とのけなげな努力が、みごとに花咲いた記録といふべきでしょう。

ここでは、C子さんとしておきますが、彼女が、数え年三歳のときと記されていますから、生後二年ぐらいたったころになりました。時代は終戦直前です。だから、彼女が大学病院で小児マヒの宣告を受けても、治療らしいものを受けるとはほとんど不可能な状態だったのだと思われます。発病してから四年の間、ハリとかマッサージとか、温泉治療などをほどこしたそうですが、その効果もあまりかんばしいものとはいえなかったようです。それでも小学校へあがるころには、やっと歩行が可能にはなっていました。だがその歩行は、左手で動かない左足を一步ずつもちあげては進む状態だったようです。

池田　ご両親は、どんなにか心を痛められたことだろうね。たとえ自分の寿命を縮めてでも、娘の苦しみを代われるものなら代わってやりたいと思うのが親心だもの――。

――娘さんの後ろ姿を見ていると、胸の中を針でメッタづきにされるおもいだったと、お母さんの述懐にもあります。そして、母親がもっとも心配したことは、娘の性格に「ひがみ」が芽ばえはしないかということでした。普通な

らば、そういう「ひがみ」根性は、女性として成人していくにつれて増大する性質をもっています。ところが、母親の懸念^{けんねん}をも吹きとばすかのように、彼女は明るく快活な娘に育っていきました。

こんなことがあったそうです。高校も卒業して、保育園の事務員の仕事を、彼女は自分でみつけてきました。ところが、それから二か月もたったころ、事務はできても使い走りがむずかしいという理由で解雇^{かいこ}されました。十分に理をつくしてのことだったのですが、それでもショックは大きかったでしょう。でも、彼女はそれをものりこえ、つぎの仕事をみつけてきて、五年間あまりつとめています。しかも、結婚でやめるとき、上司の一人は「あの人の印象がよかったから、社長は身障者を大事にしようといいましてね」と語っています。彼女のつとめていたその会社では、多くの身体障害者の人が働くようになったそうです。

池田 みごとな人間変革の記録ばかりです。いずれの体験にも、社会の荒波をのりこえつつ激動の人生を生きて、そこに不動の自己を確立しようとする強

烈な願いがにじみでている。

三者三様でありながら、その人なりの不変の幸福をつかもうとしていることだけはたしかです。しかも、その幸せは、他者から与えられたもの、つまり、たやすく崩れ去るといった性質のものではなく、人間革命の道筋にともなって期せずして訪れたものであることに、重大な意味があるように思う。信念とか自信とか、また使命感などに支えられた自我の形成をまっつて、その人のゆく先に幸福の“女神”がほほえみはじめているような気もする。そこで、この方々の体験を使わしていただいて、さっそく、幸福への方程式をさぐることにしよう。

十界互具の方程式

——それでは、私が最初に紹介しましたA医師に再登場を願って、少々考察を加えてみたいと思います。まず、A医師が開業医になられてまもなくのころの心理状況を取りあげてみます。たとえば、一日の診療をやっとおえて、ほっと一息ついたとき、急患の知らせがあつた。それも、一時間あまりも雪のなかを歩いていかねばならない。こういう場面を設定しますと、はたしてA医師の生命感はどういう風に移りかわるのでしょうか。

池田 少し詳細に分析してみよう。A医師が、日課をおえて、煙草でも一ぷくすつているとしよう。まあ、煙草をたしなまれるかどうかはわからないが、煙草でもすいたいような気分するときですね。A氏の生命は、おそらく人間らし

い満ち足りた境涯をあらわしていたのではないだろうか――。

――人界ですね。

池田 人界の場合もあるでしょう。だが、その医師の胸奥に、ほんの少し前に、高熱を発してかけこんできた赤ん坊と、不安そうな母親の顔がうかんでいたとする。自分のほどこした処置で、赤ちゃんはすやすやと眠ってくれたろうか、母親の心も安らいだだろうか、といったようなことが走馬灯そうまどうのようにかけめぐっていく。医師であることのありがたさが、しみじみと色心しきしんをうるおしていく。

――天界の喜びともいえませうね。

池田 ところが、人の心の動きとは微妙なもので、たとえば、ある瞬間に人間界や天界を顕現していたとしても、つぎの瞬間には、急病人の往診依頼をきいて、嫌だな、と思うこともある。

――腹だたしい気分におそわれるかもしれません。よりによって、どうしてこんなときに病氣になったりするのだろうか、などと患者さんをうらんでみ

たり、一瞬前とは正反対に、医者という職業が、つくづくきらいになったりして――。

池田 自分でも無慈悲だとわかっていながら、どこにもはけ口のない怒りの感情がつきあげてきて、つい、奥さんにあたりちらすとか、こうなるとたちまちにして修羅界ですね。

こんどは、嫌悪の心が内向して、ひとり悩むようだと、いたずらにエネルギーを使い果たして地獄界の苦しみを味わうでしょう。また、ひとねむりしたいという欲求、これは睡眠欲だし、一杯のみたいという欲望などがせきとめられると、かえって飢えの感じをひきおこして餓鬼界をあらわすことにもなる。

――こんな医者はいないでしょうし、いてくれば困るのですが、急患ときいても平然としている。いまはただ、睡眠欲とか食欲とかに忠実でありたい。弱い者がいまごろ病気になるので、明日になればいざしらず、この瞬間は本能の充足のみに専念しよう、というのは畜生界です。

池田 その人の生命状態や個性や性格などによって、同じようなことがおき

ても、現出する境涯はさまざまだと思う。まあ、A氏の場合は、人情味豊かな方だけに、かえって、自分を責められて、地獄の苦悶^{くもん}を味わわれたのではなからうか。

——たとえば、一瞬前までは一息ついてゆっくり休めるという喜びにひたされていて、天界であつたのが、つぎの瞬間には一転して地獄界の苦悩にあえぐとします。すると、先ほど生命に満ちていた喜びは、まるで、魔法にでもかけられたように消えうせています。ところが、そのつぎの瞬間に、急患の連絡が誤りだつたとか、病人がどうやらもちなおしたので往診は明朝にお願いしますとかいった連絡があつたとします……。

——その場合は、たちまちにして苦悩からの解放ですね。こんなに悩むことはなかったというわけで——。

池田 苦悶の相はすつと消えて、再び天界の安心感に満ちたほほえみがもどってくるでしょう。一瞬前とは別人のような姿をも示すのではなからうか。

——そこで問題なのは、天界のゆくえですが、どこへ行ったかをさがすと

なると、まるで推理小説めいてくるのですが、とにかく、ある時期——といってもこの場合は一瞬間にすぎませんが——どこかへ姿をかくして、再びもどってきたと考えてみます。では、どこに隠れていたのかと問われると非常に困るのです。

池田　ちようど、“かくれんぼ”している子供たちが、大きな木や石の陰に身をひそめるように、天界も、消えている間、隣まで散歩していたとか、いまごろは交通が便利だから、外国にでかけていて留守でした、などといったものではない（笑い）。

——神秘的に考えますと、一瞬間だけ、他の人にのりうつっていた、ということになるのですが、もちろん、そんなものではない。第一、のりうつるなんて、それではあまりいい気持ちはしないですね。天界だとまだいいですが、それが畜生界あたりだと、のりうつられる役目だけはやっぱりごめんこうむりたい（笑い）。

池田　どこかへ姿をかくす、といった表現が誤解をまねくのかもしれないよ

うです。端的にいうと、どこへも行きはしない。天界はずっと、その人の生命に常住しているのですね。地獄界の苦しみに生命全体がのたうつときも、飢餓きが感かんにおびえるときも、憎悪と嫉妬に狂うときも、天界は常に、その人の生命にあり、けっして滅失したのでも、また、離れていったのでもない。ただ、私たちの感覚でとらえられないだけのことではないだろうか。

——人間の通常感覚といいますが、五感とか六感です。私たちの感覚器官で認識しうるものです。このなかには、むろん、科学の方法も入ると思われませんが、そういった方法でとらえられないような存在のあり方といいますと、少なくとも「有」の世界ではありません。

——だからといって、消失してしまったわけではないのだから「無」でもない。とすると、これはどうしても、仏法概念の「空」——。

池田　そうです。「空」の概念を使わないと、この問題はとけない。「空」ということがわかると、天界の動きも、手にとるように追っていくことができる。

——明智小五郎の名推理みたいですね。姿を消しても、ちゃんとつきとめ

る。それも、灯台もとくらしで、どこかへ行つたようで、じつはどこにも行つていない。

池田　ただ、存在のあり方というか、状態が変わつただけなのです。つまり天界という境涯が、「有」というあり方から、「空」というあり方に変つたのです。そうすると、もう、ごくわかりやすくいえば、目でも耳でも鼻でも口でも、また、さわってみても、とらえることができなくなつてしまふでしょう。

だから、氣の早い人は、「無」に帰したのだろうと早合点してしまふ。しかし、仏法の「空」をもつてくれば、何のことはない。生まれてこのかた、いや、もつと前から、天界は、ただのひとときも、その人の生命から離れたことはなかつたのです。

——明智探偵の名推理のカギは「空」の概念を使うことにあつたのですね。新米の迷探偵だと「有」と「無」だけで追いかけているから、姿を見失つてしまふ。二十面相のように、変相の名人みたいだと、つい、ひっかかつてしまふ。

池田　名探偵ではなくて迷探偵のほうだが、彼が、天界の姿を見失うのは

「有」から「空」に移行するときですね。移行といっても、一秒とか二秒ぐら
いかけてゆっくりと姿をくられますというのではない。よく瞬間的といった言葉
を使うが、じつは、その瞬間をさえ必要としないのだ。いわば、まったく同時
なのです。

だから、時間を必要としないで姿を消す。迷探偵があきればててしまうのも
無理のないところだ。さて、この「有」から「空」への同時的移行を、仏法で
は「冥伏^{みょうふく}する」と表現している。そして「空」の状態で存在することを「冥
伏」という。名探偵ならば、この「冥伏」という状態で存在する天界をもみぬ
くことができよう。こんどは、逆のプロセスを考えてみよう。

——といいますと、「空」から「有」への方向ですね。

池田 「空」としての存在から「有」の世界への移行というか、変化ですね。
これを、仏法用語では「顕在化」という。そして「有」という状態での存在の
あり方を、先ほどの「冥伏」に対して「顕在」といいあらわしている。たしか
「空」の概念とか「冥伏」「顕在」といった言葉は、本書の第一巻にある「生命

をとらえる眼」の章で、一度話題としてとりあげたが、ここでは、それらを具體的に使っていく立場で、さらに論をすすめてみたいと思う。

——さっそく「冥伏」と「顕在」という言葉を使いますが、具体的にA医師の場合、最初、天界が顕在であり、つぎの瞬間に冥伏し、そのつぎの瞬間には再び顕在化したと考えられます。そして、天界が冥伏しているとき、顕在化していた境涯は、多分地獄界ではなかったか。もしくは餓鬼界、畜生界、修羅界あたりがあらわれていたと推測することもできます。まあ、それはいずれでもかまわないのですが、こんどは逆に、天界が顕在しているとき、地獄界や他の境涯は冥伏していると考えていいのでしうか。

池田 論理的にいつても、そう結論せざるをえないのではなからうか。だが、もう一步、推理をすすめると、天界があらわれているとき、生命内奥に冥伏している境涯は、いま、A医師の体験から割りだしたような三悪道とか、修羅界だけではないのです。人界も、二乗界も、仏界も、その人の生命そのものに冥伏していると考えられます。つまり、天界以外の九界は、すべて生命に内在し

ている。いや、天界に、天という境涯をもそなえている。それは、天界が連続してあらわれる場合も可能だからです。

——A医師の心理状態というか、生命の動きにこだわるようですが、私だと、やはり夜中などにたたきおこされると、どうしても、修羅界とか、また睡眠不足だというので餓鬼界あたりがつきあげてきます。

それで、本能的欲望に忠実になって、つい時間の経過を忘れてしまう。畜生の境涯ですが、あまりよい夢もみなくて、ある場合には、夢のなかで、往診にかけているかもしれせん。だが、現実はきびしいですから、窓の外に鮮かな早朝の太陽が姿をみせはじめて、しまった、と後悔すれば、地獄の苦しみます。そこまでいかなくても、瞬間的には四悪趣のうち、いずれかが顕現する。そこで、しまった、と思って痛烈に反省してからやっと天界にまでたどりつけるといった調子でしょう。

池田 三悪道をへて、それから反省する自我が二乗の境地で、そのつぎに天界の顕在化というケースですね。だが私は思うのだが、真夜中に「急患です」

という声をきくと「ああ、かわいそうだ。一刻も早く行ってあげたい」という
気持ちだが、何の作為もなくすつとうかびあがってくる。それが、どんなに疲れ
たときでも、いかなる用事がまちかまえていても、また、食事中であつても、
いつも、同じような慈しみの心情にひたされてくる。こうなれば、菩薩界の生
命の湧現、顕在化ですね。また、ある場合は、二乗の「我」にと変転するケ―
スもあるでしょう。

——「Hさんがぜんそくの発作です」といったような言葉が、A医師の耳
をうつ。そうすると――。

池田　どんな薬が必要だろうかとか、こんどの発作だと重いかもしれないか
ら、いままでの処置だけでは効果がないこともあるなどと、医学の知識やすべ
ての体験を総動員して考えてみる。

「あつ、この処置が最善だろう」とインスピレーション（靈感）みたいなもの
が頭をかすめる。声聞界とか、縁覚界のあらわれですね。

——これで、十界のぜんぶの境涯ができました。同じ「急患です」という――

言でも、その受け方によって、どんな境涯にでもなりうる可能性があるので
ね。

池田 ということは、天界があらわれているその一瞬の生命にも、たしかに
十界のすべてが「冥伏」していた事実を示している。だから、純理論的にいう
と、つぎの瞬間、十界の境涯のうちで、どのような境地でもあらわすことがで
きるということだ。この事実を、仏法では「天界所具しよぐの十界」というようにい
いあらわしている。

それだけではない。天界に十界がそなわっていると同時に、他の境涯、
つまり、地獄界とか人界にも、十界のすべてが「冥伏」している。先ほどから
の例をかりると、天界から地獄界に転落しても、つぎの瞬間には、二乗界にも、
菩薩界にもなりうるということです。

——つまり、地獄界の苦悩にさいなまれている生命にも、六道ばかりでな
く、二乗界や菩薩の境涯もちやんとそなわっているのですね。

池田 それから地獄界にも、いまあげた各種の境涯のほかに、仏界さえも具

している。まとめていうと、地獄界に具している十界というように考えられる。つまり、地獄界所具の十界です。こんどは逆に、たとえ仏界が顕現していても、つぎの瞬間には三悪道や修羅界に墮すこともある。また、人と天の世界や二乗や菩薩界に移行することもある。仏法では、十界という境涯を大きく二つに分けて、仏の生命と他の境涯を区別することがある。つまり、仏界と九界といった表現法がもちいられる。この表現を使うと、仏界にも、九界を具していることになる。

——妙楽大師は「阿鼻あびの依正えしやうは全く極聖ごくせいの自身に処し、毘盧びるの身土しんどは凡下ほんげの一念を逾こえず」とのべています。ここでは、九界の代表格として、阿鼻地獄があげられています。この文を、仏界と九界との関係から論じますと、仏界にも九界を具し、九界にも仏界を具していることを明確に示しています。

池田 この文にある「依正」とは、依報と正報のことです。それから、「身土」はと、生命主体とその環境を意味しているね。さて、全体の意味は、つぎのようになります。阿鼻叫喚の炎にむせぶ苦しみの生命も、極聖とされている

仏界そのものにそなわっており、また、毘盧^{びる}、つまり仏の生命もじつは凡夫の一念心をこえるものではない、と。これは、仏界にそなわる九界と、九界に内在する仏の生命を明かしています。ゆえに、仏界と九界の関係性を仏法的に表現すると、仏界即九界であり、九界即仏界となり、この二つの原理を組み合わせる、「十界互具」の原理をあらわすことになるわけです。

——『観心本尊抄』には、『法華經』をひかれての「十界互具」論の解説があります。それは「法華經第一方便品に云く『衆生をして仏知見を開かしめんと欲す』等云云、是は九界所具の仏界なり、寿量品に云く『是くの如く我成仏してより已来^{このかたはなほまだ}甚大に久遠なり寿命・無量阿僧祇劫^{あそぎこう}・常住にして滅せず諸の善男子・我本菩薩^{もと}の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ^{なお}尽きず復上^{また}の數に倍せり』等云云、此の經文は仏界所具の九界なり」とありまして、このあとにずっと、地獄界から仏界にいたる各界所具の十界を説明しています。

たとえば、餓鬼界所具の十界とか、畜生界所具の十界とか、また、菩薩界所具の十界といった表現がもちいられています。さて、『法華經』の方便品とか、

寿量品からひかれた経文の解釈となりますと、ずいぶんむずかしくもなりますし、仏法用語にひっかかる部分も多くなり、「十界互具」論の解明という本筋からはずれる危険性もなきにしもあらずですので、ここではさつと素通りすることにしまして、『観心本尊抄』に記された十界互具というものの原理とか意味を思索しますと、どうやら「十界が、そのそれぞれに十界をそなえていゝ」と簡単に定義できそうな気がするのですが――。

池田 「十界互具」を文字どおり解釈すると、たしかに、「十界という境涯が、互いに具足しあっている」となる。

――そなわっているとか、互具しているとかいった表現は、理解できます。また「冥伏」ということもわかるような気がします。でも、それでは、と開きなおられて、いまこの瞬間に、君の生命において、十界はどのような状態でそなわっているのか、と質問されると、また困ってしまうのです。たとえば、その配列図を書け、などといわれると……。

池田 十界が、地獄界から仏界まで、縦に並んでいた。そして、地獄界だけ

が、生命の表層に頭をだして、仏界はもつとも深部にあり、宇宙生命と連結していた、となると理解もしやすいでしょう。

また、十界が、長い貨物列車のように、横につながっていて、右端が地獄界で、左の端が仏界であったりして、それが、少しずつ右から左へ動いていく。田舎の踏み切りで、貨物列車の通過をまつように、ああ、やっと畜生界が通っていった。こんどは修羅界で、そのつぎに人界だ。仏界の通過までまっていると、ずいぶんくたびれるでしょうね。

池田　ともかく、あらゆる生命において、十界のそれぞれは、縦に並んでい
るのでもなければ、横につながっているのでもない。だからといって、手をつ
ないで輪になっているのでもない。つまり、縦でもなく、横でもない。円でも
なければ、方^{ほう}つまり四角でもない、としか表現の仕方がないようです。まあ、
そういった既成概念をネグレクト（否定）して、超克したところにうかびあが
るのが「空」という存在状態なのです。時間と空間のワク組みをこえていると
とってもよい。

だから、十界が横につながると、身体のほうまで太ってきて、これ以上はごめんこうむりたいとか、縦につながって、スマートになりすぎて困るとかいっただ心配はいらない（笑い）。「空」という状態は空間の概念に束縛そくばくされることもないのだから、広いといえれば広いし、狭いといえれば、これほど狭いものもないのです。

——たしかに、現象の世界、つまり「空」に対する「仮」ですが、その「仮」の世界をおりなしている法則などとは、まったくちがうものだというところまではわかります。でも、もう少し「空」そのものでなくとも、近似的な意味でもいいですから、わかりやすい譬えはないでしょうか。

池田 私も、こういった質問をうけて、縦でもない、横でも、斜めでもない、また、色でも形でもない、などと説明して、相手の人がほとほと困惑した顔つきを示すときには、つぎのような譬えをひくことにしている。あくまで「空」を理解するための手がかりとしてだが——。

この空間には、種々の国の電波がとびかっている。ソ連のもあるし、米国の

発する電波もある。軍事用の電波も残念ながら交信に使われているであろうし、また、漁船に台風情報などを伝えるような貴重な電波もある。にもかかわらず、私たちの眼や耳ではとらえられない。

——世界各国の放送などがぜんぶきこえるようですと、騒々しくてとても睡眠もとれませんし、また、それが、くつきりと眼に映じたりすると、日常生活にもさしさわりがでてきます。

——その前に、ノイローゼとか、精神錯乱さくらんになるのがオチですね。

池田 私たちの五感とか六感でとらえられなくても、ほとんど無数の電波がとびかっていることはたしかだ。その証拠に、受信機をセットすると、望みどおりの電波をキャッチできるのだからね。

ところで、それらの電波だが、たしかに邪魔をしあうこともなければ、排斥することもない。あたかも、この空間に、溶けといったように内在しつつ、しかも流れ動いている。まあ、ちよっと注意書きをつけておくと、電波の周波数が重なると混乱することもあるが、この場合の電波の存在状態というのは、あく

まで「空」の説明に使っているのだから、「空」そのものではない。だから、空間内での混乱がおきることもありうるのだが、「空」そのものにおいては、この空間という広がりさえも消失しているのです。ここが、電波の状態と「空」そのものとの根本的なちがいがだが、ここのとてをわきまえてもらったうえで、私の説明から「空」の概念をつかんでもらいたいと思う。

——無数の電波をいれたままで、その空間という広がりがパツと消える。これから類推しますと、十界という境涯をぜんぶ内包したそのままで、十界のそれぞれが、時間と空間をこえた領域で脈動している。それが、私たちの生命の世界であると——。

池田 いいところにきたようです。「空」の状態で、十界のすべてが脈うつている。ともすれば、人は、「無」と「空」のちがいはある程度わかつて、その「空」をきわめて靜的にとらえがちなものだ。靜的に考えると、どうしても縦とか横とかいった概念にとらわれてしまう。だが、生命の実相は、あくまで、ダイナミックな生の流れにみちている。生のあらゆるエネルギーをたたえ

ている。だが、生きていながら、しかも、生命の内奥に姿をかくしている。

ゆえに、「空」という存在状態にある十界のすべてが、死ではなく生の色彩をおびて、躍動^{やくどう}し、うずまいていると表現できるのではなからうか。このような生命のあり方というか、十界のあり方を、もつとも適切な言葉であらわすと、「渾然一体」となって「融和」しているともいえよう。さらに、十界という境界に焦点をあてれば「十界互具」と表現できるのではないだろうか。

——私も、どうやら「互具」というのを、靜的にとらえていたようです。しかし、この「十界が互いに具す」ということを、動的ダイナミックにとらえますと、私の生命そのものにも、十界の躍動が感じられてきました。

池田 先ほどの定義が、単なる言葉の解釈ではなく、私たちの生命そのものに生きかえったようだね。十界互具ということの定義だけさらっと読んでしまふと、あまりにも明瞭すぎて、かえって、その深さというか、定義にこめられた真実の意味を見おとししてしまう。そこで、もう少し、考察をすすめると、十界の各々が生の息吹きをたたえ、動き、変化への力をひめているからこそ、十

界のすべてが融和し、一体となって、私たちの生命に内在しうるのです。

いや、むしろ眞実は、私たちの生命において、十界が互具したままで存在しうるがゆえに、十界のうちのいずれの境涯にも、顕在化しうる力というか、可能性をたもつことができるという点にあるようです。少しむずかしくなるが、この互具という事実のなかに、生命の躍動するエネルギーがはらまれている。だから、この脈うつ生命の血潮を、かりに、人工的に凍結して眺^{なが}めたりすると、たちまちにして、十界の融合はくずれ去り、私たちは、ただ、十界のバラバラになった姿をみいだすにしかすぎないのではなからうか。仏法でも『法華経』以外の経々においては、たとえ、地獄界とか、人界とか、仏界とかを説いているとしても、それらは融合したものではなく、別個の——つまりバラバラの——存在としてしか説かれてはいない。

——ここなのですが、私、いつも不思議な気がするのですが、『法華経』以外の経文では、どうして、十界の融合が説きえなかったのでしょうか。仏界と九界の融合となると、これは、よほどの洞察力がなければみいだせない

でしょうが、たとえば、九界のなかでの融合は、もし「空」の概念さえわかれば説きえたのではないかと思えます。

池田 それは、生命をありのままに知見できなかったからであるというほかはないようです。もっとわかりやすくいうと、生命の活動というか、営みを、その動きのままにとらえることができなかったゆえでしょう。ダイナミックな生命の営みを知見しようとするとき、たとえ、その流れをまったくとめてしまいうのではなくても、もし、少しでも傷つけたり、変形させるようなことがあれば、渾然一体となつて融けあっている十界互具の姿は、たちまちにして空中分解してしまふにちがいあるまい。それほど、互具しあつた十界の調和ある律動は、微妙でもあるし、そして、傷つき、こわれやすい。そこに、三諦論さんたいとか、色心不二とか、依正不二などといった仏法独自の認識の方法が重要になつてくる意味もあるのだが、ここでは、そのことには深入りしないことにしよう。

さて、あたりまえのことだが、バラバラになつた十界の姿は、私たちの生命に燃えたぎる生きた実在ではない。『法華経』以外の経文においては、生命を

会得するのに、その全体像をありのままとらえることができず、部分観であったり、また、ゆがんだ形でとらえたりする。だから、それらの経々のなかに人びとがみいだしたものは、私がのべてきた意味においての、十界の死せる姿であつたとは考えられないだろうか。したがって、その「なきがら」を、どのようにつめてきても、生きた十界互具の血潮は、再びよみがえるはずもない。ちやうど、私たちの身体において、肝臓や腎臓や脳細胞や、神経や血管をどのようにつ結してみても、そこから生の息吹きを誕生させることはできない相談であることと類似する面もあるようです。

——バラバラになった手とか足とかの屍体を、医学でどんなにつなぎ合わせてみても、もとどおりの生きた人間はよみがえりません。

池田 ゆえに、結論していうと、十界のそれぞれは、本来、分離し、バラバラになった存在で常住するのではなく、融和し、合一しつつ脈動するのが、真の姿なのだと思う。十界が互具しつつ、しかもそのなかに、生の血潮をたたえているからこそ、たとえば、ある瞬間に、十界のうちのどの境涯があらわれて

いたとしても、つぎの瞬間には、冥伏していたいずれの境涯をもあらわしうるという可能性をはらむことができます。つまり、脈動する生命体は、いかなる瞬間をとってみても、十界互具の当体としての生を享受しているのです。

——この項を終えるにあたっての確認になりますが、十界互具という原理からしますと、たとえば、地獄界のつぎにはかならず餓鬼界がきて、そのつぎには畜生界がくる。それから修羅界というように、十界を地獄から仏界にむけて一つずつ現わしていく。こんな調子で生命が変転するということはちよつと考えられませんか。

池田 そういったケースもある。だが、原理的にはあくまで、地獄界のつぎにも、人界のつぎにも、十界のすべての境涯がくる可能性があると考えねばなるまい。だが、現実には、どうやら、三惡道とか六道ばかりがあらわれて、菩薩界とか仏界などには縁遠い人が多いようだね。ともかく、原理はあくまで原理として確立し、その原理をふまえたうえで、こんどは現実の生命流転に眼をむけよう。

人間革命とは何か

——私も、十界互具ということについて不明瞭であつた部分が、ようやく霧がはれたようにすっきりしてきました。そこで、この十界互具の原理をみつめながら、そこから、自己を変革し、幸福の“女神”を呼びよせる作業に移りたいと思います。

先ほどはA医師の体験にもとづいての考察でしたので、こんどは、B青年とC子さんの記録を使わせていただくことにします。まずB青年の場合ですが、オリンピックの出場をかけた予選の前までは、人界とか天界をあらわしていたのでしょね。

池田 もし“体操界のホープ”などとさわがれて、有頂天になることがあれ

ば、天界だと思う。だが、その天界が、一瞬の後には、地獄界の苦しみのなかに転落している。

——ジャンプしたとたんに、バランスを崩して、マットに倒れたときですね。

池田　つまり、天界の喜びというか、得意げな顔貌がんぼうのなかにも、地獄界の悩みがひそんでいたことになる。この天界から地獄界への移行を、仏法的にいうと「天界所具の地獄界」というふうに表現できよう。これは、天界に具していた十界、すなわち「天界所具の十界」——のうち、現実には地獄界があらわれたということの意味している。

——それからのB青年の生活は、まったく狂ってしまっています。絶望が全身をおおい、それをごまかすために、睡眠薬をあびるように飲みはじめます。それと、酒、ケンカの連続——。

池田　地獄界の連続でしょう。地獄界所具の地獄界という方程式がかぎりなくつづいていくようです。そのなかで、ときどき、酒とケンカに気分をまぎら

わすときは、修羅界だ。だが、その修羅のエネルギーをも使いはたすと、再び、空しい心をいだいて、不自由の極限をはいまわらねばなるまい。修羅界にも、地獄界がそなわっているからです。

——睡眠薬で中毒症状をおこして、次第に、悶えの底しれぬ深みにのめりこんでいくのが目にみえるようです。

池田 かつての、華やかな天界の住人から、いまは、地獄界をはなれられない生命のあり方へと変転してきた。どんなにあがいても、また、どんなにあせっても、ちょうど、獄卒の手にした鉄の鎖によってひきずりこまれるように、どこにいても、かならず苦しみの極致へと帰っていく、牢獄こそが、その青年の生命にもっともふさわしい住み家であるかのように——。

——でも、考えようによっては、たとえ短い期間、辛苦しんくのかぎりをなめても、強い意志力によって立ちあがることもできたはずではないでしょうか。

池田 原理的にいえば、みずからの努力によって地獄界からの浮上は可能ではありません。地獄界にも、人と天の世界や四聖の境涯すらはらんでいるからです。

だが、現実には、B青年は、どんなに決意し、精神病院にまで入って治療をうけても——少し病状がよくなったところは、一時的には人界の安らかさを味わっただろうが、退院するとまたもや薬物中毒の巷ちまたにのたうっている。どんなに決意を固め、また、薬物を与え——これはむろん、解毒剤のほうだが——医師と看護婦さんの手がさしのべられても、どうしても地獄界から脱けだしえない。それはなぜだろうか。

——廃人同様の青年を知っている一人の友人は、B青年の性格のもろさをあげています。決意してもすぐぐずれて、つい、薬に手を出してしまふ——と。

——麻薬とか睡眠薬もそうですが、中毒症状をおこした人にとって、薬物の誘惑は強烈ですから、よほどの意志力というか、もっと深いところからの生命の力がないと、まず打ちかてないでしょう。

池田 意志が弱い。なるほど、それもあるでしょう。また、別の面からB青年の性格を分析すると、気分がかわりやすいとか、持続性がないとか、神経質などところがあつたとか、種々の要素がうかびあがってくるにちがいない。また、

良くいえば、快楽を求める欲望というが、衝動が強すぎた、^{しょうどう}といえないこともない。良い面も、悪い面も、ともに具備しているのが私たちの生命です。

しかし、これらの種々の特質なり、特色なりが、善悪を含めて、B青年自身に統合され、統一されて、瞬間ごとの生が営まれている。まあ、そういったなかで、B青年の場合は、性格がもろい、という特徴が顕著だったのだろうとは思ふ。

——心理学用語を使いますと、“パーソナリティ”といいますね。日本語ではいちおう人格というふうに翻訳されています。この“パーソナリティ”自体が、地獄界をあらわしやすい種々の要素をもっていた、と考えることはできないでしょうか。

池田 “パーソナリティ”を厳密に定義すると、一人の人間の全体的な特色、とでもいえばいいだろう。それを、行動面からすると、その人特有の行動の仕方、パターンだが、これは、ある程度予測することもできる。酒をのむと荒れてくる人がいる。すると、もうこれぐらいで、そろそろ騒がしくなるころだと

推測できる。また、おとなしい女性だと、満員電車に乗るとき、どういふ行動をとるかといったことも、大体はわかるものです。まあ、ときには予測できないこともあるがね。

——「くせ」というのも入りますね。木枯し紋次郎の口にくわえた長い楊子^じなんかは、愛きようがあつていいですが——。

池田 悪い「くせ」は困るね。自分も悩むし、他の人たちや社会をも悩まして、迷惑をかけたりする。その「くせ」を治そうとしても、自分の意志ではどうにもならない場合も多い。

——それで思ひだしたのですが、あまりよくない「くせ」というか、むずかしくいい直すと異常な性格、性質ですね。これを心理学者のシュナイダーという人が、十の型に分類したのがあるのです。ざっとあげれば、文字どおりなのですが、発揚性の人——陽気でいいのですが、いつも酔っぱらっているような人です。抑うつ性の人——じめじめした暗い性格に悩みます。自己不確実の人——俺はいつたい誰だろうと、ときどき疑念がわきおこるのです。これから

あとは説明の必要はないと思います。つまり、顕示性の人、気分易変の人、無力性の人、爆発性の人、情性の乏しい人、狂信性の人、意志の弱い人、とわけられています。といつても、純粹に一つの型をもった人がいるというわけではありませんが、私たちは誰でも、このなかのどれかが顕著だと、やはり認めざるをえません。

池田 それでは、良い「くせ」のほうもあげてみると、愛情こまやかな人、思慮深い人、生命感情の豊かな人、意志の強い人、謙虚な人、信念の人、気分の持続する人、意欲にみちた人、計画性のある人、——まあ、いくらでも分析できるが、これらの恵まれた性格の強い、豊かな人でも、それらを、どのようなように發揮していくかによって、善と悪は変わってくる。意志が強いといつても、慢心と結びつけば手におえないほどの悪をなすこともある。また、計画ばかり立てて実行しない人になりうる可能性もある。こういった各人各様の特質を含みつつ、その人の全体的な特色がもしだされる。それが「パーソナリティ」だが、この人格的なものは、たしかに、十界のうち、どれかを顕現しやすい傾

向性をもっているでしょう。そこまでは考えられる。

たとえば、意志力の比較的強い人だと、地獄の苦悩からはいだす確率が高い。無力性の特色が強いと、環境の荒波にもまれつづけるだけでしょう。爆発性の性格をもっていると、何でもないと怒りや、憎悪や、破壊欲や、攻撃欲を発動しがちです。愛情がこまやかな人だと、だれでも、暖かな愛の衣ですっぱりとつつんでしまふにちがいないし、生命感情が生まれつき豊かな人にとって、自然の風物や、また他の人びとの苦楽ともに、自己のものとすることができると、少しばかりだが、性格とか、人格などをみてくると、修羅界に結びつきやすい人もいれば、二乗の境涯に遊ぶことを好む人もいます。慈悲心を発現して、菩薩の行為におもむかざるをえないような人もいます。と思われる。

——そうしますと、“パーソナリティ”と十界互具論は密接に関係してきますね。

池田 密接な関係性はある。B青年の人格も、やはり、地獄界とか、修羅界

に結びつきやすい要素をもっていたことは事実です。だから、自分の努力だけでは容易に地獄界の苦悩を克服できなかったのだ、ともいえよう。だが、私は、十界互具の原理にストレートに関係するのは、性格とか、人格も入るが、それらを含めた、その人個人の生命全体の傾向性ではないかと思う。「くせ」といってもいいが、それは個々のものではなく、生命全体の「くせ」です。

その傾向性とか「くせ」を形づくるのは、性格的にいうと人格も含めて、その背後にある広大な無意識の世界とか、また、肉体的な体質とか、気質とかいったようなものがあるような気がする。人間の生命が色心不二の当体である以上、身体的なエネルギーの強さとその質をも十二分に考慮に入れるべきであると思う。たとえば、性格的な欠陥も、身体に力が充満しているときには、カバーされてしまうか、もしくは、その欠点と思われる性質さえも、いい面に生かされることもある。

—— B 青年も、体操界の新鋭としてぐんぐん成長しているころには、少しぐらいの性格的なもろさがあつたとしても、それはほとんど問題にはなってい

ません。いや、かえって、それが、気のやさしさになってあらわれていたかも知れません。

池田 では、そのころの生命全体の傾向性はどうかといえ、人格的にたとえ弱い部分があったとしても、——だれでももっているものだが——十分にそれをのりこえて、人界とか天界を顕現していたのではなからうか。一時的に三悪道をめぐっても、すぐ人間らしい境地をとりもどすだけの、体力もあり、氣力もあつた。だから、十界互具論からいえば、つねに、人と天の世界に帰っていくような生命の「くせ」をもっていたことになる。ある場合は、体操の技術とか、新しい型などをみいだそうと努力して、二乗の境地にひたっていたとも考えられる。

私は、このような生命全体の傾向性がさし示している十界のなかの境涯——この場合は人と天の世界とか二乗界だが——を、その生命にとっての基底部である、といいあらわしてみたいと思う。あるいは、別の言葉を使えば、オリンピックへの希望の星であつた一人の青年は、まことに人間らしい幸せをかみし

める境涯を基調にして、人生航路を歩んでいたとも表現できるでしょう。

——すると、私たちの生命は、瞬間ごとには、さまざまな境涯をあらわしていても、少し長い眼でみれば、かならず、生命活動の基調となり、基底層となる一つの境涯を発見できるというわけですね。そして、その基調となつてゐる境涯が、その人の生命の傾向性というか、おもむくところを端的にさし示しているのだと——。

池田 そう考えていいでしょう。ただ一つ、つけ加えておくと、基調となる境涯は、十界のうちの、一つの境地だけとはかぎらないのです。地獄界と餓鬼界と畜生界を、絵に書いたように順序正しくめぐっている者もいる。また、畜生界にとどまらず、修羅界、人界、天界とあがつていつて、そのつぎに地獄界へとみごとに転落する生命もある。

——俗にいう“ひばりの人生”ですね。

池田 それから、声聞界と縁覺界ばかりをちやうど半分ずつ規則正しくあらわしている生命だつて現実にはみられよう。

——大学の研究室に、フトンと食事道具一切をもちこんで、研究に没頭していますと、たしかに、二乗のみが基調になります。私もよくきかされたのですが、象牙の塔にとじこもっていて、日本とソ連——その当時はロシアですが——の戦争をまったく知らなかった学者が、現実にはいたそうです。学者仲間では、伝説になっているのですが、象牙の塔の窓からみると、多くの人びとが、ちようちん行列をしている。仙人のような学者は、弟子にたずねたそうです。「どうして、皆、うれしそうにさわいでいるのか」と。すると、弟子の一人が「戦争に勝ったのです」と答えると、学者は不思議そうに「日本は、どこかの国と戦っていたのか」と反問したといひます。この話は、善悪を別にすれば、学者の生命の傾向性は、たしかに、二乗のみを示していたという実例です。ウソのようなホントの話です。

池田　そこまでくると、特殊な人の境涯になってしまふが、とにかく、二乗とか、三悪道とか、六道のぜんぶを基調としているような生命の動きもあることだけは確実です。

池田 生命の傾向性が、わずかずつ変革をとげていくことのほうが、むしろ一般的でしょう。A医師の場合もそうだし、C子さんの青年期に至るまでの歩みも、劇的な生命全体の変革は見あたらないようです。

一つの例をだそう。大海のまっただ中を一せきの船が航海しているとしよう。荒波にもまれ、激しい風雨にさらされたり、また、波静かな好天に恵まれることもあろう。そういった場合、船は針路を百八十度転回することができるともあれば、徐々に旋回していつて同じ効果をえることもある。このたとえから、人生という海原を進む個々の生命という船がいかなる航路をたどるかを熟視してもらいたい。だからといって、生命の傾向性が、地獄界から餓鬼界へと変わり、それから畜生界などと単純に考えてもらっては困るがね。

——そのあたりはわかります。C子さんの場合も、御両親の生命状態をも含めてですが、小児マヒの宣言は、たしかに地獄界です。でも、その苦しみの境涯が、いつとはなしにうすれてきて、人界とか天界の喜びにもひたっていますし、また、菩薩界の所業をさえも立派になしとげています。

池田 小さいころの基底部は、あるいは三悪道であつたかもしれない。とくに、御両親の生命は、心配と悲しみでいっぱいであつたろうと察せられます。しかし、娘さんは、明るくて、愛らしい女性に育つていったとある。性格のゆがみ、つまり「ひがみ」の根性も少しも芽ばえていないともいう。こういった娘さんの人格からも、私たちは、御両親と娘さんの生命の傾向性が、地獄への針路を少しずつ変えて、幸せな結婚をするころには、四聖の境地とか、人間らしい境涯をさし示していたことが理解できるのではなからうか。少なくとも、学校を卒業して、社会に入るころには、すでに、三悪道とか修羅界を基調とするような生命状態ではなかったことだけは断言できそうです。

——彼女の場合も、たしか小学生のころに一つの宗教を体得するといふか、宗教的な修行を支えにしての、努力がつみ重ねられています。

池田 その宗教的な修行といふのは、仏界という生命の顕現をめざしたものだです。

——あらゆる人の生命内奥からの仏界をわきいだす行為です。

池田　その行為のたゆまぬ連続が、ともすれば、苦悩の極限にむかおうとする生命の傾向性を少しずつ変えていったのです。長い歳月だから、たとえば地獄界をぬけでても、修羅界を基調とするような時期があつたかもしれない。また、自己にせおわされた運命の重みを、じつとかみしめる反省の時期をもつたこともあつたでしょう。

しかし、その生命は、やがて、菩薩界とか仏界を基調にして脈動しはじめる。仏の生命に立脚した人生の胎動は、世のいかなる激風と荒波にもたえて、微動だにしない自己変革の道をまっしぐらに進みゆくはずです。たとえば、社会からもたらされる種々の働き、つまり、仏法用語では「縁」となるが、その「縁」がいかなるものであるかと、みずからの定めた人間革命のプロセスをけっしてふみはずことはない。

——たとえば、その「縁」が、地獄界へつきおとすような強烈な働きであっても、それを受けて立てるのでしょうか。

池田　C子さんにも、そんな事件があつたようですね。保育園の事務の仕事

をつづけられなくなったという——。理性的には納得いったとしても、仕事を解雇されることは、やはり、苦しみをもたらす。しかも、その理由として、自己の努力で克服したはずのものが、再び他人によって拾いあげられてくる。ともすれば、運命をのろい、社会に背をむけ、自暴自棄の心境になりがちなどころを、彼女はみごとにのりこえている。地獄の「縁」を受けて立つ気力と生命の力の源泉は、青春をかけて会得した仏界という基調の境涯ではなかったでしようか。

だが、もう一步、深めてみよう。仏界を基調とした生命は単に苦悶をもたらす「縁」を受けて立つだけではあるまい。常識的にいわれることだが、苦しみとか悲しみとかは、人の心の深さをますものです。人の世の真実の苦悩を味わった者のみが、他者の不安や苦痛を、そのまま「同苦」できるようにも思う。つまり、苦しみは、その受け方によって、地獄の原因ともなれば、また逆に、その人の人間性を深める栄養分にもなりうるのです。もし、後者をとれば、苦悩は立派に利他に生き、「拔苦与樂」の行為に生きがいをみいだす菩薩界の原

動力と化すのです。

——餓鬼界とか、畜生界とか、修羅界などにも、同じことがいえるのですか。

池田 原理は同じです。飢餓感におびえた体験をもつ者のみが、食物をはじめとする地球生命からの恵みに、感謝の心をわきおこすことができるのです。そこから、自己をはぐくんでくれる他の人びとや社会や自然への、心の底からの慈しみの念も生じるといえるものでしょう。

また、弱肉強食の原理や、憎悪、嫉妬、慢心のうずまく人の世に体当たりで生きる者のみが、畜生や修羅の境涯に身をまかすことの愚かさおろを、骨の髄から知ることができないではないでしょうか。もし、その愚かさを熟知すれば、増上慢の心や嫉妬の感情や、利害にのみ執着する自我と、真正面から対決する勇猛心へと、人びとの生命自体を変転させることも可能だと思う。少なくとも、エゴイステイックな生命をたたきふせるだけの勇氣と意欲はわきあがってくるはずです。

——いまの話を書いて、A医師が、医は仁術なりの不変の倫理を可能にする哲理を身につけたあとで、「利害にとらわれないようになった自分がうれしい」と語った、その心情がわかるような気がします。

池田 仏界を基底部にした自我のみが、よく表現しうる言葉ではないかと思えます。

——仏の生命というのは、三悪道や修羅の心さえも、自己の成長と他者への感謝、慈悲の行為へと生かしていくのですね。

池田 いま、四悪趣という境涯までを例にとって考えたが、他の九界についても少し思索してもらえばわかることなので、あえて、人界とか天界とか二乗については、ここでは詳述しないことにしよう。この章もずいぶん長くなったので、本筋だけを追っていくことにして、ただ一つ重要な点を指摘してみたい。それは、九界の境涯をもたらず種々の「縁」は、すべて、仏の生命のなかにとり入れられると、自己の人間変革の栄養分に化してしまうという点です。また、少し逆説的にきこえるかもしれませんが、九界という荒波の領域をはなれ

て、私たちの生命は、仏界を基底部にすることはできないということです。これが、仏界即九界、九界即仏界の実践的な意味です。

——むずかしいですね。

池田 では、もっとわかりやすい例をひこう。私たちの身体には、食物を消化し、吸収する能力がそなわっている。これは、身体的エネルギーといってもいいでしょう。しかし、そういった力がそなわっているからといって、食物を口に入れなければ、私たちは生きていくこともできない。こんどは逆に、どのように栄養分たっぷりの食物をとっても、それを消化する能力が失われていれば、かえって、生命を傷つけるだけでしよう。

——食物にあたるものが、九界の縁であり、私たち自身の能動性が、仏の生命であるといったようにたとえられますね。

池田 だから身体が強靱きょうじんで、はつらつとしていると、何でも消化してしまふ。ところが、消化力が弱っていると、たとえ、力がつくともわかっていても、食べられないものがある。

——極端な場合ですと、長い間、飢餓の世界をさまよった人に、いきなりビフテキを食べさせると、死をまねくことにもなります。やはり、流動食あたりから少しずつ栄養をつけていかないとダメですね。

池田 身体の例をかりてきたが、仏の生命が充満しているときは、三悪道であらうと、修羅界であらうと、すべてを自己の成長の糧としうる。その行為が、そのまま、仏の生命の働きを増幅し、仏界の強化にも役立っていく。

——つまり、食物が吸収されて、それが心身のエネルギーに化していくという過程ですね。

池田 地獄の苦悩は、人びとの心の深さをまし、情緒を豊かにし、悩める人との連帯を可能にする。飢餓感は、その克服を通して、地球とか宇宙生命への感謝の心をはぐくんでいく。畜生界における愚かさの発見は、仏の英知にてらされて、その愚かさを排除するための実践的な知恵に転じていく。また、憎悪に狂う人は、自己の生命を変革しつつ、その憎しみを、社会と文明の悪にさしむける方途を学ぶにちがいない。

人界や天界にひたる人は、その喜びを享受しつつも、天界の頂上に待ちうける生命の魔性にとらわれることはない。さらに、二乗界の「我」は、自己のためではなく、他者の幸福への一助として、努力の結晶をささげるのではなからうか。菩薩界の行為が、仏界の生命を強めるのはとうぜんだが、他の境涯で行ないも、すべて、仏界に立脚しつつ、しかも、仏の生命を強化し、はぐくんでいくのです。こうして、九界の「縁」をとり入れ、栄養分と化し、他者を生かしながら、自己変革の道を歩む。これが、私たちの一生をかけて実践しようとしている人間革命の十界互具論にもとづく生命流転の方程式です。

——最後に一つだけ確認というか、質問があります。人間革命とは、十界互具論からすれば、仏の生命を基調にしての、生命全体の変革であるのとれますが、その、仏界を基底部におく作業の一つには、もっとも根本的なものとして、仏法の修行による、私たち自身の生命の奥底からの仏界の顕現がありますね。

池田　とうぜんのことです。その修行を、たゆまず実践しぬくところに、私

たち自身の生命に、宇宙大の力が次第に定着していくのです。わが内奥の仏界をはぐくむといってもいいでしょう。だが、仏の生命が現実^{じゆんじつ}に働くのは九界の世界です。たとえば、私たちの身体に、食物の消化力がそなわっているといつても、その力は食物を摂取してはじめて現実の働きをするのです。

同様に、仏の生命には、宇宙大の慈悲と英知がある。その英知は、端的に言えば、あらゆる生命的存在に食い入り、暗躍する、生命の魔性をみぬく知恵です。そして、慈悲のエネルギーとは、生命の魔性を打ち破る力であるといえましょう。したがって、仏の知恵と慈悲を発現させる場合は、九界の巷です。

九界の荒波のなかで、知恵を使い、慈悲力をあらわしてこそ、私たち自身の仏界もますますみがきかけられるというものです。しかも、その働きによってとりこんだ九界の「縁」も、先ほどのべたように仏界の栄養分となり、これらの連鎖的な働きが、相互に強化しあつて、仏の生命が堅忍不拔^{けんんにんふたつ}の存在となりうるのです。

——先ほどの例をかりますと、九界の「縁」が、仏界を育てる栄養力

ですから、積極的に私たちの方から働きかける必要がありますね。たとえば、地獄界をもたらしようなことがあっても、逃げるのではなく、かえってそれにチャレンジ（挑戦）していくとか――。

池田 逃げていると、いつまでたっても食物をとれなくて、栄養失調になる。つまり、逃げれば九界の迷いだね。挑戦して、自己実現の栄養と化せば、それを仏界の悟りともいえよう。私は、仏界を基調とした生命は、望んで、九界の「縁」に体当たりするのではないかと思う。また、それが、信仰者の生き方でもある。

たとえば、あえて地獄の苦をひきうける生命を、仏界と称するのではなからうか。地獄の縁を受けて立つという姿勢より、もう一步進んで、あえて苦悩の世界をひきうけ、修羅闘争とうじょうのまっただなかにとびこんでいく。そこに、人間としての真実の主体性が確立されるのだとも思う。たとえば、その人が、生活とか地位とか、また学歴とか財産の関係で、保障された安穩な人生を送れることがわかっていても、あえて、それをふりすてても、三悪道の巷に立ちむかって

いく。また、自己の意志で、六道輪廻をくり返す場合もあるでしょう。

表面からみれば、安穩な生活は、人界や天界の生命活動をもたらし、三悪道の荒れ狂う世界での挑戦は、地獄の苦しみの連続とうつるかもしれない。だが、その地獄界の苦闘の奥に、仏の生命が輝いているかぎり、その人は、人格をみがき、見識を高め、自己変革と自己実現の道を歩んでいるのです。そういった人に、真実のくずれない幸福の「女神」が訪れるのではないでしょうか。ゆえに、十界互具論をとじるにあたって、つぎのことだけは強調しておきたい。

仏界を基調にして、あえてひきうけた苦悩は、望ましい苦しみであり、あえてかかわった悲しみは望ましい悲哀である。それは仏の生命をはぐくむ苦しみであり、悲しみであるからだ——と。

生命はいかに運動するか

生命のもつ可能性

——最近、話題になった映画ですが『ジョニーは戦場へ行った』というのがあります。けっして映画を宣伝するわけではないのですが（笑い）、生命のもつ不思議さ、可能性というものを鋭く抉り出してくれたもののように思ったのです。第一次世界大戦で負傷した青年が、手術で両手を切断され、両足も切断されてしまう。耳も聞こえないし目も見えない。もちろん口もきけません。顔面はつぶれているのと同じなのです。そのような、もう単なる肉塊としかいいようのない青年を、医学の技術は、殺さずに生かしてしまふ。青年は、意識だけはもっているが、それを表現する手段をもたないし、感覚器官のほとんどを失っているわけです。そのような青年の話なのですが、人間が人間として存

在しうるかどうかという、いわば極限の状態を描いており、強烈な反戦映画であるとともに、生命とは何かを観衆に問い迫っている点で、強い衝撃をうけました。

——ドルトン・トランボの『ジョニーは銃をとった』の映画化ですね。第二次大戦の勃発直後に発刊されたそうですが、この小説の例にかぎらず、現代の医学では五体満足にそろっていても、大脳の働きが破壊されて意識さえもない負傷者や、公害等に冒されてしまった、いわば「植物人間」を、生かすことはできても治癒しきれない状態でたもつといったことがよくあります。そのような場合における人間とは、あるいは生命とは何かという問題を含めて、これはまさにもつとも今日的なテーマであるといえますね。

——この小説、あるいは映画のような実例があるのかどうかはわかりませんが、視覚、聴覚、嗅覚、味覚などを奪われた存在というのはどういう状態か想像もつきません。触覚もほとんど奪われているわけです。両手両足がないのですから——。ただ、体の一部に触れたときの感覚だけをもっている。そ

して、自分の主体的な行動としては、体を少しでも動かすということしかできないわけです。事実、青年は、最初は空間の観念はもとより時間の感覚さえ失っているのですが、やがて体に感じる温度の違いによって、太陽があたっているかないか、すなわち昼か夜かを区別することができるようになり、時間の観念を辛うじて取りもどすわけですが――。

池田 まさに生ける地獄としかいいようがないね。自分で自分をどうすることもできない、絶対不自由の世界に閉じ込められてしまった状態です。人間が人間として、自由奔放にみずからを完全燃焼させるすべを失ってしまうということほど、悲しいことはありません。人間というものは、もちろん他のすべての存在物に依存して生きているわけだけでも、自分は自分以外にはありえないという、そして宇宙のすべては自分との関連のなかでとらえたいという、強烈な自我というか自我意識がある。それをどう止揚させるか、また理想的な形で顕在化させていくかに、私たちの課題があるわけだけでも、その手段のほとんどを失うということは、絶対的なハンディを負ったことになるといっても

よいでしょう。

——この話に関連して思い出したのですが、これは夢を見ているときの状況と少し似ていますね。夢というのは、身体各器官の反応が低下し、あるいは外界からの刺激がほとんど遮断しやだんされている状態で、精神だけが活動している状態、これを逆説睡眠(注12)というのですが——といっても、起きているときの精神活動とは違っていますが——そういったときに起こる現象と考えられるわけですが、この青年の場合もそれに近い。青年にはいろいろな妄想、思い出が夢のようにつぎつぎとあらわれています。そして、最初のうちは、外界からの刺激も、それを受動的に受け止めているだけだから、体をネズミに食い破られるという妄想をもってしまうわけです。

もつとも、のちには外界の刺激を理性的に分析するので、そういうことも少なくなるのですが——。たとえば夢を見ている場合でも、外界の刺激を遮断してしまふと、夢を見ている状態に近くなることは、実験でも示されています。被験者を水槽のなかに入れ、人工的に無重力状態にし、また一切の光り、音波もな

くしてしまふ。被験者が自分の体をさわったり、動かしたりすることも不可能にする。すると、まるで夢を見たように、さまざまな想念が映像化されて目に映るといふんです。ですから、負傷した青年が、自己をたもとうとし、外界との接触を大事にし、分析、推理する能力がなかったら、夢を見つづけるといったような状態で日々を過ごさなければならなかったかもしれませぬ。

——ところが、青年は、看護婦が、自分の体の上に書いてくれた文字を理解するようになる。最初は看護婦の手さえネズミの襲撃と思いこんでいたのですが、「メリー・クリスマス」と書かれた文字の意味を理解し、激しく頭を枕にぶつけて、それを訴えようとするのですね。そしてモールス信号で、意志を伝えようとする。それがやがて相手に伝わり、意志の交流が生まれる。なんといつてもこの場面が圧巻だと思います。青年は、ギリギリの状況で、みずからを激しく燃焼させたわけですね。

池田 人間、右手がなくとも左手があり、両手を失ってもまだ足がある。その両足を奪われても目や耳があり口がある。そしてそのすべてを剥ぎ取られて

も、広大な心の世界を含んだ生命自体という絶対の価値がある。そしてそれこそ、生命を根底から揺り動かす広大な潮流です。その青年は、身体のひとつすべての機能を失いながら、その極限において、生命の深層にある生命のエネルギーを激しく噴出させたのでしよう。いったん地獄のただなかに落ち込んだ生命が、そこからはいあがり、みずからの状態を鋭く見究め、その環境のなかで、自己を変革しようとした、まさに生命勝利のドラマだといってもよいでしょうね。しかし、考えてみれば、これは現代社会への痛烈な警鐘けいしょうにもなっています。巨大な管理社会、大衆社会の状況は、一個の人間を、機械の部品のごとく扱ってしまふ。みずからの自由意志で動いているように思っている、いつのまにか情報洪水に乗せられて行動してしまっている場合も多い。一人の人間の力が途方もなく小さく感じられ、自己表現のすべも見いだせない。脱社会、脱体制、あるいは脱サラリーマンなどといってみても、それ自体が流行で、はたして主体性ある行動かどうかは疑わしい状況です。

そういった大きな単位のなかで人間をみれば、まさに、両手両足を奪われ、

目、耳、鼻、口なども失った青年の状態と、変わるところがない。五体満足なようである、時流に流されている不自在の境涯を認識できないことは、ある意味では、この青年よりももっと悲惨であるといえるかもしれない。みずからの状況を把握することさえ知らず、主体性を失ったまま人生を過ごすことほど、人間としての価値を失った人生はない、ともいえるからです。

こういう社会状況にあつてこそ、人間の、みずからの内にある財宝の発掘がもっとも大切なことであるといわざるをえない。内なる変革は、外から見えないようである、かならず、とどめようもない力強さで外界にあらわれてくる。そして、やがては環境を大きく変革してしまうものです。外界と触れ合う生命が、いかに能動的に動き、また環境を積極的に取り入れ、そしてさらに自己運動をくり返していくか、その点の解明が必要になってきます。「十界論」、「十界互具論」について考察してきた私たちは、つぎに、この十界が、いかなる事実相として顕現し、またいかなる運動法則にもとづいているのか、といった分析を、仏法の「十如是論」を手がかりにして行なっていきたいと思う。

生命の本体——相・性・体

——「十如是」は、有名な『法華經』方便品にその名目が明かされています。「唯、仏と仏と、乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」とあります。このなかから、「十如是」だけをとりあげて論議していききたいと思います。

池田 ^(注13) この文のなかにある「如是」というのは、「是^かくの如し」ということで中道実相という意味をもちます。真実の姿、生命本然の姿ととらえられるでしょう。私たちの生命は、先に話し合ったように、一瞬一瞬、十界それぞれの姿を現じている。地獄界なら地獄界が、生命のすべてをおおっている。菩薩界

が生命を支配しているときもある。慈悲以外に生きようがない、生命それ自体も、行動も、そしてその結果も、慈悲という言葉でしか表現できないようであれば、その生命は仏界に住しているのだといってよいでしょう。

さて、その十界それぞれを現じている一瞬の生命の「本然の姿」「ありのままの姿」をとらえたのが、十如是という原理です。私たちの生命には、十界のすべてがもともとそなわっている。それがどのようにして、あるときは地獄界、あるときは天界としてあらわれるのか。一瞬前には冥伏していた地獄界の生命が、そのつぎの瞬間には顕在化してくる。そしてまた天界なら天界という生命が冥伏から顕在へと変化すると、地獄界の生命は冥伏へともどっていく。こうした変化には、どのような要素が絡み合っているのか。それを明らかにしたのが「十如是」であるともいえるね。

——この「十如是」のうち、最初の三如是、すなわち如是相、如是性、如是体と、あとの七如是は少し内容が違います。といいますのは、最初の三如是は、運動する生命それ自体をさしています。それに対し、あとの七如是は、ど

ちらかといえ、その生命にそなわっている機能的な側面を説いたものと考えられるからです。生命の、いわば運動法則といってよいと思います。もちろん、あとの七如是のなかでは、如是本末究竟等は少し様相を異にしており、全体的、統合的な原理になると考えられます。

——そこで、まず最初の三如是のうちの「如是相」ですが、日蓮大聖人の『十如是事』の文は、本書の第一巻でも引用しましたが、そのなかに「如是相とは我が身の色形しきぎょうに顕れたる相を云うなり」とありました。また『一念三千理事』には「如是相は身なり、玄二に云く相以て外によ拠るみ覧て別わかつ可し」とあります。このなかに「玄」とあるのは、天台大師の『法華玄義』ですね。さて、如是相とは、人間生命においては、その外面、現象面にあらわれた姿を指すわけですから、肉体すなわち心身のうちでは「身」の立ち場になるのですね。

池田 この如是相とつぎの如是性、如是体の三つについては、すでに「三諦論」のところで少し論じてきたところです。すなわち、生命の如是相をみていくのが「仮観」であり、如是性をみていくのが「空観」、如是体をみていくのが

が「中観」^(注14)ということになります。この相、性、体の三つを総合的に見きわめてこそ、生命の全体像が正しく把握できるのであり、三観三諦の円融が説かれるゆえんです。

『十如是事』の「我が身の色形に顕れたる相を云うなり」という表現のなかに、この考え方がすでに含まれている。生命というものは、色形、すなわち現象面、物質面でとらえることのできる範囲がすべてだというのではない。その内奥に、それを顕現させている広大な生命の実体があるということなのです。

——『一念三千理事』の「^み覧て^{わか}別つ可し」という表現にも深い意味があります。これは「分析できる」ということですね。すなわち、私たちの生命のうちの「覧て別つ」ことのできる部分、分析できる部分が如是相ということになる。私たちの肉体については、どのようにして成り立っているのか、医学の、長い歴史的発展が、それを徐々に分析してきたわけです。

最初は、人間の内臓についても定かではなかった。それがいまでは、内臓、筋肉組織、神経組織、毛細血管に至る各組織はもちろん、その基本をなす細胞

も克明に分析されています。人間生命の「色形に顕れたる」部分の情報はもちろん、性格的なものの情報もすべて、この細胞のなかにある遺伝子がもっており、それがどういう仕組みになっているか、ということもいまではかなり明確になってきているわけです。DNA（デオキシリボ核酸）、RNA^(注15)（リボ核酸）を見いだした科学は、人間生命の研究に飛躍的な発展をもたらし、いまや「分子」の単位で生命を探究しようとしています。この「覽て別つ」という見方は、生命の表相部分であるというのが如是相の考え方になるわけですね。

池田　そうです。したがって精神的な部分にみえるものでも、分析され、色形に顕れたものは如是相といわざるをえない。たとえば、脳波の波形などはやはり如是相となる。その奥にある精神とか心そのものは、色形ではないけれども――。この如是相に対し、内面の性質、精神、知恵、性分等を包含した内容のものが「如是性」です。

――『十如是事』には「如是性とは我が心性を云うなり」とあり、『一念三千理事』には「如是性は心なり玄二に云く性以て内に拠る自分改めず」とあ

ります。この「自分改めず」ということですが、つぎのように考えられると思います。精神とか心の動きは、刻々と変化していきませんが、その変化の仕方を見ていきますと、人によってそれぞれ違う一定のパターンといったものがあるのではないのでしょうか。では、その型とかパターンをつくりだしているのは何か、というと、その人自身のもつ性分といってもいいし、また個性、個別性も入りますが、こういったものになると思います。性分、特質、個性、個別性自体は変わることがないし、また変わったとすればその人ではなくなるということにもなってしまう。人間の根性がなかなか改まらないというのも、このことと通じるような気がします。

池田　まとめてみると、この「自分改めず」というのは、如是性全体としての傾向性をさすと考えてよいのではないだろうか。それから「自分改めず」というのは、根性や性格が改まらないということとはすこし違うのではないでしようか。根性や性格だってうんと変わるものです。子供の心と成人してからとは違うし、何かの事件に遭遇することを境に、性格、思考のパターンまでコ

ロツと変わってしまったことだつてある。しかし、それは性格がまったく変わつたというのではなく、その奥にある本然のもの、違ったあらわれ方であるということ。それを、「自分改めず」と表現したのではないだろうか。生命の内奥に秘められた根本的な性分というものは、その人自身が本然的にもっているものであり、それは変わることがない。もちろん、この本然的な如是性といても、本質我そのものではないと思う。あえていえば、本質我にそなわつた性分とか個性とか知恵の光りなどをさすのだろうね。

——このような如是相と如是性の奥にある生命の統一的主体が「如是体」ということになりますね。生命の本質といつてもよいと思います。

——同じく『十如是事』と『一念三千理事』の文を引用しますと「如是体とは我が此の身体なり」「如是体は身と心となり、玄二に云く主質を名^なけて体となす」とあります。

——ここで「我が此の身体なり」とあるのは、肉体ではなく生命それ自体を指すことは、三諦論のところでも触れたとおりですが、この「身体」という

表現はじつに示唆に富しんでいると思うのです。身体しの「体」とは本質という意味です。自身の本質こそ如是体なのです。身体しという表現のなかに、肉体だけでは何か含みきれないものをあらわそうとしていたのではないでしょう。身体それ自体が、目に見える肉体だけでは終わらない、もつと深みと広さのあるものだという感覚でしょう。天台大師の『法華玄義』の「主質」という説明がそれを裏付けているようです。

池田 「身体」の「体」ということは、たしかに本体、本質という意味だと思ふね。この本体というものが、自分自身を離れてあるのではない、生命のなかに厳然と実在しているものだ、と示したことが、「身体」の意味だろうか。「如是体は身と心となり」とあるのも、身と心というのは、如是体という生命の統一的主体から、現実到一个の形ある生命と顕在したときに、身と心というものになるということで、身と心の二つを合わせて、つまり如是相と如是性を足し算したものが如是体ということではないのです。この生命の統一的主体は、このように身と心の奥にある存在でありながら、しかも身と心の二に即してい

る。つまり、それを離れては見いだせない。ただ、身と心とが、それぞれ独立し、バラバラに無統一に存在するのではなく、如是体という原点から出発しているのだということを発見したところに、仏法の見識があるということでしょう。

生命の機能——力・作・因・縁・果・報・本末究竟等

——いままでの如是相、如是性、如是体は、どちらかというところ、すでに来た問題ですが、以下の力、作、因、縁、果、報となると、生命が一瞬一瞬躍動し、変容を遂^とげていくさまを、生き生きと映し出した原理として、生命を動的にとらえる面白さがあります。ところで、『一念三千理事』の「如是力」は身と心となり、止に云く力は堪忍^{かんにん}を用となす」という説明は、如是体と少し似かよっているような気がします。——ここで「止」とは、天台大師の『摩訶止観』のことですね、以後も同様の使い方をしていきますが……。

池田 「如是力」とは、生命に内在する力の発動をいう。もちろん、ここでいう力とは、生命にそなわった総合的な力であり、相・性・体をそなえた生命

のもつ力の発動性をいいます。したがって、いわゆる力もちという意味の力には限定されないでしょう。色心両面にわたって作用するものであり、そこから「身と心となり」という表現になったのでしよう。同じように「堪忍かんにんを用となす」とは、堪忍という言葉が、内から支えてたもつ意味を含んでいるから、生命の内から外に向けて放たれていく力用といってよい。生命の力の発動性が如是力と考えられるね。

——そうしますと、日寛上人の『三重秘伝抄』にある「如是力とは十界各の作なすべき所の功能くわうのうなり」とあるのも、生命の行為能力として如是力をとらえているわけですね。物理の力学でいきますと、力というのは他から与えられるものもあり、物質そのもののなかから発散されるものとは別の次元で扱っているようですが、生命論においては、外界からの力は、如是力としてとらえるよりも、むしろ縁として把握し、如是力はいくまでもその人の生命の内部にたたれたエネルギーとして説明されているわけですね。

——身体的エネルギー、いいかえれば、これは物理・化学的なエネルギー

としても把握できるわけですが、このエネルギーと、心的エネルギーが如是力の内容であるといえるわけですが、これを拡大して考えるならば、たとえば社会を一つの生命体としてとらえれば、そこに働く経済的な力とか、権力なども如是力の範囲に含まれてきますね。

池田 それは、生命という概念を社会という次元にまで拡大して考えてもいえるのだけれども、そのような経済力、政治力、また学問の力を生み出すのは、個々の生命に潜む能動的エネルギーであることも疑いない。ひとくちに心的エネルギーといっても、その内容は千差万別であり、生きる力、真理を見通す力、人を救っていく慈悲の力、愛する力などがあるが、そうした各種の力は、内在する生命の発動性の進化発展と考えられる。たとえば、如是力と十界との関係をのべると、地獄界においては、発動性はほとんど消失している。もしそこに如是力を認めるとすれば、生をささえ創造する方向へではなく、逆に生を破壊する力、死への衝動ということになるでしょう。餓鬼界や畜生界になれば、本能的欲望として顕現する生理的なエネルギーがおもに関係しているだろう。

——修羅界の場合は、利己的な自我に使われる本能的欲望とか、権力欲などが如是力としてあらわれる——。

池田　それが人界や天界になると、良心とか理性へと向く精神的なエネルギーが満ちてくる。二乗ではその力はますます増大して論理的な判断力や直観力などとしてあらわれてくると考えられます。菩薩界や仏界へ至ると、慈悲の力が前面にあらわれてくるのです。

このように、如是力を、十界という生命状態で考えてみるならば、地獄界から仏界へ向かう過程において、発動性は量的にはもちろん、質的にも増大していくことがわかる。物理的もしくは肉体的なエネルギーだけに支配されていた状態から、社会的な力、精神的・心的エネルギーへと高まっていくのです。したがって、如是力の内容といっても多種多様であり、本能的、生理的な如是力から、いかにして慈悲の如是力へと昇華させていくかが最大の課題となってくる。

——逆にいえば、発動性、能動性のもつとも昇華され、増大された如是力は、慈悲であるともいえますね。むろん、その慈悲には、前提として英知が含

まれています。また、慈悲というのは、心的なエネルギーだけを意味するのではなく、九界において見いだされるすべての如是力を含み、これらを「拔苦与楽」という方向にみごとに使っていく。人びとの苦を抜き樂を与えるという作業は、量的にも質的にも高度な如是力の顕現を必要とするし、最高の発動性であり、人間としての価値の最たるものを顕現していくことになりますね――。

――この如是力に含まれているエネルギーが、ただちに外界にあらわれてくるのが「如是作」になりますね。『三重秘伝抄』には「三業を運動し善惡の所作を行ずるなり」とあり、『一念三千理事』には「如是作は身と心となり、止に云く建立を作と名く」とあります。三業とは身業、口業、意業であり、身口意を動かして善惡の作用をしていくのが如是作であるということですね。

池田 如是力が発動性であるのに対して、如是作は、その影響性をいうと考えられます。したがって如是力と如是作は互いに密着している。でも、平行したものであるとは、かならずしもいえないでしょう。力が大きくても作用が微々たるものでしかない場合もあれば、逆に小さい力のようにみえても、大き

な作用をもたらすことがある。それは、力のもっていた性質が、外界との対応のなかで変化してしまい、大きな作用になったり、小さな作用になったりするからでしょう。

——如是作も如是力と同じように、身と心の両面にわたるといふのはよく理解できます。万物の現象世界にのみ影響を与えるのではなく、人間生命の内奥にまで影響を与えていくわけですね。

池田 天台大師の『摩訶止観』に「建立を作と名く」とあるのも、如是作が作用であり影響性である以上、そこになんらかの価値を生みだしていくからです。もっとも価値といっても、そこには正価値も反価値も含むわけだから、如是作が起こっては困る反価値の場合もあるけれども——。

さらに、如是力と如是作とを比較してみると、如是力は顕在する生命の起爆力となっていてエネルギーで、いわば冥伏の状態と考えてよい。如是力は、つねに具体的に発現する前の段階であると考えられる。それが具体的にあらわれるのが如是作です。先ほど十界それぞれにわたって如是力を考えたが、それぞ

れの具体的なあらわれを考えれば如是作になる。

——如是作の「作」という言葉は、物理学では作用にあたりますが、作用には正反二つの側面があります。外界からの作用に対して内から起こるのは反作用ですし、こちらから働きかければ、かならず他からの反作用を受ける。この作用、反作用の関連でいっさいの運動が起こっているのを説明する立場に立てば、私たちの如是作は、外界の縁に対して反作用としての仕事をする事としてとらえられますね。

池田 先に、如是力として、いかにその内容を昇華させることが必要かを述べたけれども、如是作という観点に立てば、その昇華した如是力を、こんどはいかに効率よく、また増幅して、顕現していくか、そこところがポイントになるようだ。

——そこで、いよいよ因・縁・果・報に入っていくわけですが、如是力と如是作が生命のもつ「力」の側面、いわば空間的な要素を含んでいるとすれば、この因・縁・果・報は時間的な側面を含んでいるわけです。もちろんここで述

べる因果は、世間一般でいう原因結果とは趣を異にしますが――。まず「如是因」については「如是因は心なり、止に云く因とは果を招くを因と為す亦名けて業となす」（『一念三千理事』）後に起す所の善惡の念は前の善惡の念に由る、故に前念は習因、即ち如是因なり、後念は習果、即ち如是果なり」（『三重秘伝抄』）とあります。

池田 この因とのちにあげる「如是果」は、私たちが一般にとらえている空間的、あるいは延長的なものとしての因果ではないね。生命に内在する因果となる。人間の内奥に、空の状態で存在するものだといってもいいでしょう。

――医学においても原因と結果ということとはよく使われます。ある人が病気になる、さまざまな要素が入り混じってくる。それは、ノイローゼであるとか、肺結核であるとかというように表現するわけです。ところがこういう診断をつけても、さて原因はとみると、さまざまな要素が入り混じってくる。

たとえば、ロイマチスの原因はざっと三十種類にもなるといいます。また、ある感染症をおこしたとします。つまり、細菌などの感染によることが明瞭で

あるとします。では原因はその細菌であるかということ、そう簡単には決められない。同じように細菌が侵入してきても病気になる人もいる。極端にいえば、一つの疾患にも生命内外の考えうるすべての要素が関連しているともいえるわけです。

——物理になりますと、人体とは違いますから、比較的簡単です。物の運動を観察すれば、いかなる原因によりいかなる結果が出るかは、容易に推測がつかえます。古典物理学においては、一定の原因は一定の結果をもたらすことが前提となっていたくらいです。

——それが素粒子の段階になると違うのですね。というのは素粒子の運動は(注16)一対一対応のやり方では測定できず、ハイゼンベルク以来、統計的、確率的にしか測定できないことになったからです。いわば「これらの素粒子は、だいたいこういう動き方をするであろう」と推計するしかない。

池田 そのほか、心理学においても、因果論が説かれているね。ある一つの心理状態を生み出すには、さまざまな心的原因が集まって、結果を形成してい

ると考えられます。それを無意識の世界、フロイトの場合はおおざっぱにいえば、性の衝動というか、性的エネルギーが大きな要素を占めると主張したわけだが、それを導入することによって、心理の世界に、因果関係のレールを敷いたわけです。もつともこの場合でも、一つの原因が一つの結果を生むということとは、簡単には結論できないけれども――。

――フロイトが心理というやっかいな代物に因果の糸を見つけ出したのは、たしかに偉大なことだと思います。しかし、心的な因果関係においても、原因と結果の関係は簡単に決まるのではなく、種々の条件がからみ合っているのはたしかです。J・ヤコービは『ユング心理学』という著書のなかで、「同一の原因でも、総体的な関連の如何によって、そのつど、違った意味をもつ」と述べています。それに、もちろん人間には自由意思というものがそなわっていますから、心理学的な因果のレールはあっても、人間心理の自由度はかなり高いといわねばならないようです。

池田 これらの因果に対して、仏法の因果は生命に内在する因果だから、一

個の生命体のなかに、因と果を見つけ出していくことになる。『心地観經』^(注17)の「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」という言葉は有名だけれども、この因果もちろん、一人の生命のなかにひそむ因果です。過去に、一個の生命に植えつけられた因が、現在、果となつてあらわれてくる。と同じように、その現在の一瞬の生命が、そのまま未来の生命内在の果を形成しているというのです。

しかも、この因というのは、現在と切り離された因ではない。現在の一瞬に因と果が含まれるのです。表面にあらわれた事象をみれば、なるほど因と果のあいだには時間的空白というか、隔たりが横たわっている。しかし、生命に内在する因果を見つめた場合には、過去のすべての因と考えられるものが一瞬に凝縮して、しかもそれが途絶えることなく、連続して持たれていくのです。その状態は空の状態であり「如是因は心なり」とあるのはそのことなのです。しかもこの因果の考え方を導入することによって、一個の生命における因果の一貫性を説いたところに、仏法の独自の着想がある。生命のなかに一貫した因果

を考えることは、現在みずからの生命がうけている果を、自己の生命自体が築いた因によるものであることを認識することを教えるとともに、未来の果を变革するためには、現在の自己自身を的確に見つめ、その変革を行なっていくことが直道であることをも教えている。仏法が人間革命の宗教であるというのは、実にこの因果の考え方があるからだ、ともいえるのではないだろうか。

——科学の世界における因果は、いかにすればこうなるのかという「経路」とか「過程」を追っているのに対し、仏法の因果は「理由」とか「意味」を追っているのだともいえますね。つまり、How（どのように）ではなく、Why（なぜ）を究明している——と。

池田 しかも、この両者の因果は、次元を異にしていながら、まったく無関係なのではない。色法の世界の因果は、あくまでも科学的な因果の法則にしたがっているでしょう。しかし、その奥にある心法の領域に、その現象を起こす因果を探り当てたのが仏法なのです。先ほど少しあげた心理学においては、精神とか心の領域を追っているようにみえる。しかし、その研究対象はあくまで

も精神現象です。むろん、無意識の層にまで入りこんではいるが、そこではすでに、科学的な因果論が成立しない場合も多い。ゆえに、空としての心自体を解明しているわけではない。もし心自体に入りこんでいくなら、それまで研究の尺度だった因果論は崩壊していくにちがいない。なぜなら科学的因果論は時空の尺度をもっているのに対して、心の世界はそうした時空次元を超えた「空」の領域だからです。そこへ入れば、仏法の因果しかないのです。

——さて、つぎの「如是縁」ですが、これは読んで字のごとく外界の助縁ですね。生命活動を行なわしめる潤滑油のような存在だと考えられます。外界といっても、生命主体と切り離された存在ではなく、両者は密接不可分の関係にあるわけですが——。

——この「縁」ということですが、二面性をもっていると思うのです。すなわち外界から働きかける助縁であるとともに、その縁を生命がどう取り入れていくか、そうした側面もあるのではないでしょうか。生命自体がその内部に、外界を縁とするという働きをもっている。もし、外界の助縁を積極的、主体的

に取り入れるという働きがなかったならば、外界と主体の生命との間は、まったく隔絶したものになってしまふ。外界の助縁を、みずからの生命と密接不可分なものとして、その内奥に組み込んでいく働きがあつてこそ、如是縁が、生命のなかに含まれた存在であるということができないではないでしょうか。

池田 縁し方の違いが、一見、ある生命とは独立した運動法則にしたがつて影響してくるように見える助縁の意味を、まったく違ったものとして変えてしまふことにもなるのです。ある意味では、たしかに外界の助縁は、生命主体とは独立したかたちで影響を与えてくる。地獄の縁もあれば、天界の縁もある。声聞界の縁もあろう。しかし縁する仕方が違っているから、人それぞれ内奥に刻み込まれる境涯は違ったものになるのです。

たとえば不治の病い、それは癌でもいいのだが、あくまで仮定の話ですが、その宣告を医師から受けたとしよう。癌の宣告の是非はどうぞん別の話です。さて、その宣告は、あらゆる生命体にとって、たしかに地獄の縁になりうるのです。それによつてたいいの人、地獄の境涯に陥る。しかし、自己の内奥

の生命が鍊磨され、昇華されている人にとっては、そうした助縁への「縁する仕方」が違ったものになってくる。それを克服しよう、みずからの変革の試練として受け止めようとする。そうするならば、生に蓄積される因も変わってくるのです。したがって、果も変わる。人間変革の方程式がそこで顕現されることになる。私たちの生命は、このようにあらゆる縁に囲まれ、それと接触しつつ、そのかわりのなかから独自の因果を築いていくといってもよいでしょう。

——そこでつぎの「如是果」ですが、これは如是因と一対になっていて、先に少し触れたわけですが、この因と果が一瞬の生命に含まれているとしますと、どのような差があるのでしょいか。

池田 『三重秘伝抄』に「前念・後念」あるいは「習因・習果」と立て分けてありますが、これは時間的な隔たりを指すものではない。一つの生命の活動を引き起こす方向性を見つめれば因であり、一瞬の生命がのちのちの生の傾向性を示しているのとらえれば果といってよい。いずれにしても、生命の内奥に空の状態でそなわっているのだから、両者に時間的な差異はなく、その意味で

わけです。ですから因果異時といいますが、報というのは瞬時にあらわれるとはかぎらない。しかし、ものの変化というのは、不連続のようにみえても、マクロの世界では、よく観察すれば、連続的なものです。素粒子などの世界ではそうはいきませんが――。したがって因果異時といっても連続的な変化なのだから、その瞬間に、報としての変化もあらわれているのではないかと思えるのですが――。

池田 如是報も一瞬の生命に含まれる以上、そう考えるのが正しいだろうね。ただ観察の仕方によって、それが精密に把握できないだけだろう。人間の身長が子供から大人になるにしたがって伸びるのも、毎日毎日と比較していてもわからないが、一年経ち、二年経ち、そして数年経つとまったく比較にならないほど違ってしまふ。しかし、それは、大げさにいえば一秒一秒ごとの連続的な変化の積み重ねだから、如是報というのは、瞬間瞬間の蓄積のうえに、時間的経過を経てあらわれてくるものと考えられる。総括していえば、「因果」は心法で「報」は色法だが、色心不二であるがゆえに、「因果」は即「報」になる。

つまり「因果」のあるところかならず「報」がある。「報」は「因果」の結果としてあらわれるのです。

——そこで、冒頭にあげた例を考えてみますと、戦争で負傷した青年の如是相は、ほとんど用をなさないほど傷つけられているわけです。そして如是性も、最初は活動していないのと同じほど鈍かったと考えられます。如是体はその青年自身の生命であり、外見は変わっても主質そのものは変わらない。こうした相性体の青年のもつ如是力はどうだったのでしょうか。

池田 肉体的な部分に関するかぎりには、いわば極限状態に置かれていたと考えられる。能動性・主動性をたもつことが困難だったからね。しかし、みずからの生の証し^{あか}を得たいという激しい衝動は、かえって常人よりも強かったのではないだろうか。したがって、わが身が受け入れることができるわずかな如是縁も、最大限の増幅をして受け止め、その反作用としての如是作があらわれていったのでしよう。そこに働く因果は激しい変革の渦を巻き起こし、地獄・餓鬼の底辺の生命から、最後は六道を出るところまでいったのではないだろうか。

人間生命のこうした激しい変容をとらえるには、単に靜的に生命を見つめるだけではなく、外界からの刺激、それへの反応の仕方、その生命独自の因果等を見きわめないと、把握しきれないものです。そういった意味で十如是はきわめて合理的な生命観だね。

——ちよつと話がずれるかもしれませんが、高校のときに習った数学で、曲線の傾斜を求めるときには、微分という方法を用いました。これは、ある点を通る曲線の近傍を調べ、いかなる傾きで入り、いかなる傾きで出ていくかを知らることによって、曲線自体の傾きを知ろうとしたものですが、一つの生命自体が、どのような全体像をもっているかを知るには、一瞬の生命の実体を詳しく分析する必要があるのだと思います。これになぞらえるならば、相・性・体は点であり、力・作・因・縁・果・報はこの一瞬の生命の多角的な分析になる。それを兼ねそなえて、はじめて生命がどのような傾きをもつて運動していくかを知ることができるのですね。

——物理においても、物体の運動を知るには、物体の重さと、速度を知ら

なければなりません。それによって運動を分析できる。同じ原理だと思えます。

池田 相・性・体、それに力・作・因・縁・果・報は、そうした脈動する生命を的確にとらえているのだが、これらの如是を統一した原理がある。それが第十番目の「如是本末究竟等」です。「初めの相を本となし、後の報を末と為し、此の本末其の体究つて中道実相なるを本末究竟等と云うなり」（『三重秘伝抄』）とあるとおりです。一瞬の生命に九つの如是がことごとく具備し、しかも一貫している。地獄界にも修羅界にも、二乗にも菩薩・仏にも、一貫した九つの如是をそなえている。どれ一つが欠けても、生命の真実の姿とはいえない。はじめの相から最後の報に至るまで、一貫した統一的な姿を示す——この原理を本末究竟等というのです。これが中道実相、すなわち生命の本然の姿である。しかも、一瞬の生命がそなえている九如是が、そのままつぎの如是へと移っていく。如是報がつぎの如是相・性・体となり、さらに、力・作・因・縁・果・報が形づくられていく。こうした連鎖の運動の実体を、十如是論は見通しているのです。だからこの「如是本末究竟等」がなければ、十如是は完結しないと

もいえるのです。

九如是というのは瞬間瞬間、十界のそれぞれを顕現しつつ、動いている生命を分析的に把握したものです。しかし仏法は、物を分析的に見つつも、つねに全体観として統一体としてとらえなおしている。十如是をいったんはバラバラに説いたようにみえながら、実はそうではなく、みごとに連関性、統一性をもった主体であることを明らかにしたのです。十界論においても、十界がバラバラに説かれていたようでありながら、それを十界互具として統一しなおしている。仏法の偉大さは、つねに分析と統一をくり返しながら、生命を全体的に把握している点にあるといたい。

最後に、この「如是本末究竟等」の原理を敷衍ふたんするならば、はじめの相を本とし、終わりの報を末として、それが究竟して等しいのだから、相——すなわち現実にあらわれた姿を通して、それがもたらす報まで知ることができるといふことです。日蓮大聖人の『聖人知三世事』に「近きを以て遠きを推し現を以て当を知る如是相乃至本末究竟等是なり」とあるのがそれです。このなかで、

「現」とは現在一瞬の生命であり、「当」とは未来における生命状態をさします。
この原理をもつて三世を見通していくのが、仏法の原理を会得した悟達者・仏
（注18）
なのです。これは一個の生命にかぎらず、社会・国土という単位でもあてはま
るのではないだろうか。社会という生命体が、いかなる運動法則にしたがい、
いかなる報を顕現するか。それは、生命の全体像としての相・性・体を的確に
把握することによって、知ることができるのだと思う。仏法の十如是論は、そ
こまで説いた卓越した原理だということを示唆しておきたい。

個性化の原理

「五陰世間」について

池田 本書の「人間らしい生き方」の章から始まった、仏法理念を中核にすえての生命探索も、ようやく、一つの締めくくりの段階をむかえたようだね。

——「十界論」からはじまって、「十界互具論」へとつづき、それから「十如是論」へと発展してきました。この三つの法則というか、原理みたいなものをくみあわせますと、人間生命を中心にしてですが、生命というものの全体像が、かなり鮮明にうかびあがってくるようです。

池田 そこで、本章では、少し、重複する個所がでてくるかもしれないが、これまでのことをまとめながら、また、それを基盤にして、仏法が説明している生命哲理をさらに深く探ってみることにしよう。

さて、十界というのは、生命の「我」の実感を基準にして、その生命体のあらわす境涯を分類したものと考えられる。別のみかたをすれば、生命の変化相ともいうことができる。私たちの生命も、一瞬をとらえれば、必ず十界のうち、いずれかの境涯をあらわしていて、その生命の内奥には「空」の状態として、他のすべての境涯を包含している。いいかえれば、十界のすべてに、他の十界をそなえているということであり、それを十界互具の方程式と名づけてきた。

——十界互具のことを百界ともいいますが——。

池田 数量的に表現すれば、たしかに百界になる。十界のそれぞれに、十界をそなえているのですからね。だが、百界といった場合も、その意味は、十界が、一つの生命体において、融和し、一体となりながら律動しているという事実をさすことに変わりはないようです。

——この百界に十如是をくみあわせて、仏法用語では、百界千如といいあらわしています。これは、百界のすべてに十如是がそなわっているから千如是になる、といったようなことでしょうか。

池田 計算すればそのとおりだが、そういった数字が、いったい何をあらわそうとしているのかを、明らかにする必要がありそうだね。百界千如の意味するところを、一つの具体例をあげながら考えてみよう。

たとえばベトナム戦争の報道写真がここにある。戦火でもはや息もたえた幼児を、腕もおれんばかりにだきしめている母親の姿が映されている。もし、仏法の十界論を知った人が、悲しみにうちひしがれた母親の姿をみれば、身も心も、いや、生命全体が地獄の苦悶くもんにあえいでいると断言してはばからないにちがいないと思う。

——つまり、如是相も、如是性も、そして、如是体そのものも、苦悩の極致を実感しているといえますね。

池田 では、その女性が、この世のものともおもわれぬ地獄の責めを味わわなければならないのは、どうしてだろうか。

——それは、子供を殺されたからです。

池田 流れ弾だまにあたったか、大量殺りくのとばっちりをうけたか、そのあた

りはさだかでないにしても、幼児の死が、母の嘆きを呼びおこしたことだけは明らかです。つまり、幼な児の死が「縁」となって、一人の女性の生命の奥から苦悶の「因」が呼びさまされ、その生命のもっている「力」が「作」となつて働き、そこに、生死流転の「果報」を生みだしていく。しかもそれらが、一瞬の生命に「本末究竟等」としてくみこまれ、たがいに関連し合いつつも、融合して、苦しみの生をおりなしていく。少なくとも、一枚の写真から、これだけのことは読みとれるのではないでしようか。

——地獄界を顕現した実例をあげられましたが、他の境涯についても同じように考察していけばよいわけですね。

池田 もし、この写真の女性が、将来、ベトナムの大地に真実の平和がおとずれて、まことに人間らしい生を享受することが可能になったとしよう。そのときには、仏界とか、菩薩界とか、人界などと、それにからみ合つた十如是の脈動を顕在化することも不可能ではないと思う。

その女性ばかりではない。すべての人に、いや、すべての生命的存在に、十

界が互具し、しかも、それに関わりあつた十如是が渾然一体となつてくみこまれている。このような事実というか、実相をさして、百界千如と表現したのだ、といつておきたい。

——そうしますと、百界千如というのは、どの生命体にもくみこまれ、また、いかなる瞬間にもみいだせる原理と考えられますね。

池田　そういった意味では、普遍性をもった原理と称していいですね。

——ところが、現実の私たちの目前にある生命体は、どれ一つとして同じ機構をもったり、働きを示すものはありません。ぜんぶ、それぞれ独自の個性をもち、特質を示しています。たとえば、ベトナムの女性と同じように、ある瞬間、地獄界をあらわしている生命体を考えただけでも、ほとんど無限に近い差別の姿を示しています。

職業柄、どうしても直面するのは疾病しつびですが、急激な胃痛とか、腹痛におそわれて、七転八倒している青年がいるとします。この青年の、この瞬間の境涯は、まぎれもなく地獄界で、それに関連した十如是のすべてが働いています。

このあたりまでは、十界互具論と十如是論をくみあわせますと、明瞭にえがきだすことができます。

でも、たとえば、これだけのことが明らかになったとしても、子を失った母親と、疾病に責められる青年の具体的な相違点は、どこにもうかびあがっていません。どちらの生命も、苦しみにあえぎ、地獄の「因果」がひきずりだされ、生命の力がほとんど失われてしまっている、などといった共通の面を説明できるだけです。にもかかわらず、この二人には、ちよつと考えただけでも、男と女の違いがある。苦しみの内容がまったくことなっている。まあ、こういった事実気づくわけです。

こうして考えてきますと、百界千如が生命の普遍的な原理であるにしても、ただ、それだけでは、生命の全体像をとらえきれていないのではないか、と思われてくるのです。少なくとも、個々の生命体の間にみいだされる相違点というか、差別の姿を解明するような一つの原理が不足している――。

池田　そのところが本章のポイントになる。原理的にいうと、どの生命も

百界千如をそなえているから無差別と考えられる。しかし、この宇宙にあらわれでた生命像は、たしかに、無限の差別相をみせています。

ここで、少し注意しておきたいのは、私たちが、この生命論で使う「差別」という言葉ですが、これは、あくまで、個々の生命体にそなわった個性とか、特質にもとづくものであつて、たとえば、社会的な差別観とか、人種差別などという場合の差別とは、言葉は同じであつても、その内容は異なっている。私たちの使う場合には、生命そのものに本然的にそなわった差別であり、個々の生命体の間の特質を示すような相違点とでもいったもののことです。

さて、本筋にもどつて、私たちの生命は、普遍的な原理を含みながらも、現実世界においては、それぞれの個性に立脚した差別の姿を示している。この事実には、実に盲目であることは許されまい。とすると、現実世界でくりひろげられる、ありとあらゆる生命活動の間にある差別相は、どういふところから生ずるのか。つまり、原理的には、まったく無差別の實在である生命は、いかなる法則、いかなる方程式にのつとつて、個性豊かな事実存在へとあらわれるのであろう

か——。私は、百界千如という普遍の法則が、個々の生命体における差別相へと顕在化し、開かれていく様相を解きあかすための原理を「個性化の原理」と名づけたと思う。

——つまり、個性化の原理にのっとり、あらゆる生命的存在における個性が顕現し、特質が開花し、種々の相違点が生まれるというわけですね。

池田　そこで、この原理というか、法則をみいだすための手がかりとして、先ほどから話題にのぼっている二つの実例を、さらに考察してみよう。

さて、こんどは、私のほうからの質問だが、死せるわが子をだきしめた母親と、ベッドのうえで苦吟^{くぎん}する若者とは、具体的な面で、どういうちがいが目につくのでしょうか。

——生理学的には男性と女性です。もっと一般化しますと、肉体自体が一人一人ちがいますから——。

池田　仏法用語を使うと、色心不二という場合の「色」になるね。これは、人間の生命でも、草木でも、石ころでも、すべてちがっています。いいかえれ

ば、独自の特徴をえがきだしている。

——色心不二の「心」のほうも、その内容をさぐりますと、明瞭な差異があります。たとえば母親ですが、彼女の心は、幼児の死を痛いほど感じとっています。だからこそ、その女性のたえようもない悲しみがおとずれるのです。

池田　その後の、母親の心を、もう少し描写してみよう。悲しみとともに、最愛の子供のすべてが、母の生命にやきついていく。あどけない顔、かわいい小さな手、いまはすでにとじられた眼など、死せるわが子の姿は、そのまま母の心に受け入れられていると思われる。すると、ほんの一瞬前までのほほえみがうかびあがり、父と子と母との楽しい過去の思い出がよみがえってくるであろう。そして、また、父を戦死させ、子を失っても生きなければならぬ未来の苦痛が、その女性の心にあふれているにちがいあるまい。だが、たとえば、わが子の息がたえても、愛と力のつづくかぎり、ひとときでも長く、わが胸にだきとっていたいと決意するのも、人間本来の母性愛ではなからうか。

——その決意が、永劫にわたって、この子をはなすまいとでもしているよ

うな、一枚の写真に結実しているのですね。

池田　これで、母親の心を分析したわけだが、同じような観点から、病に倒れた若者の場合を考えてみることにしたい。

——まず、青年は、胃とか、腹部が痛むという事実を了解しています。いや、痛みがおそってくるのは、胃の上部であるとか、もう少し右のほうだとか、自分なりに分別し、考えているといったほうが適切でしょう。それから、青年の心は、その痛みをぜんぶそのまま受け入れます。この場合は、外界ではなく、若者の生命の「我」自体が、自己の肉体の変化を感じとっているのです。

池田　そうすると、青年の心に、じつに多様な想いが去来するだろうね。呼びにいった医師はもう到着するところだろうとか、胃壁が大部ただれているかもしれないとか、もしかすると胃痛ではないかとか、そういったことが、とめどもなく若者の心をかけめぐるのであろう。その想いが、もう少しの辛抱だから、できるだけ痛みを少なくするため、身体を極度にまげていようという意志をひきおこし、青年の筋肉を動かしていく。

——激痛をやわらげるための七転八倒ですね。こうして、二つの実例をならべてみますと、そのちがいははっきりするようです。同じ地獄の境涯を顯現しているといっても、その内容はずいぶんちがうものですね。

池田　だが、もう少し精密に、この二つの例を比較してみると、たしかに生命活動の内容はまったくことなっています。にもかかわらず、心の働きの種類というか、活動性の性質には、共通の要素が発見できるのではないでしょうか。具体的にいうと、母親にも、若者にも、まことに人間らしい分別の心がある。自分の直面する事柄とか、対象の意味するところを、判断し、思考する働きがみいだされます。

それから、わが子の姿であれ、自己の肉体であれ、生命の「我」の対象とするものを受け入れる働きがある、と同時に、さまざまな想いをえがき、その想いが、意志を通して身体の行動につながっていく。こういった生命の活動性を、仏法用語で、きわめて端的に表現すると、最初が「識」、そのつぎが「受」、それから「想」と「行」の働きがあり、肉体的行動が「色」ということになりま

しよう。この、五つの、私たちにとって主要な活動性を、仏法では「五陰」と称しているのです。

——ふつう五陰といいますと、色、受、想、行、識というように表現してありますが——。

池田 色心不二の原理を適用すると、五陰の色はとうぜん色法の世界をさし、受と想と行と識は心法の活動性と考えられる。この場合、色法の世界は、心法の働きと「不二」の関係にある。だから、色は、他の四陰の前提でもあり、しかも、行陰によってひきおこされる性質をもっていると考えられます。

また、識陰についても、分別し判断する心は、受とか、想とか、行とかの起点ともなり、原動力であるとともに、これらの心の働きをまとめあげる働きをも有している。わかりやすくいうと、識陰を中心にして、他の心の活動がおりなされているのです。

——原動力と考えると、識陰から、受、想、行とうつり、その人の生命活動を生命の内奥からささえ、まとめあげている役割りに焦点をあてると、五陰

のなかで、一番最後に記したほうがわかりやすい、ということですね。

池田 このように、五陰にしても、ただ平面的に並んでいるのではなく、むしろ、立体的にくみあわされていると考えなければならぬようです。少しむずかしくなってきたようだが、とりあえず、これだけのことを確認しあつたうえで、仏法にとかれる五陰の、明確な定義を、日蓮大聖人の御書のなかからさがりだしてみることになしう。

——『一念三千理事』にはつぎのようにあります。読みあげてみますと、
「五陰とは新訳には五蘊おんと云うなり陰とは聚集じゅしゅうの義なり一に色陰・五色是なり・二に受陰・領納是なり・三に想陰・俱舍に云く想は像を取るを体と為すと文・四に行陰造作ぎょうおんぞうさ是行なり・五の識陰・了判是れ識なり・止の五に婆沙ばしゃを引いて云く識・先ず了別し・次に受は領納し・想そうは相貌そうぼうを取り・行は違徙いじゆうを起し・色は行に由つて感ず」ということになります。

池田 この御文には、きわめて深い種々の内容がこめられているが、私たちの、いままでの考察を整理する意味合いから、竜樹菩薩の『十住毘婆沙論じゅうじゆうびはしゃろん』(注19)を

中心にして、五陰のそれぞれを定義してみよう。

——「止の五に婆沙を引いて云く」とあるところですね。

池田 生命活動の流れに即しての五陰の解明です。「識・先ず了別し」とは、思慮し、分別し、判断する心をあらわしています。私たちは、識陰によって、対象とするものの「意味」をくみとることができる。むろん、この識には、無意識の層も含めて、宇宙生命の源流にまで達する広大な心の領域がくみこまれていると思われる。だから、識陰の胎動とともに、対象を受け入れるという心が活動をはじめめるのです。

——受陰とは「領納」と記されています。

池田 「受け納める」とか「受け入れる」ということです。対象を心にかちりとうけとめる——。

——想陰については、『俱舍論』^(注20)には「像を取るを体と為す」とあり、竜樹菩薩は「相貌を取り」といっています。

池田 想いをえがくことだと思う。外界の事物や人間の姿などの、うつしと

れた輪郭がえがかれることもある。しかし、人の心の想像力は、対象を中心にしながらも、それにとどまらず、時間と空間をこえて、あらゆる領域に広がっていくでしょう。古い時代の回想もあれば、未来の理想像をえがくこともある。単なる空想に近いものまで、胸中をいろどる場合もある。でも、どのような像をとるにしても、その想陰から、では、それに対してどう行動するかという意識、行動への発動性を生みだしていく。これが「行陰造作是行なり」と記された意味です。

——竜樹菩薩は「行は違^{いじゆう}徒を起し」とのべていますが、どういう事実をさすのでしょうか。

池田 対象に積極的にむかっていくこともあるし、また逆に、退いていくと
いうか、逃げ腰になる場合もありえます。たとえば、母親が、わが子をだきしめるのは前者であり、青年が激痛からのがれるために、身体をエビのようにまげるのは後者に相当すると考えられます。

——同じく竜樹菩薩の言葉ですが「色は行に由って感ず」とあるのは、ど

のような働きを示しているのでしょうか。

池田 身体と心の関連をとらえたおもしろい表現です。私たちの決意とか、意志は、身体の上に表現される。また肉体的なものに対する感覚は、行陰つまり生命のもつ発動性がそこに反映されてこそ実感することができなのです。この事実を理解するために、まったく架空のことだが、逆の場合を考えてみてほしい。つまり、行動をおこそうという心の働きがなければ、肉体の働きとか、存在さえも感じることはできないでしょう。

——たとえば、わが子をはなしたくないという強い意志が、幼児をだきしめる行為をひきおこすということですね。もし、母の心に、子供をだきたいとする決意がなければ、腕に力などこもりませんし、ふつうは、腕の存在さえ意識することもないと思われます。

池田 身体のエネルギの充満と、それを呼びおこす心の働きは、相互に関連しあいつつ、一つの生命現象をおこしているのがありのままの真実だろうね。もっと正確に表現すると、私たちの生命自体として顕現する生命エネルギー

一の、心的な働きが行陰となり、身体的なエネルギーが色陰となる。

——識陰とか、受陰とか、想陰もまた、心的エネルギーのあらわれですから、行陰を含めますと、このような心の働きは、それ自体が、色陰としての身体之力と「不二」の関係にあると結論できます。したがって、行陰そのものに、色陰を感じるという私たちの実感自体が、色心は「不二」であるとの明瞭な証拠となりうるのですね。

池田 色心不二の、実感を通しての証明と考えてよいです。まあ、このあたりで、五陰の関連性と定義が終わったわけですが、この五陰という色心の働きのうえに、人それぞれによって差別が生じてくることを、仏法では「五陰世間」と称しています。この場合の「世間」とは『三重秘伝抄』に「世間とは即ち是れ差別の義なり」とあるように、生命本然の差別という意味です。

さて、たしかに、ベトナムの母親にも、ベッドのうえの青年にも、またすべての人びとの生命にも、五陰という活動性はそなわっている。だが、その五陰を使つてえがきだす生命内容は千差万別であり、明らかな個性をみとめること

ができます。しかも、その内容にその人独自の性格とか、特質などがにじみでているように思われる。

——いいかえますと、私たちの個性とか特徴などは、五陰の働きとして顕在化し、生命内容にもりこまれるのですね。

池田 ゆえに、私たちは、五陰という観点から各人の独自性、個別性を判別することができなのです。つまり、五陰世間は、すべての生命的存在の相違点をみぬき、判別していくための尺度であり、一つの「鏡」の役割りをはたす原理だといえましょう。

同時に、私たちの生命は、百界千如の普遍的な原理に立脚しつつも、事実存在としては、五陰のうえに差異を生じさせているのですから、五陰世間は、すべての人びとを個別化し、個性化する一つの法則と考えられます。

——私たちの生命は、五陰の差別をつくりだすという、五陰世間の法則、原理にのっとって、世界中で二つとない事実存在になりうるのですね。

衆生と国土

——五陰世間という“鏡”にてらしみますと、それこそ、千変万化の色心の活動がくりひろげられています。これらすべての五陰の働きをなす生命体をみていきますと、そこには、地獄の苦悩にそめられた五陰を働かす人びとばかりではありません。同じ色心の活動であっても、慈悲心のあふれる人もあり、知恵と勇気がみなぎっている生命もあります。こういった事実に見をむけますと、なにか、そこには、五陰世間だけではとらえきれない差別相があるような気がするのです。

池田 私たちが、自己の生命にそなわった五陰を、どのように働かすかによつて、苦しみと悲しみをひきだすこともあれば、逆に、知恵と慈愛を発動させ

る場合もある、ということですね。たしかに、種々の場合が考えられるだろうが、たとえば、苦悩にうちのめされつつも、五陰の働きがかえって苦しみをますような生命、つまり地獄から地獄へとわたり歩くような存在——それを、仏法では、端的に「地獄の衆生」と表現しています。

——十界互具論からいいますと、地獄を基底部とした人間生命ですね。

池田 十界互具という普遍的な原理が、現実には、ある一人の生命においては、地獄界を基底部とする地獄の衆生として個別化され、具体化され、事実存在としての姿をあらわすと考えられます。もし、仏界を顕現させる方途を知り、それを実践化しているならば、仏の生命をはぐくみ、基底部として定着させることも不可能ではないでしょう。

——『三重秘伝抄』には、五陰の「陰」についてつぎのように説かれています。「五陰とは色・受・想・行・識なり、云う所の陰とは正しく九界に約し善法を陰蓋するが故に陰と名づくるなり、是れは因に就いて名を得、又陰は是れ積聚なり生死重沓す故に陰と名づく、是れは果に就いて名を得たり、若し仏

界に約せば常樂重沓し慈悲おんが覆蓋するが故なり」と明記されています。九界と仏界に大別しての論述ですが、この文を読みますと、陰を、陰蓋、つまり、おおいにかくすという意味と、もう一つ、積聚、つまり、積みあつまるという意味との、二重に解釈していることがわかります。

池田　また、陰の二重の意味を、原因と結果にたてわけていますね。私たちの九界の生活、とりわけ、三悪道とか六道の生命活動は、五陰を働かせつつも、かえって、宇宙生命より発する本然的な創造のエネルギーを弱め、また、その顕在化を阻害してしまいがちです。「善法を陰蓋おんがする」とは、仏の生命をおおいかくし、生の発動性を奪い去っていくとの意味でしょう。

——色心を動かせば動かすほど、三悪道の境涯のみを強めてしまふ。自分で自分の首をしめているようなものですね。

池田　私たちの色心が、地獄界とか餓鬼界などに染まっていくにつれて、慈悲と創造の力は姿をかくし、苦悩の境涯への転落は加速されるばかりです。ちやうど、どろ沼に足をとられたようなもので、もがけばもがくほど、底しれぬ

暗黒にひきずりこまれていくのだと思う。

——そうしますと、五陰を働かすことによつて、仏界の力を阻害することが「原因」となり、苦しみが深められるという事態をひきおこすのですね。

池田 だから「生死重沓^{じゆうたう}す」とあります。生死というのは、ここでは、苦悶の生命状態をさしていると解釈しておきましょう。その「生死」が重なるというのです。いいかえると「善法陰蓋」という「原因」が「生死重沓」という「結果」を生みつづけていくのです。こうして、その人の生命に内在する苦悶の境涯が、ますます強められ、容易にぬきとれないほど、巨大な根をはるに至るでしよう。

——不幸への悪循環ですね。

池田 ここに、三悪道の衆生とか、修羅界などを基調として生死を営む人間の姿がうかびあがるのです。また、六道をめぐる人びととか、二乗界、菩薩界を基調とする生命体までも含めると「九界の衆生」の誕生と表現することもあります。

これに對して、仏の生命をはぐくむ五陰の實踐は、たとえば、少しずつであつても、人びとの生命の底流から慈悲のエネルギーをくみいだし、仏界をおおう「苦しみの煙幕」をはらいのけるにちがいあるまい。その、たえまない實踐が、次第に、惡に汚染された人びとの生命を淨め、不幸の人生から、幸福の太陽をいだいた、たくましい未來を切り開いていくのではないかと思われます。

つまり「善法陰蓋」であつた色心の機能を、「慈悲覆蓋」の五陰の活動にと変えるための實踐が「原因」となり「生死重沓」の生命流轉が、そのまま「常樂重沓」という人生行路へと開かれていくのです。瞬間ごとにくりかえされる五陰の働きを、慈悲とか、英知のエネルギーでおおうことによって、はじめて、自他の苦しみを抜き、樂という歆びにひたりつづけられる生命狀態を勝ちとることができるのではないでしょうか。

——幸福への、まことに好ましい循環ですね。

池田　そして「常樂重沓」の人生ともなれば、その人の生命には、仏界という境涯が、何ものによつても破壊されないほどの基盤として、確固たる位置を

しめるに至っているでしよう。仏界を基調として五陰を働かせながらも、その活動が、さらに、慈愛を深めていくこのような人間生命を、「仏界の衆生」と呼ぶのです。

『三重秘伝抄』に「衆生世間とは十界通じて衆生と名づくるなり、五陰仮に和合するを名づけて衆生と云うなり、仏界は是れ尊極の衆生なり、故に大論に曰く「衆生の無上なるは仏是なり」と、豈凡下に同じからんや云々」とあるとお
りです。

——「大論」とあるのは、竜樹菩薩の『大智度論』のことだと思ひますが、この文のなかに、「衆生」という言葉と「衆生世間」という言葉がでてきます。まず、「衆生」についてですが、「五陰仮に和合するを名づけて衆生と云うなり」と記されています。この意味についてお伺いしたいと思います。

池田 私たちの生命を分析的に考えれば、いちおう、五陰の和合体であり、統一体であるともみることができましよう。色法と心法という視点からとらえれば、五陰仮和合とは、色心不二ともいいなおすことができると思う。したがっ

て、人間生命のいかなる変転をみても、そこには、色心のみごとな営みがあり、五陰という活動性の発現がある。しかも、五陰の働きは、たえまなく変化しつつも、全体としての調和が失われることはない。

たとえば、私たちの身体が、物質的な循環作用を、外界との間になしとげながら、たえず変化していることはいまさら強調するまでもないことでしよう。心のほうも、識陰による対象への働きかけと、その判断、分別などに、もし、とどこおりがあつては、生命活動自体が停止してしまふでしょう。私たちの識陰は、たえまなく、対象に働きかけ、その「意味」を識別しているし、受陰の受け入れにも何らのとどこおりもありません。

—— 私たちの頭脳に去来する想いも、自分ながら感心するほど、つぎからつぎへとうかんでくるものです。

池田 その想いが、行為へとつながる。意識的に決意するときも、また、無意識的なこともあるだろうが、いずれにしても、行陰の働きがとだえることはない。

——私たちの生命において、五陰の働きは、常に、変化し、更新しているのですね。だから、五陰が「仮に」和合している——。

池田 変転をくりかえしながらも、五陰の間に少しの乱れもない。識陰を中核として心の営みがおりなされ、それと色陰は一体不二の調和のリズムをかもしだしている。ゆえに、変化するということに焦点をあてれば、五陰の統一ある共同作業は一瞬一瞬が「仮」の和合体とうつるかもしれない。いや、そう考えることも必要であり、**真実の姿**なのです。

しかし、焦点の光りを、五陰という活動性から、私たちの生命そのものにとうつすとき、色心の働きを和合させ、統一する生命主体の存在に気づくはずです。たしかに、五陰の働きそのものは、瞬時にして消え、また、うかびあがる淡い生命活動の一要素かもしれませんが、だが、生命の活動性をささえ、統合しダイナミックな律動を与える生命の主体的実在——それを、名づけて衆生というのだと思われる。そして、それぞれの衆生にそなわった生命全体の傾向性によって、仏法では、十界それぞれの衆生に分類しています。また、この事実を、

「衆生世間」と呼んでいるのです。

——「衆生世間とは十界通じて衆生と名づくるなり」の意味ですね。そうしますと、私たちの生命は、五陰の差別、つまり、五陰世間として個別化し、個性をあらわしていると同時に、生命全体としては衆生世間として区別されるわけですね。

池田 あらゆる人間生命は、五陰世間と衆生世間という二種類の差別相をもつて、現実世界に、その独自の姿をあらわしている。だが、私たちの生命の全体像を、くつきりとうかびあがらせるには、この二つの原理だけでは、まだ、不十分ではないだろうか。

——といいますと、その生命主体のおかれた環境が問題になるということでしょうか。

池田 本書第一巻の「自然のなかの人間」の章で考察したように、私たちの生命は依正不二の当体です。人間生命を正報とたてれば、環境は依報となり、しかも、正報と依報は「不二」の関係にある。この原理からすると、私たちの

生命が、普遍的な原理を内包しつつも、個性化の方程式にしたがって、次第に個別的実在になるにつれて、それとまったく同時に、私という生命主体に固有な環境が形成されるのだと考えられよう。簡単にいうと、正報と依報は、まったく同時に、その独自の姿を顕在化するということです。

したがって、ある人を取りまく依報をみれば、その生命主体の全体的な傾向性とか、特徴などが明瞭になる。正報と依報は、密接不可分に関係し、関連しあっているのですから、もし、依報というものを無視してしまつたら、衆生世間の實在自体が現実とはまったくはなれた架空の産物になってしまうのではないでしようか。

——衆生世間を中心に十界それぞれの衆生を分類することができます。この十界の衆生に相応して、やはり、十界の環境というか、依報が成り立っていると考えるべきでしようか。

池田 十界の衆生の住む所をさして、仏法では、国土世間と呼んでいます。

『三重秘伝抄』には「国土世間とは則ち十界の所居なり」とある。つまり、私

たちの住む国土にも、私たちの生命との対応のなかから、十界の差別相があらわれるということです。

——そこで、ちよつと確認ですが、私たちをとりまく環境、いいかえれば国土ですが、その国土にも十界互具とか、十如是の原理が含まれているのですね。

池田 仏法では、この地球という国土も、一個の生命的実在とみなすのですから、とうぜん、いかなる国土にも、百界千如の原理が内包されていると考えねばなるまい。だが本章では、衆生、といっても人間生命に限定しているが、私たちの生命状態と、それに関わり合う国土の状況にしばっていくことにしよう。

——『三重秘伝抄』の、きわめて簡潔な文があります。「地獄は赤鉄しゃくてつに依よって住し、餓鬼えんぎは閻浮えんぶの下・五百由旬に住し、畜生は水陸空に住し、修羅は海ほとりの畔・海の底に住し、人は大地に依って住し、天は宮殿に依って住し、二乗は方便土に依って住し、菩薩は実報土じつほうどに依って住し、仏は寂光土じやくこうどに住したもうな

り云云」と記されています。ここで、十界の国土を詳細に検討する時間的余裕もなさそうですので、核心だけをとりあげていきます。地獄界の住する国土が赤鉄であるとは、どういう意味でしょうか。

池田 苦悶する衆生にとって、いかなる環境も「赤鉄」と化す。この「赤鉄」というのは、まっ赤にやけた鉄のことだが、赤鉄のなかにあり、激痛にのたうつ生命を地獄の衆生というのです。まあ、現実には、赤鉄のなかで人間は生きられないだろうが、それほどの苦悶と苦痛にさいなまれるのだと考えれば、少しは実感がわくのではないでしょうか。

たとえば、戦車が走り、ロケットがとびかうベトナムの国土は、まさに赤鉄の様相を示しています。ビル火災で、煙と火炎につつまれた空間も、地獄の国土だし、原爆とか、水爆のさくれつする国土も、地獄以外の何物でもありません。それらの国土には、地獄の衆生しか存在しないでしょう。だが、ベッドのうえの若者の場合を考えてみよう。他の人にとってベッドは、人界とか天界の国土にあたるかもしれない。ところが、苦痛にのたうつ若者にとっては、ベッ

ドも、室も、いや、自己の肉体さえもが地獄の依報と化している。

——餓鬼界が「閻浮の^{えんぶ}下・五百由旬」の国土をもつとあります。これは、餓鬼の衆生の生命状態をあらわしているのでしょうか。

池田　むしろ、先ほどの地獄の国土にも関わってくるのだが、生命論としてのべていくとつぎのようにいえないだろうか。

地獄の国土は、ただ生きることに、つまり、生存の欲望とか、権利さえ奪い去っていく環境をさし、餓鬼界の住む国土は、本能的な欲望さえも十分にはかなえられない依報を意味している。たとえば、地下の深坑などでは、生き物が食糧や水分を確保するものもむずかしいでしょう。本能ばかりではなく、他の欲望においても、その激しさにもかかわらず、容易に手にすることができない。そうした環境が、餓鬼の国土ではないかと思う。

——つぎの、畜生が水陸空に住むとあるのも、私たちのまわりの生物の住所を示しているということだけではないように思えるのですが——。

池田　魚にとって水、獣にとって陸地、そして、鳥にとって空の存在は、い

かなる役割りをはたしているのだろうか。

——欲望論からしますと、それぞれ、本能的欲望をかなえさせてくれる場所です。

池田 人間の生命でも、畜生界の衆生となれば、その人にもなう依報は、本能充足の場と化すのです。家庭でも、職場でも、また社会や大自然においても、それらのところに畜生の衆生がみいだしうるものは、ただ、本能を満足させる対象でしかありえないと思う。

——それでは、もし、修羅界の衆生でしたら、これらの環境は、みずからの勝他の念を発揚するところとうつるのでしうか。

池田 『三重秘伝抄』には「修羅は海の畔・ほとり海の底に住し」とあったね。修羅は、海の畔とか、大海の底に、天上界の宮殿にも似た住居をかまえて住むという。そして、つねに、帝釈などの諸天に勝ることを願って、天空高く登りゆくことを試みるが、『佐渡御書』にもあったように、帝釈にせめられると小身となってしまふ。これらのことから、修羅が、海の畔とか、とくに、大海の底

にきずきあげた、彼らなりの「宮殿」の意味を考えてみるとしよう。修羅の巨大な「宮殿」は、まさしく、勝他の念のあらわれです。海の畔とか、とくに大海の底は、こうした「宮殿」をつくれるだけの自由をそなえた環境ともいえましよう。

——おそらく修羅というのは、歴史的には遠くインドの原住民の神で海に関係があつたと思われませんが、生命論から光りをあててこれを用いられたと思います。高潮とか津波とか波浪の世界を、修羅という生命の世界にたとえたものですね。

池田 修羅の身と、それがつくりあげた住居は、たえず、重苦しい重圧とか、怒濤どとうの海水にさらされている。また、波静かな海辺であつても、その水に貯えられたエネルギーは、あらゆる生命をおびやかす力を内包していると考えねばなるまい。つまり、修羅界の国土とは、修羅の衆生の生命にとって、たえず、重苦しい雰囲気につつまれたり、荒れくるう波のように猛りたけ、そして闘争どうじょうの世界を示しているのではなからうか。

——その点、人界になりますと、平穩な生命状態をもたらす依報をともなっています。「人は大地によって住し」とありますが、人間にとって、大地は、まさに、生存の基盤ともいえますね。

池田 大地というのは、いちおう、人間らしい安らぎを与えるような環境をさしていると思う。たとえば、同じ家庭という場であっても、修羅界の家庭だと、猜疑心とか、嫉妬とか、憎悪があれくるっているでしょう。たとえ、表面は波一つ立たなくても、心の奥の戦いがやむことはあるまい。ところが、人界の国土としての家庭だと、家族が、疲れた身心を憩わせ、明日へのエネルギーを補充する場となっています。

——天界の宮殿は、あらゆる種類の欲望が、そのまま充足する場をさすのでしょうか。

池田 欲望は、生命の内奥からつきあげてくる、生きる力です。その欲望が、すんなりと満足すれば、私たちは楽を感じるとともに、自由の境涯をかみしめるでしょう。そうした、あらゆる欲望——といっても、この場合は六道の範囲

内のことだが——を満足させてくれる条件をもった世界を“**宮殿**”と表現したのでしよう。

これで、六道の国土が終わったわけだが、六道の衆生は、自己の欲望や衝動の働きかけに支配され、その喜びを環境的条件に依存しているのに対して、四聖においては、自己自身に対する生命主体の能動性が重要になる。このような意味をかみしめて、二乗の住む方便土を考えていくと、私たちの生活の場は、いずこであろうと二乗の国土にと変革することも可能だと思われる。

——日常的な場を考えますと、大学の研究室とか、アトリエとか、また、静寂なたたずまいをみせる大自然の懷にいだかれたところなどは、二乗の衆生の国土ですね。

池田 声聞や縁覚の生命の特質は、反省的自我にありました。その自我の働きが、宇宙と人生にむけられると、そこに、無常の世界が展開する。とともに、その無常の世界の奥に、この世界を無常としておりなす大宇宙の法則の存在することを、二乗の我は、かいまみるのです。したがって、方便土とは、こうし

た自我のもつ知識や知恵にてらされて、宇宙とか、社会とか、生命そのものを律する法則がうかびあがった国土と考えることができましょう。

とくに、縁覚の生命は、直観的な知でもって、生生流転する世界をつらぬき、真理や、かくれた美や、善なるものを発見する。まあ、こうした知恵が働きやすい環境としては、学者、哲学者、芸術家などにまつわる国土があるでしょう。しかし、庶民の英知は、家庭のなかに愛をみいだし、政界に政治を支配する法をみいだし、産業界には経済の論理を発見しうるといえないであろうか。

——それに関連して思索しますと、菩薩界の実報土というのは、利他の生命の活躍する場といつてよいでしょうか。

池田 菩薩界の衆生の特徴は、利他の実践にあり、利他的自我の発動にあつたと思う。しかも、利他の行為は、あらゆる生命的存在に巣くった慢心とか、利己的な生命とか、魔性の胎動への、真正面からの挑戦であるといえましょう。ゆえに、菩薩の生命は、たとえば、いかなる状態の依報であろうと、それを変革し、利他の行為の発揚する場にと変えてしまふのです。菩薩の世界はもはや

現実をはなれた別世界に生きるのではない。実報とは確實なる手応えであり、菩薩の生きるどころ現実的、積極的な意味をもった世界が展開する。そして、仏界の衆生の住む国土とされる常寂光土ともなれば、かの、仏の偉大な生命にそなわった英知と慈悲力がかがやきわたる世界となるのです。

常寂光土では、あらゆる存在物に巣くった生命の魔性の働きはつねに打ち破られ、歓喜のうずにはたされた人びとの生命の流れが、大宇宙をもつつみこむばかりの光明をはなつて、とめどもなく噴出しつつけています。その顕現の場が、政界であれ、産業の領域であれ、職場であれ、また、日本という国土であれ、そこに、仏の生命は、無明の闇を吹きはらう英知を駆使して、宇宙と生命の根本的な「法」をみいだしていくのではなからうか。同時に、たくましい慈悲の力は、英知によってみいだした「根本法」の体現を可能にすべく、すべての生命的存在への「拔苦与楽」の働きかけを一瞬もやめることがない。

このように考えて、常寂光土を、衆生の働きとともにとらえれば、生きとし生けるものに、生きることの歓びと、その知恵と、そして慈悲力を与えつつけ

る国土であると了解できよう。先に、地獄の国土を、生存の権利を奪い去っていく環境であるといいましたが、いま、この定義と相対して仏の国土を一言にしていえば、それは、生けるものに、その権利を保障し、しかもなお、新たな生を創造しゆく活力、蘇生の力を与えずにはおかない環境世界と推察しうるのではないだろうか。

「一念三千」の実践

——『三重秘伝』に、つぎのような問答が記されています。問いのほうには、「止観の第五に云く『此の三千は一念の心に在り』等云々、一念微少何ぞ三千を具するや」とあり、それを受けて「答う凡そ今經の意は具遍を明す、故に法界の全体は一念に具し一念の全体は法界に遍し、譬えば一微塵に十方の分を具し一滴の水の大海に遍きが如し云々」とあります。この文のなかに、仏法哲理の精髓である「一念三千」論が、きわめて端的に説かれていると思うのですが。

池田 仏法で「一念の心」というと、瞬間、瞬間の生命とも考えられるが、じつは生命それ自体ということなのです。つまり、私たちの生命の全体像とい

ってもよい。瞬間の胎動として顕在化する人間生命を、ただ、その現象面のみを追って皮相的にとらえると、『三重秘伝抄』の問いにもあるように、「一念微少」との感をまぬかれないかもしれません。

しかし、瞬間ごとの流転をおりなす生命の奥深く、探索の手をのばすにつれて、私たちの瞬時の生は、時空へと拡大し、ついには、宇宙生命そのものになってしまふのです。逆にいえば、あらゆる生命的存在をささえ、生みだし、創造しゆく大宇宙本源の實在から、その具体的な個性化、個別化の道をたどった、一つの独自の生命体こそが、私たち自身であることに気づくはずです。

こうした、宇宙生命自体と連動し、融合しつつも、事実存在としては、それぞれの個性を失わない独自の實在を、仏法では「一念」といい、また「一念の心」という。その「一念の心」に、十界を互具し、それに関わり合った十如是を含んでいる。ここまでは、百界千如と表現する、仏法用語の意味だったね。

——一念三千の「三千」とは私たちの生命に、十界、十界互具、十如是、三世間、などが、たがいに関連し合いつつも、渾然一体となってくみこまれて

いる事実を、これらの原理を「乗ずる」ことによって表現したのですね。

——「一念三千」の哲學というのと、もしその意味を十分に理解できなければきわめて単純な数字計算にしか思えない人もいるでしょうね。

池田 三千という数字にとらわれると、この哲理の深遠な意味をみうしなうこともあるでしょう。だが、あらゆる生命的存在の奥行き、厚み、時空への広がり、律動性、統一性、発動性などから、因果の理法に至るまでの、完璧と称しても過言ではない立体的な全体像を、考えうるかぎりの観点というか、各種のこととなった次元から分析し、さらに統合しようと試みた仏法的思索の結晶が「一念三千」論なのです。

「一念三千」論の哲學的内容については、これまでのところで、ほぼ明らかに思ったと思うので、最後に、「一念三千」という哲理を、私たちが現実生活に生かしていくための具体的な方途に関して、少しばかりディスカッションを重ねておこう。

——その点に関してですが、先ほどの『三重秘伝抄』の問答のうち、答え

のほうに「今經の意は具遍を明す」とあります。この場合の、今經とは『法華經』ですが、その意からすると「一念三千」の哲理は、「具」すなわち「そなわる」という側面と、もう一つ、「遍」——あまねくゆきわたる——という側面の、二つの視座から明かしうると解釈できます。そのあとに、みごとな譬えを引きつつ、法界の全体が一念に具し、また、一念の全体が法界に遍しあまねと記されていきます。

法界の全体とのべているのは、大宇宙生命そのものをさすと考えられます。そうしますと、私たち自身の「一念」に、宇宙全体をも創り出し、脈動させる根源的な力と、それから各種の法則がくみこまれている事実については、ある程度わかるような気がします。それは、私の「一念の心」も、宇宙の源流にまでいたる内奥においては、宇宙生命をささえる根源力と一体となり連動していることを直視すれば、納得のいくところだからです。でも、それにもかかわらず、私の「一念」が、宇宙全体にあまねくゆきわたる、となると、考えこまざるをえない——。

池田 具体的に考えてみよう。たとえば、私たちの「一念」の所作を、隣人にむけ、地域をおおい、さらには、日本という国土から人類へと広げていくためには、いかなる発動力というか、境涯を体得すればよいのであろうか。

——宇宙大の発動性をもなった境涯ですから、十界論からしますと、ずばり、仏の生命をあらわすことです。十界互具論では、仏界を基調とした生命活動です。

池田 仏の生命の湧現につれて、宇宙源泉の慈悲とか、英知にいろどられた如是力が、その活動を開始し、仏界の「因果」を強化しつつ、私たち自身の生命が、仏界の衆生となる。仏界の衆生は、それぞれの生命にそなわった五陰を躍動させ、本然的な個性を最大限に輝やかせながら、自己の身体をみごとなまでに統一し、くずれることのない幸福を獲得するとともに、他の生命体をも、仏の生命のなかにつつまこんでいくのです。

地獄の衆生も、六道輪廻の「因果」に染められた衆生も、二乗の慢心におもむきがちな生命も、私たち自身の生の奥底から流出する「蘇生の水」にひたさ

れることによつて、すべての人びとの「一念」に内在する仏界への力が触発されるのではないでしょうか。仏界の触発が、たえまなく、しかも、あらゆる方向から行なわれるにつれて、私たちの周囲の人びとの境涯が徐々に変革し、やがては、菩薩界とか仏界とかを基調にした生命活動が、いたるところに現出するでありましょう。

——まるで、核反応(注21)みたいなものですね。はじめは、ほんの少しの核分裂が、起爆剤の役目をはたし、それが、ある一定の状態に達すると、こんどは、一挙に、すべての核が分裂し、あの驚異的なエネルギーの開放となります。核分裂の連鎖反応ですが、善悪を別とすれば——利用のしかたによつて、善にも悪にもなりますので——一つの思索の参考にはなると思われます。

池田 仏界を基調とした五陰の働きによつて、他の生命体の仏界を触発することができるので。仏界の触発は、宇宙にまで遍満しようとする仏の生命自体にそなわった特性にささえられて、かならず、仏界と仏界との連鎖反応をひきおこすと考えられる。

最初は、仏界の衆生にも、起爆剤にも似た役割りが課せられるかもしれない。だが、一人の生命から、とめどもなく流れ出る「蘇生の水」が、家庭という国土をうるおせば、家族を構成する人びとの基底部にも、変革の波がわきおこるでありましょう。

一つの家庭が、慈悲と英知の力強い光明をおびてよみがえれば、その家庭からわきだした仏界の「水」は、あるときには職場へと広がり、また、あるときには隣人へとそそがれ、さらには、教育の場、政治の場、産業の場をもうるおしつづけるのです。その水のおよぶところ、枯死寸前の草木が水をえてよみがえるごとく、砂漠を旅するキャラバンの群れがオアシスのほとりで憩うごとく、すべての衆生とすべての国土が、生を謳歌し、生きることの歓喜を味わいつづけるのです。

家族と家庭、隣人と地域、職業人と職場、医師と看護婦と患者と病院、教育者と子供たちと学校、法律関係者と法廷、政治家たちと議会——それらのすべてに「慈愛の水」がそそがれば、地域も、病院も、法廷も、議会も、また、

その国土に生を営む衆生の集団も、それぞれの特質とか個性を示す生命体として、仏界を基調にしての脈動を開始するのではないかと思う。さらには、こうした衆生の集団と国土が、こんどは、新たな起爆点となって、日本の大地をゆるがし、ベトナムの国土を変え、一波が万波を呼びつつ、人類と地球をも、死と絶滅への道から救いうる方途を打ちたてうるのではなからうか。

ともあれ「一念三千」の實踐には、無限の階層をなした衆生と国土を、その基底部からゆり動かし、仏界の国土としての常寂光土をきずきあげていく五陰の行動を、いかなることがあってもやめまいとする、悲願と称するにはあまりにも光輝にみちた理想と決意がこめられている。そして、仏法の、この哲理は、「一念三千」の当体としてありつづけようとする信仰者の生き方に、すべての生ある者の仏界を触発する起爆者としての役割りを託しているのではないかとさえ、私には思われてならないのです。

1 植物人間 人間の脳は、左右一対の半球と、これをつなぐ脊髄と連絡する棒状の部分、つまり、脳幹から成立している。そして、脳幹の上位に「古い皮質」があり、その上位に「新しい皮質」がおおいかぶさっている。

植物人間とは、大脳皮質の働きが停止し、ただ脳幹だけで保たれる生を送っている生命をさす。無意識のうちに、体温を調節したり、心臓を動かしたり、種々の物質代謝をおこなっているにすぎない生命活動である。

2 動物人間 植物人間に対して、動物人間と表現する意味は、大脳皮質の「古い皮質」の機能はまだ保たれているからである。「古い皮質」とは一言でいうと、本能の座と定義できよう。自己保存本能とか種族保存本能の顕現する座であり、情動のうごめく領域が「古い皮質」である。各種の動物においても、この「古い皮質」の発達は顕著であり、人間生命との共通部分で

もある。人間には、さらに高度の精神活動をなしうる場——つまり「新しい皮質」の発達がきわめて顕著であるが、その活動が停止すると、本能中心の生命活動となる。動物と、きわめて類似の生を送るゆえに、動物人間との名をつけることができる。

欲界の六天 欲界は欲望の世界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六界が属するという。そのうち天界にあつては、四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の六天が欲界に属するという。

色界の十八天 色界は物質だけが存在する世界。これに十八天が属する。梵衆天、梵輔天、大梵天、少光天、無量光天、極光淨天、少淨天、無量淨天、遍淨天、無雲天、福生天、広果天、無想天、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天。

無色界の四天 無色界とは物質のない精神の世界。これに空無辺处、識無辺处、無所有处、非想非非想处の四無色天（四处）が属する。

天界の壽命 四王天——日蓮大聖人の『顯勝法抄』には「人間の昼夜五十年をもって第一、四王天の一日一夜として其の壽命五百歳なり」とある。計算すると約一千万年となる。

忉利天——同じく『顯勝法抄』に「人間の一百歳は第二の忉利天の一日一夜なり其の寿一千万歳なり」とあり、約三千六百万年となる。

他化自在天——同じく「人間の千六百歳を第六の他化天の一日一夜として此の天の寿千六百歳なり」とあるところから、約十億年となる。

五衰 天上界に住する衆生の果報が衰えたときにうける衰相をいう。「涅槃經」に「衣裳の垢膩、二つには頭上の花萎む、三つには身体の臭穢、四つには脇下より汗出づ、五つには本座を樂しまず」とある。天上界の喜樂が、永続的なものではなく、崩れ去る運命にあることを示している。

六道輪廻 六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六界をいう。仏法を知らない衆生はこの六道を輪廻して出ることが無いという。人間変革による向上がなく、悪循環をくり返すことを教えている。

我思う、故に我あり フランスの哲学者、ルネ・デカルトのみいだした真理であり、彼は、この明らかな真理こそあらゆる學問の基盤であると主張した。この言葉、つまり「我思う、故に我あり」——コギト・エルゴ・スム (Cogito ergo sum)——は、彼の著書である『方法序説』にのせられている。

すべての知識を疑いつくしたデカルトは、ついに、疑っている自己の存在は疑えぬと知る。しかも「疑う」ことは、あることを偽であると考えることだから「疑う」と表現することと「考う」は同じ意味となる。デカルトは、考える自我、つまり理性を基点に、神の証明にむかい、さらに、精神と身体との相關にまで至り、有名な心身二元論が成立する。この二元論が、近代文明の哲學的基盤になりえたことは周知の事実である。

迹化の菩薩 本化地涌の菩薩に対する言葉で、迹仏の化導をうけた菩薩を指す。迹とは垂迹

の略で影という意味がある。この言葉には、化他行（利他行）を行なう菩薩ではあるが、本来の悟りを得るに至らず、厳しい菩薩行の実践を通して、それを得ようとする菩薩群との意味が込められている。

9 別教 一切経を三蔵教、通教、別教、円教と分けたうちの一つ。他の三蔵や通、円の諸教と別に、菩薩のみを対象として説かれているところからこの名がある。十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺の五十二位を説き、その一つ一つを長大の時間を要して修め、ようやく仏になるとする。

10 地涌の菩薩 『法華経』從地涌出品に説かれる菩薩。本地自行の仏の化導をうけた菩薩で、仏の久遠よりの本眷属であるとされる。久遠の悟りを得、その境地から利他の行を行なう。本化の菩薩ともいい、仏滅後の弘教はこれらの地涌の菩薩群に託されているとする。

11 堯舜 中国古代伝説の五帝のうち堯と虞舜のこと。堯は仁徳天のごとく、智は神のごとくで百官を適材適所に配し、人事は公明正大であり、とくに治水に功があったという。舜は堯の跡を継ぐ王で、よく善政を行ない、政治の法則を決めて君臣よく和合したといわれる。とくに「孝」の面で名があった。

12 逆説睡眠 睡眠中、普通は脳波がゆるやかになり、休息している状態を示すが、なかで、脳波がまるで目ざめているときと同じ反応を示すときがある。そのときを逆説睡眠という。この逆説ときは身体も変化し、眼球運動を起こしたり、心臓の拍動や呼吸が速くなったりする。この逆

説睡眠のときに夢を見るのではないかといわれている。

13 中道実相 あらゆる現象の本質、^{すがた}真実の相のこと。中道とは、空仮中の三諦（本書第一巻照）をそなえた「中」をいい、生命の本質という意味を含んでいる。実相は^{すがた}真実の相ということになる。

14 仮観・空観・中観 みずからの生命（一心）のなかに空・仮・中の三諦をみていくのを一三観といい、略して三観という。中国・天台の所立。なお空・仮・中については本書第一巻「生命をとらえる眼」の章を参照されたい。

15 RNA リボ核酸と呼ばれる遺伝物質の一つ。主に、DNAが細胞核のなかに存在するのに対して、細胞質に含まれているという。生命体に必要な蛋白質をつくるための情報はDNAに含まれているが、その情報はRNAに伝えられて——これをトランスファRNAとする——胞質のなかの、リボゾームという場所に運ばれる。リボゾームでは、RNAのもたらした遺伝情報にもとずき、アミノ酸を配列して蛋白質をつくりだす。なお、DNAについては、本書第一巻の注を参照されたい。

16 一対一対応 数学において、ある一つの集合の要素と、他の集合の要素の間で、一対一の対応が成立するとき、一対一対応という。たとえば、奇数の集合と偶数の集合では、一対一の対応が成立している（奇数に1を加えて対応させる。1に2を対応させ、3に4、5に6、と……うふうに対応させればよい）。

したがって、一対一対応の集合の間では、一方の値が決まれば、他のほうも自動的に決まる。普通の物体の運動は、質量や速度によって一意的に決まるから、一対一対応の世界で考えらるるといつてよい。

17 心地観經 『大乘本性心地観經』のこと。四恩報恩思想を中心に、阿蘭若に住して心を観る功德を明かすという。釈迦滅後の令法久住を説く。唐の般若三蔵訳で八卷十三品ある。

18 三世 過去世、現在世、未来世のこと。仏法では生命の永遠を説き、現在世のみではなく、過去、未来にも生をうけるという。そこから三世という言葉が用いられた。永遠という意味にも用いられる。

19 十住毘婆沙論 竜樹は仏滅後七百年ごろ、南インドに出た論師。大乘を弘めた。その著にある『十住毘婆沙論』は『十地毘婆沙論』ともいい、菩薩の十地について詳しく説明している。全十七卷。鳩摩羅什訳。

20 俱舍論 『阿毘達磨俱舍論』のこと。世親著、玄奘訳。三十卷。仏教内外の諸異説に対し、仏教の真理を説いた論文集であり、当時の科学や哲学も入れられている。

21 核反応 一般に原子核に粒子や光りが当たったときの反応をいうが、核分裂と核融合反応は有名である。

核分裂は、ウランに中性子を当てると分裂して多量のエネルギーを出す反応で、スピードを制御しないと爆発的に連鎖反応を起こす。これが核爆弾であり、制御すると永続的にエネルギー

—を生み出す。これが原子炉である。

核融合は、軽い原子核が融合して別の原子核をつくる際に多量のエネルギーを出す反応。エネルギーを得るにはこの核融合反応を用いる方が害が少なく、合理的だといわれるが、この反応を起こすだけの高温が開発されていない。

核分裂、核融合とも、 $E=mc^2$ （ m は質量、 c は光速）の原理にそい、一定の質量が失なわれるとき膨大なエネルギーが生ずる反応である。

著者略歴

昭和3年1月、東京都に生まれる。45歳。富士短期大学経済学科卒。現在、創価学会会長、日蓮正宗法華講総講頭。昭和22年、19歳にして戸田城聖前会長に会い、その逝去の日にいたるまで師事。昭和33年6月、創価学会総務。昭和35年5月、創価学会第三代会長に就任。

著書に「人間革命」(第一～七巻)「私の人生観」「私はこう思う」「わたくしの随想集」「女性抄」「私の提言」「科学と宗教」「立正安国論講義」「私の釈尊観」ほか多数がある。

生命を語る 第二巻

昭和四十八年七月二十五日 初版
昭和四十八年七月二十九日 第五刷

定価 六八〇円

著者 池田大作

発行者 島津矩久

発行所 株式会社 潮出版社

東京都新宿区南元町一四一
電話東京(03)357-7112(代)
振替東京六一〇九〇番

郵便番号一六〇

(乱丁・落丁本はお取り替えいたします)